

2010年度 修士論文

小学校低・中学年の
スキー授業の学習指導に関する研究

Research of instruction the Skiing lesson for
Lower and the middle grades
In the Elementary school

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツ文化研究領域

5009A069-1

東村 八千代

Higashimura, Yachiyo

研究指導教員： 吉永 武史 教授

目次

序章

第1節 問題の所在	… 1
第2節 研究の目的	… 1
第3節 研究の方法	… 1
第4節 研究の意義と限界	… 2
第5節 用語の定義	… 2
第1章 学校体育におけるスキー授業の実態と課題	… 3
第1節 学校体育におけるスキー授業の実態	… 3
第1項 スキー授業に関する実施状況	… 3
第2項 北海道のスキー授業の実態について	… 8
第2節 学校体育におけるスキー授業の課題	… 16
第1項 指導者に関する課題	… 16
第2項 学習環境に関する課題	… 18
第3項 指導方法に関する課題	… 21
第4項 評価に関する課題	… 23
第3節 学校体育のスキー授業の意義とあり方	… 28
第1項 学校体育のスキー授業の意義	… 28
第2項 学習指導要領に対応したスキー授業のあり方	… 30
第2章 スキー技術ならびに指導体系に関する理論的分析	… 33
第1節 全日本スキー連盟の指導書にみる技術ならびに指導体系	… 33
第1項 スキー技術ならびに指導体系	… 33
第2項 スキーの楽しさを発展させるための学習過程	… 36
第3項 発達段階を踏まえた指導のあり方	… 37
第2節 児童期のスキーの技術ならびに指導体系	… 39
第1項 スキー技術の系統性と学習指導過程	… 39
第2項 スキーの学習指導計画の作成ポイント	… 44
第3項 スキー授業の指導における注意点	… 49
第3章 スキー授業の学習指導プログラムの実証的検討	… 51
第1節 実験校の地域特性とスキー授業の実施状況	… 51
第1項 鱒ヶ沢町の学校とスキーに関する現状	… 51
第2項 小規模校の体育の実態	… 51

第2節 小学校低・中学年対象としたスキー授業の学習指導プログラムの検証	… 5 2
第1項 検証授業の対象	… 5 2
第2項 スキー授業の学習指導プログラムの作成	… 5 3
第3項 実際の学習指導過程	… 5 9
第4項 学習成果の検証方法	… 6 4
第3節 検証授業の結果と考察	… 6 8
第1項 主観的評価からみたプログラムの成果検証	… 6 8
第2項 パフォーマンス評価からみたプログラムの検証	… 8 0
第4節 スキー授業の学習指導の修正プログラムの提案	… 8 2
第1項 学習指導プログラムの修正ポイント	… 8 2
第2項 スキー授業の修正プログラム作成	… 8 2
結章	
第1節 本研究のまとめ	… 8 4
第2節 今後の課題と展望	… 8 6
引用・参考文献一覧	… 8 7

第1章 学校体育におけるスキー授業の実態と課題

第1節 学校体育におけるスキー授業の実態

本節ではまずスキー授業の実態を明らかにするために、朝日新聞ならびに読売新聞に掲載されたスキー授業に関する調査結果と、北海道における小学校のスキー授業について検討を行なっている三浦（1986, 1987a, 1987b, 1989）の論文を中心に分析を進めていく。

第1項 スキー授業に関する実施状況

1) 減少化するスキー授業

スキー授業は、積雪のある地域において、小学校では「自然とのかかわりの深い雪遊び、氷上遊び、スキー、スケート、水辺活動などの指導については、地域や学校の実態に応じて積極的に行うことに留意すること」（文部科学省，2008，p.101）という位置づけで実施されている。しかし、近年では、そのスキー授業が減少傾向にあることが新聞記事などで指摘されている。

表1は、2003（平成15）年12月13日に読売新聞の朝刊に掲載された、秋田県における1980年度と2002年度の小・中・高等学校のスキー授業実施率を示したものである。

表1-1 秋田県のスキー授業実施率（読売新聞，2003）

	小学校	中学校	高校
1980年	89% (370校中328校)	61% (153校中94校)	31% (67校中21校)
2002年	71% (311校中221校)	20% (136校中27校)	23% (64校中15校)

※文章を元に作成

表1より、小学校が89%（370校中328校）から71%（311校中221校）、中学校が61%（153校中94校）から20%（136校中27校）、高校が31%（67校中21校）から23%（64校中15校）と、いずれの校種においても1980年と2002年の比較で減少していることがうかがえる。特に、中学校では約3分の2の減少となり、地区によっては実施率がゼロであったとしている。学校の児童・生徒数が減っていることを考慮すれば、さらにスキー授業を経験している児童・生徒は少なくなっている（読売新聞，2003）。

表2は、2004（平成16）年11月29日に朝日新聞の朝刊に掲載された、北海道教育委員会スポーツ健康教育課による2004年度の北海道の公立学校のスキー授業実施予定校数の調査結果を示したものである。

表 1-2 北海道のスキー授業実施予定校数（朝日新聞，2004）

	小学校	中学校	道立高校
2004 年度	1058 校 (約 75%)	412 校 (約 58%)	199 校 (約 74%)

※文章を元に作成

表 2 より、小学校が 1058 校（全体の 75%）、中学校が 412 校（同 58%）、道立高等学校が 199 校（同 74%）となっている。2004 年度以前の調査結果は掲載されていないが、記事によると、小学校では 2002 年度からの変化はみられないが、中学校ならびに高校では減少傾向にあり、2003 年度に比べ 2%減っているという。中学校のなかには、スキー授業をやめてしまう学校もあり、その理由として、スキー授業のために取りやめた他教科の授業の埋め合わせが難しいことや、体育教師の全体数が減り指導が難しくなったこと、スキーに取り組むためには経済的に負担がかかること、家庭の経済状況によって子どもの技術や意欲に大きな差がでてしまうことなど挙げられている（朝日新聞，2004）。

また、表 1-3 ならびに表 1-4 は、2007（平成 19）年 1 月 17 日に朝日新聞の朝刊に掲載された、新潟県におけるスキー授業実施率と、過去の新潟県のスキー授業の実施状況調査との地区別比較を示している。県学校スキー研究会が学校スキー活動の状況について調査を実施し、その結果を報告している。

表 1-3 新潟県内小中学校スキー活動実施状況（校）（朝日新聞，2007）

		小学校	中学校	特殊教育
調査学校数		589	247	23
実施している学校（割合、%）		313 (53.1)	76 (30.8)	11 (47.8)
スキー活動の内訳	アルペン	283	67	10
	クロカン	147	33	5
	ジャンプ	1	5	0
	スノーボード	5	11	0

表 1-4 過去の新潟県のスキー授業の実施状況調査との地区別比較（%）（朝日新聞，2007）

	小学校			全体	中学校			全体
	下越	中越	上越		下越	中越	上越	
1976 年	12.3	75.8	79.8	不明	15.8	66.7	69.5	不明
1981 年	20.2	83.0	83.1	57.8	12.3	62.5	56.4	42.3
2004 年	20.6	75.9	89.2	53.1	4.9	47.3	81.8	30.8

※調査期間（04 年 11 月～05 年 2 月）

調査結果によると、スキー活動を実施している学校は、小学校で 313 校（実施率 53.1%）、中学校で 76 校（30.8%）、特殊教育諸学校で 11 校（47.8%）となっている。そのうち約 9 割で、斜面に立つポールの間を滑り降りる「アルペン」を実施していた。地区別では、スキー場が近い上・中越の学校の割合が高かった。前回の 1981 年の調査と比べると、小・中学校とも実施割合はやや減少した。特に中学校は増減が激しく、上越地区では 25.4%増えたのに対し、中越は 15.2%、下越は 7.4%減っていた。スキー場が近い中越の学校の割合が減少したのは、完全週 5 日制になったことや授業時数が 1981 年までの 105 時間から 2004 年は 90 時間に減少していることが関係しているとも考えられるが、2004 年は新潟県中越地震が発生した年であるために特別実施率が減少したと考えられる。また、1981 年の回答率は 94%と若干足りないこともあり、この結果がすべてではないとしている。

アルペンについては、小・中学校ともに約 8 割が外部の講師を活用していることなどが指摘されており、教職員自体のスキー離れが進んでいる実態が明らかにされた。同研究会は「雪国の冬の活動として持つ意味合いを再考したい」と課題を掲げ、「スキーを生涯教育の視点から問い直し、学校教育に確実に位置づける必要がある」と述べていた（朝日新聞、2007）。

表 5 は、2010（平成 22）年 3 月 11 日に読売新聞の朝刊の記事に掲載された長野県のスキー授業実施状況で、以下のように述べられている。

表 1-5 長野県のスキー授業実施状況（読売新聞，2010）

小学校	中学校	高校
94.6%（365 校）	18.2%（35 校）	28.4%（25 校）

※文章を元に作成

長野県のスキー授業実施状況は、小学校が全体の 94.6%の 365 校、中学校が全体の 18.2%の 35 校、高校が全体の 28.4%の 25 校となっている。長野県教育委員会は、スケートリンクの減少から、県内のスケート授業の減少、そして競技人口が減少することも危惧し、このままでは、冬のスポーツに縁のない県出身者が増えてしまうことを指摘していた（読売新聞，2010）。

ここまでスキー授業に関する実施状況についての分析を行ってきた。その結果、過去に比べてスキー授業が減少していることと、小・中学校の実施率の差が大きく、中学校では特に実施率が低いことが明らかになった。このようなスキー授業の減少化の原因として、週 5 日制となったことによって授業のやりくりが難しくなったことや、学習指導要領において体育科・保健体育科の年間授業時間が 90 時間と減少し、スキー授業をやめてしまう学校があったことだと考えられる。文部科学省は週 5 日制について、「学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、子どもたちに生活体験、社会体験や自然体験など様々な活動を経験

させ、自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などの『生きる力』を育む^{注1)} ためとしているが、学校からスキー授業を減少させる要因となっているのも現状のようである。また、教師のスキー離れは、少子化による各学校の体育教師数の減少や、日本のスキー人口の減少から特に若い教師がスキーから離れていることも原因として考えられる。さらに、天候に左右されやすいスキー授業だが、今日の温暖化減少による影響で、雪不足などスキー授業のやりくりがさらに難しくなっているとも考えられる。そして、スキーは高価な用具を必要とするスポーツである。すべての児童・生徒が冬季の数回の授業のためにスキー用品を購入することは難しい。そういった現状を無視してスキー授業を行うことになれば、家庭の経済状況によって児童・生徒の技能や意欲を二極化させてしまいかねない。

2) スキー産業や地域社会と深くかかわるスキー授業

ライフスタイルの変化によりスキー人口が減少傾向にあることや、温暖化による雪不足等で日本の沢山のスキー場が休業したり、閉鎖したりしている。スキー授業は、スキー産業にも大きな影響を与え、そして地域社会の将来を担うためにも、重要な役割を果たしている。一般の体育授業は学校の体育館や、校庭などを使用するが、スキー授業はスキー場を利用することが多い。スキー場にとって、学校の児童・生徒はスキー場利用者であると同時に、将来スキー場を利用してくれるだろうお客様である。

2006（平成 18）年 3 月 31 日の朝日新聞の朝刊では、積極的にスキー授業を取り入れている新潟県南魚沼市立上関小学校の例が挙げられている。この学校の近くには石打丸山スキー場があり、石打ジュニアスキークラブは上関小学校のクラブ活動を支援するために 1982 年に設立された。同クラブ主任コーチは「学校とスキー場が手を取り合い、スキーを守らなくてはならない時代なんです」という。児童の親の大半がスキー関係者という同小学校では、校内でできるクロスカントリーを中心に、シーズンに 3 回は近くのスキー場でアルペンスキーの授業を行い、地域ボランティア委員がスキー授業に加わっている。これはスキーが出来る教師が少なくなっていることも一因であるという。スキー授業が減少している現状に対して、地元の方は、「将来の芽をつまないで」と訴え、スキー関係者は「観光立国を進める新潟として、子どもたちが雪国文化から離れてしまう現状はとても残念」と話している。スキー場支配人は「進学や就職で県外に出た若者がスキーを知らなければ、スキー人口のすそ野は狭まるばかり」と言う。しかし、県教育庁保健体育課は「観光振興と結び付けてスキー授業を奨励するということはない」としている（朝日新聞、2006）。

2007（平成 19）年 2 月 18 日読売新聞の朝刊では、ウインター・スポーツ王国北海道の危機に対し、この年から札幌市と札幌スキー連盟が学校のスキー授業を維持してもらうため、指導員の派遣事業などを始めたことが紹介されている。北海道索道協会の久住孝之事務局長は「道内の景気低迷で、スキーに時間やお金をかけられる人が減っている。学校の授業が減ったのも大きい」と話す。授業を廃止する学校も年々増えており、札幌市では小学校ではほぼ全校がスキー授業を行っているものの、中学校では 98 校中 31 校止どまりである。

景気低迷のあおりで、家族スキーも減っているとみられるうえ、少子傾向にある子どもがスキーをしなくなると、将来のスキー文化の存続も危ういとみて、札幌市と札幌スキー連盟が中学校にボランティア指導員を派遣する「スキー授業支援事業」を始めた。体育教師の不足をカバーし、学校側に授業を維持・復活してもらうのがねらいであるとし、23校から派遣要請があったという（読売新聞、2007）。

2008（平成20）年11月22日の読売新聞の朝刊では、東北索道協会岩手地区部会と「いわてウインターリゾート協議会」（盛岡近郊7スキー場で構成）がともに、小中学校のうちにスキーの楽しさに触れてもらうことで、スキー人口の減少に歯止めを掛けるねらいとして、学校でもっとスキーを教えてもらうよう知事を訪ねるとしている。同部会は、スキー客離れが進む背景には、県内の小学校でスキー授業を取り入れている学校が減っていることも影響しているとみている。同教委もほぼ同様の認識で、学校でのスキー授業について実態調査に乗り出している（読売新聞、2008）。

県やスキー場関係者が、スキー産業の維持を目的として、スキー授業を奨励することは学校教育の目的に合致しない。しかし、各地域によってその地域にあるスキー場によって経済効果が生まれ、地域の生活が成り立っている現状もある。以上の事例では、スキー関係者、県教育庁保健体育課、札幌市、札幌スキー連盟、東北索道協会岩手地区部会、いわてウインターリゾート協議会、岩手県教育委員会の声取材されている。それぞれの地域ではスキーが盛んで、地域の人々は小さい頃からスキーを経験し、スキーがその土地の代表的なスポーツとして根付いている。このような声が出てくる背景にはスキーという文化をこれからも継いでほしいという思いがある。したがって、地域と学校、教育委員会とスキー連盟、スキー場等それぞれがスキー授業における問題の解決に向けて協力していくことが、スキー授業の減少化を食い止める一手となると考えられる。

3) 学校におけるスキー授業の事例

2005（平成17）年2月4日の朝日新聞の朝刊では、糸魚川市立根知小学校のスキー授業の事例が紹介されている。47人の児童の中にスキーができない子どもはおらず、スキーの板をはくのも初めてという子が毎年何人か入学してくるが、シーズンが終わるころには中級コースを難なくこなすようになっている。スキー授業は計3回、指導者14人のうち10人は地元住民で、全員が上級スキーヤーである。授業に先立ちPTAの企画でスキー指導者講習会を行い、保護者ら17名が参加した。スキーを通じて、大人と子供たちが接し、意思疎通を図る。藤田衛教頭は「そうやって育った子供は、大人になり、また、自分たちが教わったことを、地域のために返してくれるのではないのでしょうか」と話している。このように、地域全体が後押しするところは珍しいとしている（朝日新聞、2005）。

2004（平成16）年11月29日の朝日新聞の朝刊では、北海道スキー連盟が教員を対象とした技術講習会を行うことが紹介されている。スキー指導の専門家を招き、実技や指導法

などを講義する。同連盟の戸塚浩司事務局長は「授業の減少に危機感を持っていた。先生たちの講習を通じて、子どもにスキーの楽しさを知ってもらい、スキー人口のすそ野を確保できたらと考える」と話す。道教委は「学習指導要領にも、『地域、実態に応じたスポーツ』があり、子どもたちにはスキーなどの冬季スポーツに触れてほしい」としている（朝日新聞，2004）。

このように、スキー授業には PTA やスキー連盟のサポートも重要であることがうかがえる。そのため、地域のスキー場やスキー指導者が充実している環境では、望ましい形でスキー授業を行うことが可能である。その反面、自然環境に恵まれていても、PTA 等地域の協力がなければスキー授業は難しいといえる。スキー指導ができる教師がいないため、外部指導者を要請しようとしても、予算の関係で難しいとなるとスキー授業は実施することができないということになってしまう。したがって、実際にスキー授業が行われている学校においてはほとんどが PTA などのサポートがあってスキー授業が成り立っていて、より良いスキー授業を実施するためには、外部のサポートや理解が必要であるといえる。

第 2 項 北海道のスキー授業の実態について

三浦（1986；1987a；1987b；1988；1989；1991）は、北海道の小・中学校におけるスキー授業の実施状況や課題について報告している。ここではそのなかで、特に小学校におけるスキー授業についてまとめた三浦（1987a；1987b；1989）について紹介する。

1) 北海道旭川市内の小学校のスキー授業の実施状況

三浦（1987a）は、北海道旭川市内の全小学校（63 校）を対象にスキー授業の実施状況を調査した。北海道のスキー授業では、アルペンスキーとノルディックスキーの両者が行われているが、「実際の体育授業について考えてみると、アルペンスキーの授業がその大部分を占めているのが実情である」（三浦，1987a，p.170）としている。ここでは、ノルディックスキーを歩くスキーとしている。

北海道旭川市内の全小学校（63 校）のスキー授業の実施状況の調査結果によると、63 校すべての小学校でスキー授業を行っており、歩くスキーを行っている学校は、49 校（全体の 77.8%）、アルペンスキー授業を行っている小学校は 61 校（全体の 96.8%）であり、ほとんどの小学校でアルペンスキー授業が行われている。さらに A タイプ「歩くスキー授業のみを実施している学校」、B タイプ「歩くスキーとアルペンスキー授業両方を実施している学校」、C タイプ「アルペンスキー授業のみを実施している学校」の 3 つの形態に分類すると、「B タイプの歩くスキーとアルペンスキーの両方を実施している学校は 47 校（全体の 74.6%）で、次いで C タイプアルペンスキー授業のみを実施している学校が 14 校（全体の 22.2%）、A タイプの歩くスキー授業のみを実施している学校は 2 校（全体の 3.2%）であったとしている（三浦，1987a，p.171）。多くの学校が歩くスキーとアルペンスキーの両方

を実施しており、この結果からほとんどの学校がアルペンスキー授業を実施しているということがわかる。

学年別の実施状況については、「歩くスキーのみを実施している A タイプの学校においては、スキー授業は 1 学年から実施され始めており、その実施率は 6 学年まで通して 100% であった。また歩くスキーとアルペンスキーの両方を実施している B タイプの学校において、歩くスキーの授業は同様に 1 学年から実施されてはいるものの (97.9%)、その実施率は 4 学年を除いて高学年になるほど低くなる傾向を示しており、6 学年においては激減しわずかに 10.6% であった」(三浦, 1987a, p. 171) とし、「アルペンスキーのみを実施している C タイプの学校においては、アルペンスキー授業は 1 学年から実施され始めており、その実施率は 6 学年まで通して 100% であった。また歩くスキーとアルペンスキー授業の両方を行っている B タイプの学校においては、アルペンスキー授業は同様に 1 学年から実施され始めているものの (48.9%)、その実施率は高学年になるほど高くなっている傾向を示しており、4~6 学年においては 100% を占めている」(三浦, 1987a, pp. 171-172) とし、「共通している点として、歩くスキーあるいはアルペンスキーのうちいずれか一方を実施している A タイプ・C タイプの学校においては、それぞれ 1 学年よりスキー授業の実施を始めており、その実施率は 1~6 学年まで通して 100% であることを挙げることができる。また、異なる点としては、歩くスキーとアルペンスキーの両方を実施している B タイプの学校において、歩くスキーの場合には低学年においてその実施率が高くなっていることを挙げることができる。これらの結果を総合的に考えてみると、一種類のスキー授業しか実施していない A タイプ・C タイプの学校においては、1~6 年生まで一貫性があるが、二種類のスキー授業を実施している B タイプにおいては歩くスキーが低学年を中心的な対象として実施されているのに対し、高学年になるにつれて歩くスキーが次第にアルペンスキーへと移行していく傾向があるものと考えられる」(三浦, 1987a, p. 172) としている。この結果から、アルペンスキーの導入として、低学年で歩くスキーを取り入れていると考えられる。

スキー授業の各学年の時数については、「歩くスキーの場合には低学年で『10~12 時間』、高学年で『6 時間以下』の時数帯が多いのに対して、反対にアルペンスキー授業の場合には低学年で『6 時間以下』、高学年において『10~12 時間』の時数帯が多いことが分かった」(三浦, 1987a, p. 174) とし、「本調査結果の範囲内で考え合わせると全体的なスキー授業の時数帯は 1~2 学年と 3~6 学年の 2 つのタイプに分かれるものと考えられる。またその平均的なスキー授業の総時数帯は、歩くスキー授業の場合には 1~2 学年において『10~12 時間』、3~6 学年において『6 時間以下』が最も多く、同様にアルペンスキー授業の場合には 1~2 学年において『6 時間以下』、3~6 学年において『10~12 時間』となっている」(三浦, 1987a, p. 174) としている。これは、歩くスキー授業とアルペンスキー授業の時間構成との関わりが関係していると考えられる。

スキー授業の時間構成については「歩くスキー授業において B タイプの場合には、1~3 学年において『2 時間つづきと 1 時間』の時間構成が最も多く全体の 53% を占めているが、

4～6 学年においては『1 日に 1 時間ずつ』が 57%を占めている。歩くスキー授業のみを実施している A タイプの場合には、『1 日に 1 時間ずつ』と『2 時間つづきと 1 時間』の時間構成であり、それぞれ 1 校ずつとなっている。アルペンスキー授業においては、B タイプの場合全学年とも『1 日に 4 時間以上』という時間構成が最も多いが、C タイプの場合には『2 時間続きと 1 時間』、『1 日に 3 時間以上』という 2 つの時間構成が多くなっている。時間構成についてはスキー授業の実施場所や経費との関係が影響するものと思われるが、これらの結果から判断すると、全体的に歩くスキー授業の場合には『1 日に 1 時間ずつ』などの比較的細かい授業時間の構成になっているのに対して、アルペンスキー授業の場合には『1 日に 3 時間以上』というような歩くスキー授業よりも大きな単位の時間構成となっていることが多いことが分かった」(三浦, 1987a, p. 174)としていることから、アルペンスキー授業は連続して行うことが多く、それは学年が上がるにつれて、つまり技能が上がるにつれて授業時数も増えるということになる。

スキー授業の実施場所については、「歩くスキー授業の場合、B タイプの学校において、全学年とも『学校の敷地内』が最も多く(特に 1～2 学年)、次が『学校近辺の公園・堤防・丘陵など』の順となっている。しかし 3 学年以上は低学年ほどの大きな差はみられない。また A タイプの学校においては、『学校の敷地内』、『学校外の常設のスキーコース』、『学校近辺の公園・堤防・丘陵など』の順に回答が多くなっている。アルペンスキー授業の場合には、B タイプの学校において、全学年を通して『常設のスキー場』が最も大きな数値を示しており、次いで『学校の敷地内』、『学校近辺の公園・堤防・丘陵など』、『遠くの公園・山など』と続いている。また C タイプの学校においては、1～2 学年では、『学校の敷地内』が最も大きな数値を示しているのに対して、3 学年以上の『常設のスキー場』の占める割合が最も多くなってきている」(三浦, 1987a, pp. 174-177)とし、「全体的にみて日常よく利用している場所としては、歩くスキー授業の場合には『学校の敷地内』、またアルペンスキー授業の場合には『常設のスキー場』であることが分かった」(三浦, 1987a, p. 177)としている。C タイプの学校において 1～2 学年では学校の敷地内の割合が大きかったことから、1～2 年生のスキー授業は、学校の敷地内であってもその学習が可能であることがうかがえる。

スキー授業の交通手段と所要時間については、「交通手段の分類としては『徒歩』、『定期路線バス』、スキー授業のための『貸切バス』、『その他』として教師自身の車や、PTA などによる保護者の車、スキー場保有のバスなど」(三浦, 1987a, p. 177)が挙げられ、「『徒歩』により移動している学校は 54 校中 7 校で全体の 13.0%にあたり、残りの 47 校 (87.0%) は何らかの形で自動車・バスなどを利用している。しかし、自動車・バスを利用しているも、往復の所要時間に『30 分以上』もかかる学校が全体の 30 校 (55.6%) もあった。これに『徒歩』で『30 分以上』もかかる学校を加えると実に 54 校中 37 校 (68.5%) もの学校が 1 校時前後またはそれ以上の時間を往復の交通に費やしていることになる。しかも、現地に到着した後の集合や準備運動、用具の装着などに要する時間などを考慮すれば実質授業時間はさらに少なくなるものと考えられる。しかしながら『45～90 分』と回答した学校

においては、3校時連続授業であったとしても実質授業時間はその2分の1～3分の1となってしまう。このため、所要時間が多くかかる場合には、当然のことながらスキー授業は移動に要する時間を考慮しなければならず、他の学習内容にはみられない連続した授業時間の構成となっている」（三浦，1987a，p. 177）と述べている。

続いて、スキー授業の所要時間と授業の時間構成の関係について「学校からスキー授業の実施場所までの往復に要する所要時間が比較的短い場合には小きぎみの時間構成となっているのに対して、所要時間が長くなればなるほどそれに応じて時間構成も大きな単位のまとまりが多くなっていることを特徴としてあげることができる」（三浦，1987a，p. 178）としている。多くの学校がスキー授業の移動に大きな時間を費やしているが、スキー授業の所要時間をどのようにとらえているのかについては、「B・Cどちらのタイプの学校においてもその過半数以上の学校が往復の交通に要する所要時間を、どちらかといえば否定的にとらえている割合が多いことが分かった」（p. 179）としている。まとめとして、同じ「スキー授業でありながら、実際の内容は各学校の立地条件や指導計画などに大きな影響を受けるためか、その実施状況については全小学校とも一様ではなく、各学校のタイプごとにかなりの相違がみられた」（三浦，1987a，p. 179）としている。歩くスキーとアルペンスキーの授業の「両者を実施しているBタイプの学校においては、全体として歩くスキー授業は低学年、またアルペンスキー授業は高学年においてその実施率が高かった。さらにスキー授業の時数についても同様の傾向がみられ、歩くスキー授業では低学年、アルペンスキー授業では高学年においてその授業時数が多く（中略）授業の時間構成や実施場所、あるいは移動にともなう交通手段や所要時間などについて（中略）歩くスキー授業のみを実施しているAタイプの学校においては、比較的授業時間の構成が細かく、移動に要する時間も少ない。しかし、一方のアルペンスキー授業のみを実施しているCタイプの学校においては、一回の授業時間がAタイプの学校よりも大きな時数単位の構成となっている。またバスなどの交通機関を利用する割合が高くなっているとともに、移動に要する所要時間をどのようにとらえているのかについては、これをどちらかと言えば否定的にとらえている学校の方が、肯定的にとらえている学校の割合より多かった。このことは、移動に要する所要時間にはスキー授業としての教育的価値があまりないと考えているものとも受け止められる。かりにこの所要時間が殆ど意味のない時間であるとするならば、実質の学習時間を減らさないためにも、この点について検討・改善される必要があるものと考えられる」（三浦，1987a，pp. 179-180）としている。スキー場で行うスキー授業は、移動の時間やマネジメント等にかかる時間が特に多く、その時間は他の学習内容にはない時間である。その時間に教育的価値がないとしても、スキー授業を行うということは、スキー授業を行うこと自体に教育的価値があるということである。

2) 北海道の小学校におけるスキー授業

続いて、三浦（1987b）は、北海道全土の小学校におけるスキー授業について調査してい

る。

北海道の地域区分を4つのブロックと支庁管内別に、道央（札幌、石狩、後志、空知、胆振、日高）、道北（上川、宗谷、留萌）、道南（桧山、渡島）、道東（十勝、釧路、根室、網走）に分け、実施率をみると、「道北（80.6%）が最も多く、以下道央（64.1%）、道南（45.7%）、道東（38.9%）」（p. 203）となっている。しかし「実施率は、ブロック単位よりも支庁管内別に特徴があることが分かり、スキー授業は地域の自然環境や学校の立地条件などに大きく影響を受けているものと考えられる」（三浦，1987b，p. 203）としている。

実施形態は、「全体では、『教科時および学校行事』においてスキーを実施している割合（73.0%）が高かった。また、ブロック別にみても同様の結果であった。『学校行事のみ』でスキーを実施している割合は最も少なく、全体では僅か3.8%であった」（三浦，1987b，p. 205）としている。また、授業時数については、スキーを実施していると回答のあった学校のうち、教科時においてスキー授業を実施していると回答のあった学校を対象として、その年間総授業時数を学年別にまとめている。その結果、「多くの学校の授業時数は11～14時間の範囲に含まれることが分かった」（三浦，1987b，p. 205）としている。「また一週間あたり3時間の体育授業を基準とすれば、この時数は約4～5週にあたることから、平均して冬季の1カ月余の体育授業は主としてスキー授業を実施していることがうかがえる」（三浦，1987b，p. 205）としている。

スキー授業で使用される板の種類については、「全体では、『アルペン用スキー（計4年：65.1%）』を使用している割合が最も多く、これを学年別にみると、高学年になるにつれその割合が高くなる傾向を示した」（三浦，1987b，p. 206）としている。これは、低学年が雪やスキーに慣れ親しむことをその主なねらいとしているのに対して、高学年はスキーを既成のスポーツとして位置づけを深めていることが一つの背景として考えられると述べている（三浦，1987b，p. 207）。加えて、学校体育のスキー用具について次のように述べている。「学校体育におけるスキー授業を前提とした場合、スキー用具はまず授業目的・目標を達成するために合理的かつ効率的・効果的しかも安全であり安価な教材であることが重要な条件となる」（三浦，1987b，pp. 207-208）とはいえ、やはりスキー用具は高価である。怪我の恐れも多いスキー授業では、用具の安全性も考慮しなければならない。

スキー授業の実施場所については、『『常設のスキー場（計5年：68.4%）』でスキー授業を実施している割合が最も多く、以下『校庭（計1年：47.4%）』、『学校近辺（計2年：16.4%）』の順であった。『校庭』においてスキー授業を実施している割合を学年別にみると低学年ほどその割合が高く、また同様に『常設のスキー場』についてみると高学年ほど高くなる傾向がみられたという。（三浦，1987b，p. 209）このような結果より、高学年になるにつれて、校庭よりも大規模な斜面や設備をもつ常設のスキー場へ実施場所を移行することで、スキー授業が既成のスポーツとしての内容を深め、その色彩が濃くなっていくことが分かったとしている（三浦，1987b，pp. 209-210）。

常設のスキー場までの所要時間は、『30分以内（計3年：38.3%）』の項目が最も占める割合が高く、次いで『15分以内（計1年：26.7%）』であった。『1時間以上（計2年：1.3%）』は全体的に低い割合であった」（三浦，1987b，p.210）としている。所要時間の問題については、「学校の近くにスキー場がない場合には当然スキー場を利用するために遠方まで行くことになり結果的には所要時間も増加することとなる。また学校近辺にスキー場があったとしてもその数が少なければ、同時に多数の学校がスキー場に入り込んだ場合には混雑が予想され、学習内容の展開に支障をきたす結果となりえない。実際のスキー授業においてこのような事態に陥らないためには、少なくともスキー授業に関わる内的要因を充実した上でこれに伴う外的要因を事前に把握しておく必要がある。学習環境は、特にスキー授業の場合、学校内のみで充実することは非常に難しい点も多く、外部環境を利用する機会が今後とも増加するものと思われるが、その一つの要素として所要時間の意味づけを明確にすることが重要であると考えられる」（三浦，1987b，p.210）としている。

スキー場までの交通手段は、『バス（計6年：68.7%）』の占める割合が最も多く、ついで『徒歩（計2年：22.6%）』であった」（三浦，1987b，p.210）としている。「交通手段は地域の環境、交通の状況や利用場所、利用人数、利用度、経費、所要時間などと密接な関連をもつため、個々の状況をふまえて解釈しなければならず、特定の基準を設定することは難しい。学習目標や内容、時間配分や実施場所などと総合的に検討しなければならないであろう」（三浦，1987b，p.210）としている。

スキー授業の時間配分については、「全体で最も占める割合が多かったのは、『2校時続きと1校時（計1年：52.9%）』であった。1～6年までの学年別にみると、わずかではあるが低学年において『2校時続きと1校時』の割合が高く、中・高学年においては『3校時続き』、『4校時以上』の割合が高くなっている」（三浦，1987b，p.211）としている。「スキー授業の時間構成についての明確な指標は提示されていないが、スキー授業に関する全体的なプログラム化、モデル化が必要であると思われる」（三浦，1987b，pp.211-212）と指摘している。

スキー授業に関わる障害は、「天候」、「経費」、「施設」、「健康管理」、「指導者数」、「技術」、「その他」、「無回答」という項目で、ブロック間にあまり共通した点がみられず、それぞれのブロックごとに検討している。「まず、道央では、『経費』、『施設』、『指導者』の割合が高く、これらの合計は全体の約75～82%以上を占めた。このうち『経費』は高学年になるにつれて増加しているのに対し、『施設』は減少している。また、道北では、『天候』、『経費』、『施設』がだいたい同様の割合を占めており大きな差はみられず、三者の合計で全体の約65～70%以上を占めた。『経費』は道央と同様に高学年なるにつれ増加しているが、『天候』、『施設』の割合は学年別による大きな差はみられなかった。道南では『施設（6年：37.0%）』の項目が占める割合が最も高く、次いで『天候（5年：21.9%）』と続いている。道東では道南と同様に『施設（2年：33.5%）』の項目が最も高い割合を占めたが、次は『経費（4年：29.1%）』の項目であった。これらをまとめると、各ブロック間に差はあるもの

の、全体として『施設』、『経費』に関する回答が多いことをその特徴として挙げるができる。『施設』とは具体的には学習の場所やその環境を指すものであるが、スキー授業に関わる『施設』を大きく一つの自然環境としてとらえることもできる。この場合スキー授業の学習目標や内容により学内の環境だけでは不十分となり、学内の大規模な施設を利用することも必要となるであろう。その際には事前の指導計画において、施設の規模、斜面の配置、リフト運搬力、児童数、所要時間などを総合的に検討しておかなければならない。また、学年や地域により相違はみられるものの、体育授業に関する大半の施設が学内において使用できるのに対し、スキー授業の場合にはその多くが学外に依存している。したがって、常設のスキー場は学内施設のように自由に利用できる学校体育の専用『施設』ではないため、他の領域の学習内容と比較して多くの外的要因が複雑に関与していることが考えられる。日常の体育授業場面における運動環境は自然環境とさまざまな点において密接な関係をもっているため、環境としての『施設』がもつ意味は大きい。特にスキー授業における環境・施設は、前述のようにスキーが対自然スポーツという特性をもつことから、非常に重要な要素であると考えられる。また用具の購入費用やスキー場までの交通費、リフト代などの『経費』についても、同様な面から推察することができる。しかしながらこれらの障害について、とりわけ上述のような内容に関しては、単独に問題点を解決し得る性格ではないことから、これらの問題をできるだけ減少させ改善の方向に導くためには、スキー授業の総合的な見直しや授業構造の再構築を検討することが必要であると考えられる」(三浦, 1987b, p. 215)としている。

3) 北海道内の小学校におけるスキー授業の二次的分析

さらに三浦(1989)は、道内の小学校におけるスキー授業の二次的分析として、スキー授業の障害についてまとめている。

スキーの用具について、「用具を『特に指定してない』場合には用具の併用(アルペン用スキー、ノルディック用スキー、両用スキーなどの用具の混用)により授業を実施していることも考えられるため、用具の種類により性能が一樣ではなく、子どもたちの学習における目標接近には当然質的差異が生じる結果となることが推測される。スキー用具は高価なため用具の種類を統一することにはかなりの負担があるが、指導計画と用具の関係からみれば、目的に応じてスキー用具がこれだけ高度化・細分化されている現在、異種類の用具では到底同様の成果を期待することは難しく、かえって事故や怪我の危険性を生ずる恐れさえある」(三浦, 1989, p. 118)と指摘している。スキーは、その用具の性能によって可能な滑走技術も異なる。したがって、スキー授業では取り扱うスキーを明確にするべきである。加えて、「アルペン用スキー」と「両用スキー」における障害は「費用・経費」だとし、その理由として、「一般的にはノルディック用スキーよりもアルペン用スキーの方が高価であること、加えてアルペンスキーでは校外のスキー場に有料の交通手段を用いて移動し、同様にリフトなどの機械力により学習環境を設定することが多いことなどが挙げら

れる」(三浦, 1989, p. 120)と指摘している。

実施場所については、「学内では実施出来ないため校外へ移動して授業を実施するアルペンスキー型授業は、その実施環境(自然環境と施設)の面からして校外施設依存型授業であることが多い。このような施設のひとつが民間経営であり、学校のスキー授業を前提にして建設・営業されていないため、そこで実施するスキー授業はおのずと制約を受けることになる。このような障害を単独に解決することは非常に難しいが、海での臨海学校などと同様に自然と密接な関係をもつ学習内容については総合的な改善策が必要になるものと考えられる」(三浦, 1989, p. 122)と指摘している。スキー場におけるスキー授業実施に際しては、スキー場が協力のもと実施できているのだが、学校施設ではないため、例えばスキー授業専用で使用できる初級者コースを確保できなかったり、一般のスキーヤーや、スキースクールのレッスンと一緒にコースを共有しなくてはならないことは避けられないのである。

さらに、学習指導要領において、スキー授業はその領域を明確に位置付けられていないことを指摘し、スキー授業の領域の位置づけについては各自の判断・裁量によるものと解釈することができるとしている(三浦, 1989, p. 125)。調査結果では、「独立したスキー領域」として位置づけている回答が最も多く、その障害として「指導者の技術」が最も高いとしている。このことから、「実際に各学校がスキーを一つの領域ととらえ指導者の技術不足を指摘する割合が高い以上、教員養成や現職教員の研修会などの段階においてもこのような実態を考慮することが必要」(三浦, 1989, p. 125)と指摘している。全日本スキー連盟では年に1~2回ほど学校教員等を対象としたスキー研修会を行っているが、負担額も大きく、場所も限られているため、参加が困難な教師は沢山いるだろう。地域のスキークラブの研修会で、教師のためのスキー指導講習会を同時に行うことや、教師の勉強会でスキー授業の研究がされていくことが望ましい。しかし、スキーのみに限らず、体育が苦手な小学校教師などに研究会や勉強会へ積極的に参加してもらうには、教師の教材研究等に当てる時間を増やすことが必要である。このように、指導者に関する課題は大きいといえる。次の節ではさらにスキー授業の課題について検討していく。

第2節 学校体育におけるスキー授業の課題

本節では、スキー授業における課題を指導者に関する課題、学習環境に関する課題、指導方法に関する課題、評価に関する課題の4つに分けて、具体的な事例にもとづきながら検討していく。

第1項 指導者に関する課題

ここでは、スキー授業における指導者に関する課題について述べていく。学校で取り込まれるスキー授業には、学校行事として学年全体や学校全体で行うスキー教室と、体育授業として行うスキー授業があるが、以下は、特に体育授業として行うスキー授業における指導者の課題について取り上げる。

1) 指導者の問題

スキー授業に取り組む時の障害としてまず、40名ほどの児童に対して1名の指導者で授業を行うという形態が挙げられる。三浦による北海道の中学校についてのスキー授業の実態に関する研究から、スキー授業の障害について「指導者に関しては、『指導者の技術』よりも『指導者数』の項目への回答数が多いことから、指導者自身の能力についてはそれほど障害とはなっていないが、それよりも指導者1人当りの担当生徒数の多さの方が実際の授業では障害となっている」（三浦，1991，p.157）と述べている。これは小学校にも当てはまるであろう。一斉指導の形態では、個々の技能の差が大きいスキー授業において、個々に応じた指導に限界がある。このことに対して、三浦は、「指導の質ばかりでなく、制度としての指導者数の問題。特に小学校では40人もの子どもを一斉に指導することになるので、安全面も含めてすべての子ども達に目が届くよう配慮しなければならないが、学校の段階や運動経験が異なる40人もの子ども達に対して、指導者一人はやはり少なすぎる」（三浦，1997，p.100）と述べ、体育授業としてスキーを行う場合の学習形態の問題を挙げている。さらに、「このことに起因して、つまずく子どもたちをつくっていたとするならば、授業自体の見直しも必要」（三浦，1997，p.100）とも述べている。他の体育の授業と異なる点は、一斉指導が難しい点であろう。

また、指導者には高度なスキー技術と指導技術、専門知識が要求される。伊藤は、岩手県内の小学校における冬季体育（スキー）実施状況の調査で、スキー指導者の技能程度別の人数と全体の割合を示している。それによると『『自信がないが普通に示範・指導できる』という答えが最も多く約半数（49.8%）となっている。また、15%が『全く自信がないが指導している』と答えており問題点」（伊藤，1988，p.180）としている。それに対して、「毎年12月中旬、PTA役員とスキー学校および温泉組合ならびに関係学校職員による『小・中学校スキー指導者連絡協議会』が行われる。そこで小・中学校スキー教室（授業・部活動含む）の実施案と各種大会の運営が協議される。実施計画は、まず12月下旬に指導者の実

技研修会が行われ、AB各10名、計20名の指導者陣が決まる」(大貫, 1988, p. 36) などといったように、PTAと共にスキー教室のための実技研修が行われている実態もある。

しかし、須田は、「規定の指導内容を消化することさえ難しい状況の中で、教員は課外活動や準備に時間のかかるような冬季屋外活動に対して消極的にならざるを得ないのが現状」(須田, 2006, pp. 8-9) としており、前述の新聞記事にもあったように、他教科との兼ね合いでスキー授業が犠牲となっている。

さらに、スキー教室では外部指導者を要請している学校が多く、外部指導者についての課題もある。三浦は、北海道上川管内の中学校におけるスキー授業の実態についての調査結果から、理想的な外部指導者としては、「教育者というよりも、スキーというスポーツの専門性に大きな期待がかけられていること」(三浦, 2006, p. 7) を指摘している。しかし、桑田は、「技能的なことを中心にすれば指導員を依頼した方が高い水準で指導者を揃えることができる。本校ではスキー技術の上達だけを目的にしているのではないので校内の教師で指導している。高等学校のスキー教室は学校生活の延長上にあるものと考えている。スキー教室である以上技術の上達を目指すのは当然だが、その他の付随的な指導効果を見捨てることは、学校の行事としての意味を失うことになる。また、依頼した指導員には講習内容や指導時間以外の責任まで負う事はできない、生活指導担当と二重の指導者の確保は費用の点からも好ましくない。本校では体育科教員を中心に他教科の協力を得て調べている」(桑田, 1986, p. 537) と、学校の教師以外の指導者が果たして学校教育に適しているのかということも指摘している。

2) 指導者の問題に関する具体的な事例

まず、岩手県一戸町立一戸小学校の小学校1年生(2クラス49名)のティーム・ティーチングⁱⁱⁱを取り入れたスキー授業を紹介する。この学校では、低学年を中心に校庭や近隣の畑を利用して、3学期に11時間程度のスキー授業を行っている。この事例では、スキー経験のない児童とそうでない児童がおり、技能の差が大きいため、3名の指導者で指導するティーム・ティーチング指導を実施している。指導者それぞれの役割については詳述されていないが、スキー学習にティーム・ティーチング指導を取り入れ、自分のめあてにむかって学習する児童の姿を通して、スキー学習への興味・関心が高まり、生涯にわたってスポーツに親しむ意識が高まっていると述べている。さらに、地域内にはスキー技術に優れ、指導方法も身につけている人材が豊富なので、社会人講師の導入などを視野に入れ、地域とのかかわりをもつことなどが課題であると述べている(相原, 2000, pp. 17-20)。

次に、1人の教師が数十人を指導するための指導方法として、岩井(1997)の中学校におけるスキー学習の展開を紹介する。この事例では、監視のサポートをしてくれる先生の手を煩わせないようにするために、学習形態を工夫し、従来のような技術習得に重点をおいた教授型の学習過程ではなく、技能や興味・関心に応じたコース別の学習指導をすすめている。1年目のスキー学習をステージ1とし、「スキー技術自己診断カード」を用いてコー

スを選択させ、2～3 コースごとのまとまりで等質グループを構成している。教師は、グループから提出された学習計画書に専門的な見地に立ったアドバイスを書きこむ間接的な指導を行う。2年目をステージ2とし、学習活動のねらいを大きく二つに分けられている。1つは「講習型コース」で技術習得をねらいとする教授型で、教師はスキー技術の指導体系を基本に、直接的に技術指導を展開する。もう1つは「自主学习コース」で、スキー学習の新たな楽しみ方を追求する課題解決的な学習過程で、生徒が主体となって学習を進めていく。ここでは教師は、個別化の方向で自主学习のために援助をしていく（岩井，1997，pp. 61-65）。

グループ学習を中心とした課題解決的な学習過程を通して、生徒達は仲間と共に運動する喜び楽しさを味わうことができ、スキーに対する興味関心を高めることになる。特殊な条件下においても、指導者が学習形態や生徒とのかかわりを工夫することによって、教師の一方的な指導になりがちなスキー授業ではなく、生徒が主体の課題解決的な学習を中心とした授業を実現することもできる。しかし、このことを実現していくためには、スキー授業を行うための学習環境が整っていなければならない。実際、上述した事例では、近くにスキー場があることや、保護者や教職員の協力も得られているという好条件が整っていた。次の項では、スキー授業の学習環境について述べていくこととする。

第2項 学習環境に関する課題

体育における学習環境とは、一般的に体育館や校庭が当てはまるが、スキー授業における学習環境は、雪のある屋外に限られている。ここでは、スキー授業の学習環境の考え方と課題、スキー授業に適した学習環境の具体的な事例について述べていく。

1) スキー授業の学習環境の考え方と課題

「体育施設全書第9巻—冬季体育施設—」（日本体育施設協会，1970）では、スキー授業で使用できる環境すべてを広い意味で学校施設としてとらえ、以下のように述べられている。

「スキーではゲレンデの有無とか、スケートではリンクの有無などといった実施上の問題点もあり、用具については経済的な問題もある。しかし、整備されたゲレンデで行なうものだけがスキーではないし（中略）狭くても各学校には校庭があり、その平地を利用してもスキーの初歩的な指導は可能である。また校庭に積もった雪で小山を造って、そのスロープをすべることもスキーであるというように考えると、指導者の工夫次第で、立派なゲレンデまで時間をかけて出かけて行かなくともスキーの指導は可能となる。地域によっては、その土地の条件によっては、深雪でのすべり方しか指導できない所もあるだろう。要はその地域の実情にあったスキーの指導を行なうという基本的な考え方が大切である」（p. 24）。

『雪と氷のある所では、スキーやスケートの指導が可能である』という考え方こそ、冬季体育施設の最大の特徴であり、自然を利用できる施設づくりを生かすものである。また、このことが、その地域の実情に応じた冬季体育の振興に結びつくことになるものと考えている」(p. 24)。

「学校でスキーを行なう場合は、それが授業の時に実施されるものであれ、クラブ活動や学校行事として実施されるものであっても、いずれにしろ常に教育的配慮が必要である」(p. 120)。

「学校の近くに適当な斜面があればそこを利用するのもひとつの方法である。要は整備されたスキー場でなくとも、雪さえあればスキーの喜びを教えることは可能であるという基本的な考え方に立って、斜面を登ることも、平地を走ることもスキーであるということまでスキー指導の範ちゅうに入れて、雪を活用するとともに、学校のある地域の実情にあったスキー施設をくふうするということが重要である。たとえば、学校近くにスタンドのある野球場があつて、雪が多く、そのスタンドがスロープ状になるとすれば、そこを利用してもスキーの指導は可能であり、野球場のスタンドが『学校用スキー施設』ともなりうるわけである」(p. 122)。

以上のように、基本的な冬季体育授業で取り扱う場所についての考え方が詳述されていたが、スキー授業は、雪があり、教育にふさわしい環境であれば実施可能であるという見解が示されている。近くに特別なスキー場などがなくても、学校敷地内や学校の近くの自然をうまく活用することによってスキー授業を行うことができる。つまり、指導者がスキー授業を取り扱おうとする時、学習環境について柔軟にとらえることが重要で、それによってスキー授業が実施可能であるということである。

今村は、ウインタースポーツの指導計画への位置づけのなかで、スキー授業が「実施困難な立地条件における学校は、当然これに対応した計画がもたれるであろう。現状において、スキー・スケートが学校体育の指導計画の中で問題点となっていることは、この両者共に、その置かれている現実に対し、適応した計画立案がなされていないことに原因がある」(今村, 1982, p. 19) とし、「スキー・スケートというスポーツは、そのようなグラウンドで行うものであるという固定概念にとらわれ、スキー場、スケートリンクという既製の施設にとらわれたスポーツであると認識している」(今村, 1982, p. 20) ために、スキーが最も適している立地条件は、スキー場であると考えてしまうと指摘している。「スキー・スケートの困難な立地条件にある学校において、それでも、スキー・スケートを学習内容として計画する必要があると判断するのであれば、どのように計画立案するか、また指導

計画はどのようにすることがスキー・スケートというスポーツを正しく指導できるかを充分考えねばならないだろう」(今村, 1982, p. 20) としている。

体育の授業としてスキーを取り扱うのか、学校行事として、またはクラブ・部活として取り扱うのかによっては大きな違いがあるが、体育授業の中でも様々な条件（アルペンスキーかノルディックスキーか、スキー場か校庭か、外部講師か教師か、教師の人数等）によって問題点が異なる。これは言い換えれば、十校あれば十通りのスキー授業計画を考えなければならないということになる。

学習環境については一般的な体育授業の場合では、グラウンドや体育館が予想されるが、スキーについては、スキー場や学校の敷地内、敷地を超えた学校の近隣など学校によってそれぞれ条件が大きく異なる。そのなかでスキーの内容をどのように選択するのかということも問題になる。平地が多く、近くにノルディック専用コースなどがあり、さらに中学校・高校でもノルディックスキーを行うスキー部が盛んであったりする場合は、小学校の授業でもノルディックスキーを行うことが望ましいと考えられる。逆に、近辺に使用できるような坂やスキー場があり、アルペンスキーが盛んで、一般の小学生も参加できるようなスキー大会などが行われていれば、授業ではアルペンスキーを選択するのが望ましいと考えられる。ノルディックスキーもアルペンスキーも盛んだとすれば、用具の問題を除けば、両方行うことも可能である。ティーム・ティーチングでノルディックスキーとアルペンスキーの選択制にすることも可能であろう。しかしここには、指導できる教師がいるか否かという問題もそこには存在する。地域の実態に応じたということを考えると、その学校のスキーの学習環境および地域において盛んなスポーツや生涯スポーツとして適しているもの、また地域の要請を考慮して決定すべきである。学校は地域の実態に応じて、スキー指導が得意な教師と得意としない教師が役割を分担して指導する等の工夫を行う必要がある。

2) スキー授業に適した学習環境の具体的な事例

ここでは、スキー授業に適した学習環境の学校の具体的な事例を紹介する。

和田(1986)は、小学校におけるスキー指導に関する一考察で、校庭でスキー授業を行う小学校のミニゲレンデを紹介している。ミニゲレンデは「高さ 4m、幅 10m、フロント 2.6m、全長 16m、斜度 17 度、手摺 90cm、総鉄パイプ製」(和田, 1986, p. 12) であり、この授業では、「低学年の登行や滑降には最適であるが高学年のシュテムターン、横すべり等を指導するにはゲレンデの規模が小さい。左右 1 回のターンで終わってしまう」(和田, 1986, p. 13) ことが問題であるとしている。そこで、「児童・生徒の運動量を確保するため、グラウンドにおいて一步滑走、推進滑走、段滑走、スケーティング、リレー等を導入する。しかしながらこのためには興味や関心を持続させることには、特に指導に工夫を加えなければならない」(和田, 1986, p. 13) と指摘している。このことから、スキー場のゲレン

デほどの斜面ではない場合には、運動量を保障することや、特に初心者でない場合には意欲・関心を維持するために、ゲレンデの授業とは異なる学習内容が必要であることがわかる。

前述の岩井（1997）の中学校はスキー授業の実施には良い環境が整っていたわけであるが、以下はその学習環境についての記述である。

「本校では、一、二年生の冬期間の教科体育としてスキー教材を取り入れている。近くに大きなスキー場があり、移動はスクールバスを利用している。校区にある四つの小学校ではいずれもスキー学習を実施しており、子供たちのほとんどがスキー経験者である。また、保護者はスキー学習に対して大変協力的であり、用具の調達や費用などの面でも理解がある。さらに、全校生徒百名程度の本校では、教育課程上の工夫がしやすく、教職員の協力も得られており、これらのことからスキー学習の実施条件としてはきわめて良い環境にあるといえる」（p. 61）。

しかし、このようにスキー授業に恵まれた環境は珍しい。そして、学習環境が整っていても、学習内容がしっかりと準備されていなければ良い授業は生まれない。次は学習内容についての課題を述べることとする。

第3項 指導方法に関する課題

ここでは、学習指導計画と指導の留意点についての検討を行う。

「学校スキーの計画と指導」（佐藤・山川，1976）は、スキー授業を効果的にすすめるためのねらいを達成するためには、事前の指導計画をしっかりと立てること、そして、基本方針を明確にし、指導のねらいを具体的に明確にし、児童生徒の実態を把握し、組分けすることが重要であるとされている（佐藤・山川，1976，p. 36）。まず、それぞれの学校における気候的・地理的条件や児童生徒の心身の発達などの実情に応じて、どのような考えのもとでスキーの指導に取り組むかについての方針を明確にしておくことが、指導計画を立てる際に重要な条件になるとし、児童生徒の体力や技能、態度・習慣、知識、用具などの実態について把握した上でのねらいを作成すべきとしている（佐藤・山川，1976，pp. 36-37）。また、ねらいを設定するためには、それぞれの学校のもつ具体的な気候的・地理的条件について、十分な資料をもとに検討することが必須となる。これらを考慮しながら、それぞれの学校のねらい、学年別のねらいを具体的に明確にすることが必要であるとしているとも述べている。（佐藤・山川，1976，p. 37）児童の実態を把握することは、指導における組分けの資料となるとしている。一般に、スキー指導における組分けについては、「目標の達成、指導の能率、安全の確保という立場から、能力別による等質スループ編成で行われることが多い。しかし、ある場合には、上級者が初級者グループに入り、リーダーとして、指導者の助手となるような方法、または、一斉指導による方法なども考えられる」（佐藤・

山川, 1976, p. 38) ことを指摘している。

児童生徒の技能の実態を知るための技能テストに関しては、次のように配慮するといっている。

「①テストの実施、という感覚を児童生徒に与えないようにする。『さあ、これから、こんなことを練習してみましよう』というように練習の一部という形で実施しながら、その実はテストという形式がよい。②上級者であっても、いきなり高度の内容や観点からやらせるべきではない。簡単な種目から、緩やかな斜面から、そして、短い距離から、というように順次行うようにする。③技能が上下に類似・接近する組同士は、できるだけ近距離の位置で、両グループの動きが互いに見通せる位置でテストを行う。二つの組を比較しながら行うテストは、組の再編成や修正を容易にすることができるからである」(佐藤・山川, 1976, p. 39)

児童の実態を知るための技能テストであるが、「技能テストのために、たとえ多くの時間をかけたとしても、指導が展開されるなかでの進歩や安全という立場から考えると、決して損失とはならないだろう」(佐藤・山川, 1976, p. 38) としている。同じように三浦も、「スキーに対する関心や基本的な知識・思考力などが無いばかりに、技能学習がはかどらず、つまづく場合もある。したがって、スキー学習に必要な知識(自然、スキーの歴史、運動特性、用具・技術・姿勢などの名称、板の位置関係)などについては事前にプリントを配布し学習しておくとか、移動中のバスの中や昼食時に説明するなど、弾力的な配慮・工夫が必要」(三浦, 1997, p. 102) であるとしていることから、事前のオリエンテーションと個々の技能を把握し班編成をしっかりと行うことが、単元全体の運動量を保障することにつながる。

三浦(1997)は、スキー授業の運動学習時間についての調査から、以下のように指摘している。

『実際に滑っている時間(運動学習としての実質滑走時間)』を長く確保することは、よりよい授業づくりのための大きな課題である。著者らがALT-PE(Academic Learning Time in Physical Education)観察法で調査したアルペン型スキー授業の分析結果によれば、そのALT-PE値は他領域に比較してかなり少なかった。初心者の場合、午前・午後ともに2時間ずつ授業を受けたとしても、1日の実質滑走時間の合計は15分程度との報告もある。このような結果はごく少数の例であると思いたいが、指導計画の作成に当たっては学習者の視点も考慮しながら、ゲレンデでの説明や指導のしかた、またリフト待ちや乗っている時間、さらには学校からスキー場までの往復の移動時間などの有効な利用法についても、教科教育の観点から再検討される必要があるだろう」(三浦, 1997, p. 103)

スキー授業では、斜面を使用した滑走を行う時、安全面からもある程度場所を確保し一人ずつ滑ることが多い。したがって、待機している時間が多くなってしまうのである。指導方法の工夫等で、いかに運動学習場面を多くすることができるかが重要である。

第4項 評価に関する課題

体育の授業である以上、児童がどの程度目標を達成できたのか、技能、態度、知識などの評価がなされるべきである。ここでは、スキー授業の評価について述べていく。

1) スキー授業における評価の問題

「学校スキーの指導法」(北海道後志学校スキー研究会, 1984)には、スキー授業の評価について以下のように記述されている。

「教師の指導計画・指導方法・指導形態と目標の達成度をみて、そのスキー学習が適切であったか、児童生徒個々が学習した結果、どの程度の学習を成立することができたか、という二つの面を考えなければならない。また、評価の実際にあたっては、技能面・体力面・進歩の度合・ルールや技術に対する理解度・健康安全の習慣・社会的な態度等、総合的に評価しなければならない。しかし、現場にあつて毎日の評価をより正確にと考えながらも、現実の作業量に問題があり、つい教師中心になったり、形にのみとらわれた評価におちいり、妥当な評価がなされているとはいえない。現場では理論通りには評価できないし、総合的には困難さもある」(北海道後志学校スキー研究会, 1984, p. 106)

では、現場の教師の負担にならない評価、そして児童の学習意欲を向上させる評価とはどのようなものなのか。以下は具体的な評価の事例である。

2) 具体的な評価の事例

具体的にスキー授業の評価に関して記述されている事例は少ないが、和田(1986)の秋田県の小学校で行われたスキー授業で実施されているスキー検定を紹介する。

「スキー学習の最終的な評価としてスキー検定を実施する。初級は1・2年、中級は3・4年、上級は5・6年を対象にしているが、1・2年は回転・距離両用のスキーを用いるので両方の検定を行う。また3年以上は、回転・距離の種目別に分かれて練習しているのでどちらかの検定を行う。検定における各種目の合格の決定は70%程度とみている」(和田, 1986, p. 17)

検定の結果は、

「初級の合格者は1・2年の男子のみで15%程度であるが、中級になると男子のみにみられる。上級では4・5・6年の男女の受検者全員が合格している」（和田，1986，p17）

次に、永田（1996）の養護学校におけるスキー指導の評価の事例を紹介する。この学校では、生活自立の養成とスキー技術の習得という二つのねらいで設定されており、その二つの評価表を作成し評価している。スキー技術面でも安全面、用具の取り扱いを評価項目に入れ、五段階の級の認定証を作成し、スキー技術認定証として交付している。1級から5級までそれぞれ技術的な項目が5つあり、諸活動の10項目は、用具の着脱やマナーなどである。それぞれ○（できる）、△（少しできる）、×（できない）、空欄（指導していない）の評価をしている。

スキー学習は、学習内容が明確に示されていないことで、その評価は学校により異なる。自然環境下での授業ということ、専門的知識を必要とするため技能の評価が難しいということから、事例が少ないと考えられるが、以上のような級別にして児童生徒に示すことには、児童生徒にとって分かりやすく、意欲・関心を高められるのではないかと考えられる。

3) 評価の観点の例

「学校スキーの指導法」（北海道後志学校スキー研究会，1984）では、具体的な評価の観点の例が示されている。評価は、「児童が学習内容をどれだけ習得し、目標にどれだけ到達しているかを明確にすることが基本であるから、評価の観点は指導目標に直接結びつくものでなければならない」（北海道後志学校スキー研究会，1984p. 106）ことから、以下は目標の例と併せて評価の観点の例を明記している。

①1・2年生

<目標>

雪遊びを通し、雪に親しみ、スキーに慣れ楽しんでスキーが出来る。

<評価の観点>

- ・スピードや斜面になれば、元気よく遊ぶことができる。（しり滑りなど）
- ・スキーを滑らせながら歩いたり、走ったりできる
- ・平地やごくゆるい斜面で方向変換ができる
- ・足の裏全体でスキーにのり、開脚・閉脚で、転ばずに、まっすぐ滑ることができる。
- ・ゆるい斜面で片足をわずかに上下させながら滑ることができる。
- ・ゆるい斜面で踏みかえながらまっすぐ滑ることができる。
- ・凸凹の斜面を滑ったり、大きなコブを越すことができる。

- ・わずかな角付けをしながらスピードのコントロールができ、片開きで大きくターンすることができる。

<目標>

グループや友達と助け合ったり、協力し合ったりして運動することができる。

<評価の観点>

- ・グループを組んで、仲良く運動することができる。
- ・二人組、三人組で助け合いながらゲームや運動することができる。
- ・失敗をせめることなく、はげまし合ってゲームすることができる。

<目標>

健康安全面に気をつけて運動することができる。

<評価の観点>

- ・汗とりや汗ふきを用意し、汗の始末が自分でできる。
- ・スキーの始末などが手早く自分でできる。
- ・斜面や場所の安全に気をつけて運動することができる。
- ・合図をよく聞き行動できる。

②3・4年生

<目標>

いろいろな方法や技術を確実にとらえ、安全に楽しくスキーができる。

<評価の観点>

- ・雪面を滑らせ、なめらかな歩きや、走りができ、そして方向転換が自由にできる。
- ・簡単なゲームをすることができる。
- ・開脚でも閉脚でも、どんな方法でもよいから、足のうら全体でスキーを踏みつけ腰の高い、安定した姿勢で滑降したり、回転したりすることができる。
- ・角付けをゆるめたり、強めたりしながら、スピードのコントロールができる。(両開き、片開き、斜滑降)
- ・片開きなどで、旗回りなどの簡単なゲームや競技をすることができる。(交互の開き出し)
- ・開き出しをだんだん小さくしながら大きなターンや中くらいのターンができる。
- ・凸凹を安定して滑ったり、軽いジャンプができる。

<目標>

約束やきまりを守って、グループや全体で、協力し合いながら運動できる。

<評価の観点>

- ・相談していろいろな約束を作り、それを守ろうと努力することができる。
- ・お互いに注意し合ったり、助け合ったり、協力し合ったりしながら、約束を守って行動することができる

<目標>

健康安全に気を配りながらスキーができる。

<評価の観点>

- ・斜面の様子やまわりの安全を確認して運動することができる。
- ・汗の始末や耐寒にいつも気をつけてスキーができる。
- ・集団のきまりや約束を守り、リーダーの指示にすばやく行動できる。

③5・6年生

<目標>

方法・技術の中心を確実におさえ、ゲームや競争に用いることができる。

<評価の観点>

- ・歩くこと走ることの技法を理解し、リズムカルに早く歩いたり走ったりすることができる。
- ・歩・走の技法を使って簡単な競争ができる。
- ・斜面の変化に応じて滑降することができる。
- ・自分の持っている技能を利用し、より早く、いろいろな方法で、旗回りをすることができる。
- ・的確な角付けでスピードのコントロールを行い、リズムカルなターンをすることができる。
- ・リズムカルなストックワークができる。
- ・簡単な回転競争をすることができる。
- ・サツのタイミングを考え、安定した着地でジャンプをすることができる。
- ・バランスのとれた空中姿勢をとることができる。

<目標>

グループや全体で約束やきまりをつくり、協力したり、助け合って運動することができる。

<評価の観点>

- ・約束やきまりをつくることができたり、みんなのためになる発言をすることができる。
- ・決められたことを守って、楽しくゲームや運動ができる。
- ・協力して仲良く競争やゲームができる。
- ・斜面の状態やまわりの安全を確かめて運動することができる。
- ・汗の始末や寒さに気を配って運動することができる。
- ・集団のルールを守り、リーダーの合図に従い行動ができる

(北海道後志学校スキー研究会, 1984, p. 107-109)

目標を明確にすることで目標に合った評価を行うことができる。そこで気をつけなければいけないことが、従来のスキー指導にあるような系統的な型を重視した指導と評価であ

る。例えば、「シュテムターンで右左に曲がる」という目標であれば、もちろんシュテムターンが正確に出来るに越したことはないが、最終的な目標は「パラレルターンで右左に曲がること」であり、それは同時に「自分のタイミングで右左に曲がるが出来、安全に、楽しく滑ることができる」ことである。したがって、「シュテムターンで左右に曲がる」という目標でも、シュテムターンの型が出来ることに固執している必要はない。シュテムターンがうまく出来ず、いつまでも先に進めない生徒が出てきたとき、授業の度にシュテムターンを練習することとなり、挙句の果てにその生徒にとってスキー授業は楽しくないものになってしまう。生涯スポーツにつなげるための体育であるためには、従来の型を重視した指導ではなく、どのくらい洗練されたか、最終目標にどのくらい近づけたかを評価すべきである。

第3節 学校体育のスキー授業の意義とあり方

本節では、学校体育のスキー授業の意義とあり方について、主に、須田（2006）と小学校学習指導要領にもとづいて検討していく。

第1項 学校体育のスキー授業の意義

小学校の学習指導要領で、スキーは「自然とのかかわりの深いスキー、スケートや水辺活動などの指導については、地域や学校の実態に応じて積極的に行うことに留意する」（文部科学省，2008，p. 101）とあるように、自然とのかかわりの深い活動を積極的に行うよう示されている。しかし、なぜあえて積雪の多い地域では冬季に屋外で体育の授業を行う必要があるのだろうか。なぜ授業の準備に時間がかかり、高価な用具を揃える必要があるスキー授業を行う必要があるのか。ここでは主に、学校体育におけるスキー授業の意義について述べることにする。

須田は、「雪国の生活と身体活動」（須田力，2006）で、積雪地における運動の必要性について、次のように述べている。現代の「子供たちの運動能力や機能の低下には、室内生活が多く戸外生活が少ない日常生活が背景にあると考えられ、特に積雪寒冷地域の子供たちはこの傾向が強いことから、他の地域よりも運動能力や機能低下が顕著に現れることが懸念される。また、冬は日照時間が短い上に室内生活が多くなることから、日光に当たる時間が少なくなるため、日照不足に起因する精神的な面への影響も懸念される」（須田力，2006，p. 12）と述べている。これは「冬になると気分が激しく落ち込んで自責の念にかられ、意欲や行動に障害が見られ、外出するのが憂鬱になるような症状、いわゆる冬季鬱病の原因も冬場の日照不足にあるといわれている」（須田力，2006，p. 13）からである。加えて、「日光にあたると骨の形成に欠かせないビタミン D が体内でつくられることから、子どもたちの骨の形成にも密接に関連している（鳥居，1999；有田，2005）。以上のように、冬も戸外活動を行って太陽光を浴びることは、子どもだけでなく、積雪寒冷地域に住む全ての人間が健康に暮らすために必要不可欠なものである」（須田力，2006，p. 13）としている。さらに、戸外での身体活動が少ないことに起因して、積雪地の体力問題にも触れている。

「積雪・寒冷地住民の冬季の運動不足と体力低下の問題は、これまでいくつかの論文から提起されている。糟谷と吉岡（1977a；1977b）は、長野県の豪雪地域における児童・生徒について冬季の身体活動の沈静化や1日の消費熱量の減少を指摘している。北海道においては、志手ら（1988；1990）が、函館市および近郊の小学校児童を対象とした研究から、（1）万歩計や心拍数計による身体活動量を比較した結果、降雪期は体育の授業のない日の身体活動水準が低下する。（2）無酸素能力は降雪期と無雪期との間では季節的な変動が認められなかったが、有酸素能力は冬季に低下する、などの実態を明ら

かにした。志手らは、これらを踏まえて、冬季間において児童が十分な発育発達を遂げることのできる運動刺激を獲得できる場の提供、整備などが必要であること、また『冬を楽しむ』ための創意・工夫によって、体力の維持・増進ができる環境づくりが、学校だけでなく地域や家庭においても求められると提言している」（須田，2006，p. 23）

このことから、冬季の積雪地における運動の場が少ないことが、問題であるといえる。学校の体育の授業については、次のように指摘している。

「学校行事の中からマラソン大会が姿を消し、子供たちが深雪の中を雪まみれになってボールを追いかける雪中サッカーに代わって暖房の入った屋内体育館でのミニサッカーが主流になった。一見快適で技術習得には効率のいい変化に思われるが、限られたエネルギー資源の問題、施設の使用効率と利用人数との関係、雪や寒さへのからだの適応能力などグローバルな視野で見ても果たしてこれでよいのかと考えさせられる。冬季体育の研究の先駆的な役割を果たした玉井（1983）は、雪国の学校体育が機械化され人工化されたゲレンデスキーに偏り、校庭の積雪を利用せず、冬季間ほとんど体育館や教室での授業に切り替える現状に対して、自然の中で育まれるたくましく健全な冬季体育の必要性を強調している。積雪地において支障なく生活していくためには、歩行ひとつとりあげても積雪路面では無雪期より運動強度が増加するため、いっそう高い体力が要求される。降雪の旅に避けられない除雪は歩行よりなるかに高い運動強度である」（須田，2006，p. 34）

積雪・寒冷地で生活していく上で必要な体力は、積雪のない地域より高いことも指摘している。したがって、積雪地の子どもには積雪のない地域よりも高い体力を目指すことが求められているといえる。さらに、以下のようにも指摘している。

「子供の時期の自然の中での遊びの経験が、成長期のさまざまな発達刺激となるだけでなく、高齢になっても運動を実行する契機となっていることが多くの研究から実証されている。子供たちの冬季の戸外での遊びは、成人期の生活習慣病予防につながり、高齢期においても雪や寒さに適応した『活力年齢』を延長させる身体資質と知恵を育んでくれる。このような遊びの経験と雪や氷についての科学的な教育が学校教育において重視されるべきである」（須田，2006，p. 179）

地域によっては、スキーは生涯スポーツとして重要な意味を持っている。地域に大きなスキー場があれば、その地域の人々の大きな収入源になっている場合が多く、生涯関わっていくだろうもの（生きていくためにもなくてはならないもの）なのである。

上述した引用文から、なぜ体育授業におけるスキー授業が生涯スポーツとの関連で重要

かが十分にうかがえる。積雪地における冬季のスキーやスケート、ウインタースポーツ、さらには戸外での身体活動は、冬季の子どもたちの体力維持・向上や心の安定につながると考えられる。学校体育におけるスキー授業では、運動量を保障し、スキーの楽しさを子どもたちに享受させることが求められる。アルペンスキーであれば校庭や学校周辺の小さな山等を使用し登る・滑るを繰り返すことの方が運動量を確保することができる。または、ロープトローやTバー^{注iii}など、登る時にも滑走が必要な施設であればリフトに比べ運動量を保障できるのではないかと考えられる。しかし、生涯スキーに触れ親しむ生涯スポーツとしてのスキーを求めるための体育授業であれば、スキー場におけるマナーを学習しておく必要があり、リフトに乗る技術もあったほうが良い。また、スキー場であれば、長い距離を滑走する体力を期待でき、子どもたちの楽しさも増すはずである。技術向上の進度も進み、指導効率も良いと考えられる。しかし、1回の授業時間が長くなってしまったり、リフトに乗っている時間は全く授業と関わりのない時間となってしまうことが問題である。

スキーは個人種目であるが、生涯スポーツとしてはみんなで楽しむスポーツとであるといえる。少子化、一人っ子の増加、ひきこもりなどといった社会的問題を解決していくためにも、体育の授業で児童同士の関わり合いを増やし、その楽しさを享受させることは重要な経験になるのではないかと考える。

第2項 学習指導要領に対応したスキー授業のあり方

ここではまず、小学校学習指導要領の体育科の目標を確認し、次に小学校学習指導要領に対応したスキー授業のあり方について検討する。

まず、体育科の目標は、「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」（文部科学省，2008，p.9）と示されている。体育科は、楽しく明るい生活を営む態度を育てることを究極的な目標としており、学校教育法では、小学校において義務教育として行われる普通教育のうち基礎的なものを施すこと（第29条）や、生涯にわたり学習する基盤が培われるようにすること（第30条）が規定されている。この目標を実現するために、各教科等の指導上の留意点が次のように述べられている。

「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」（文部科学省，2008，p.16）

「各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童の興味・関心を生かし、自主的、自発

的な学習が促されるよう工夫すること」(文部科学省, 2008, p. 16)

「各教科の指導に当たっては、児童の学習課題や活動を選択したり、自らの将来について考えたりする機会を設けるなど工夫すること」(文部科学省, 2008, p. 16)

「各教科等の指導に当たっては、児童が学習内容を確実に身につけることができるよう、学校や児童の実態に応じ、個別指導やグループ別指導、繰り返し指導、学習内容の習熟の程度に応じた指導、児童の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れた指導、教師間の協力的な指導など指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること」(文部科学省, 2008, p. 16)

「児童のよい点や進捗の状況など積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行い学習意欲の向上に生かすようにすること」(文部科学省, 2008, p. 17)

これらを踏まえれば、体育科の指導は基礎的・基本的な知識及び技能を活用した児童の自主的、自発的な学習を施すことや、確実に学習内容を身に付けるために個に応じた指導を施すことなどといった点に留意しながら進めていく必要があるといえる。このことはスキー授業であっても同様であるといえる。学校の実態によって学習環境の工夫が必要とされるケースもあるが、スキー授業の基本的なあり方としては、技能の差が大きくなりがちであるため個に応じた指導を重視するべきである。しかし、前述したように、指導者の問題が大きな障害となってしまう。特に、スキーの技術に関する指導については専門性が求められる。それでは、小学校のスキー授業において取り扱うべきスキーの技術はいかなるものか。また、それを系統的に指導していくためにはどのような指導体系が必要か。次章では、これらの点について検討していくこととする。

ⁱ 週5日制については「文部科学省, 学校週5日制に関するこれまでの経緯」、平成23年1月12日、http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/week/index_b.htmを参照した。

ⁱⁱ 「TT(チームティーチング)とは、複数の教師が協力して授業を行う指導方法である。近年、我が国では指導法改善定数措置により教員が加配されるケースが生まれ、TTによる指導が広がってきた。TTによる指導には、従来の1学級又は1教科1担任制のもとでは行われにくかった個に応じた指導の充実が期待されている。TTによる指導方法には、1学級(教科)の指導を複数の教師が担当し、複数の教師の目できめ細かく指導する方法、1つ又は複数の学級を集団の質によって編制しなおし、それぞれの教師が集団に適した指導を行う方法等がある。また、学習の内容によっては異なる教科の教師がチームをつくり、協力して指導を行う方法もある。」(TTについては、「光文書院, TT(チームティーチング) - 教育用語集」、平成23年1月12日、http://www.kobun.co.jp/dataroom/vocabulary/ta_05.htmlを参照した。)

iii 「Tバーリフトやロープトローなど、スキーヤーやスノーボーダーが滑走したまま輸送されるリフトの総称を『シュレップ（滑走式）リフト』という。滑走式のため風に強く、強風時も安定した運行が可能である。1人乗りと2人乗りがあり、初心者向けゲレンデや、ゲレンデ間の連絡用リフトなどに適している。（ロープトローとTバーに関しては、「日本ケーブル株式会社, 製品 -シュレップ（滑走式）リフト -」平成23年1月12日,, <http://www.nipponcable.com/pro/lift/lift4.html> を参照した。）

第2章 スキー技術ならびに指導体系に関する理論的分析

本章では、スキー技術ならびにその指導体系に関する理論的分析を試みる。まず、全日本スキー連盟から2009（平成21）年に発行された指導書「日本スキー教程『スキー指導マニュアル編』スキー指導者必携」（スキージャーナル株式会社発行）と、同じく全日本スキー連盟から2009（平成21）年に発行された「日本スキー教程『技術編』自然で楽なスキーのすすめ」（スキージャーナル株式会社発行）におけるスキー技術ならびにその指導体系について検討する。次に、文部省（現在の文部科学省）から1998（平成10）年に発行された「学校体育実技指導資料第6集—スキーへようこそ—」（株式会社東洋館出版社発行）にもとづきながら、スキー技術の系統的つながりと低学年における学習指導過程を分析し、加えて、「体育授業づくり全発問・全指示②—スキー・スケート—」（明治図書出版株式会社発行）ならびに「子どものためのスキー教本」（株式会社スキージャーナル発行）を参考にしながら指導案作成時と指導時の留意点について検討していく。

第1節 全日本スキー連盟の指導書にみるスキー技術ならびに指導体系

第1項 スキー技術ならびに指導体系

ここでは、「日本スキー教程『スキー指導マニュアル編』スキー指導者必携」（財団法人全日本スキー連盟，2009）におけるスキー技術ならびにその指導体系について述べることにする。

スキー技術ならびにその指導体系は、スキーに必要な運動技術と指導段階の2つに分けられている。まず、スキーに必要な運動技術の区分を①導入技術、②平地での移動技術、③傾斜地での移動技術の3つに分け、スキーの学習で最も多くの時間が割かれる③傾斜地での移動技術はさらに、（1）登る技術、（2）滑り降りる技術、（3）制動技術、（4）実践的なターン技術に分けている。実際の指導に当たっては、実践的なターン技術の前に、制動のための回転技術として、プルークボーゲン、シュテムターンが位置づけられている。実践的なターン技術は、初歩段階のターン、洗練過程のターン、パラレルターン（基本形）と進み、パラレルターンの応用では、リズム変化、斜面変化、スピード変化の練習となる。

次に、指導段階の区分は、「日本スキー教程『スキー指導マニュアル編』スキー指導者必携」（スキージャーナル株式会社発行）を参考に、以下の表2-1に示した。ステージIVに関しては「日本スキー教程『技術編』自然で楽なスキーのすすめ」（スキージャーナル株式会社発行）を参考にした。

表 2-1 全日本スキー連盟におけるスキーの指導段階

ステージⅠ	(1) 導入技術	<ul style="list-style-type: none"> ・用具の取り扱い方 ・ポジションの確認と諸動作 ・転倒時の対応法
	(2) 平地での移動技術	<ul style="list-style-type: none"> ・歩き方 ・滑走の仕方 ・踏み換え動作による方向変換
	(3) 傾斜地での移動技術	<ul style="list-style-type: none"> ・登り方 ・滑降技術(基本的なバランスの保ち方) ・プルークと片プルークを利用する制動、止まり方 ・制動の回転技術(プルークボーゲンとシュテムターン) ・楽しむための回転技術(自然で楽な滑りの原則的なしくみ) ・楽しむための回転技術(基本的なパラレルターン)
	(4) その他必要なプログラム	<ul style="list-style-type: none"> ・リフト等の施設の利用法 ・装備の点検(ウェアの着こなしなどが索道事故につながる可能性があります) ・スキーヤーの注意義務を認識させること ・マナー・ルールの徹底 ・その他
ステージⅡ	(1) 平地での移動技術	<ul style="list-style-type: none"> ・各運動がスピーディーに、正確にできる
	(2) 傾斜地での移動技術	<ul style="list-style-type: none"> ・登る、斜面での方向変換など、必要技術が機敏で正確にできる ・滑降中に柔軟でタイムリーな動きができる(バランス保持能力の高さ) ・制動動作が素早く正確にできる(プルーク、片プルーク、横滑り) ・確実に停止できる(山回り、急停止のターン) ・制動の回転技術を活用できる ・楽しむための回転技術(基本的なターンの定着) ・楽しむための回転技術の応用(リズム変化) ・楽しむための回転技術の応用(スピードと弧の調整)
ステージⅢ	(1) 平地での移動技術	<ul style="list-style-type: none"> ・スキーと身体がつねに一体化した無駄のない動きができる
	(2) 傾斜地での移動技術	<ul style="list-style-type: none"> ・いつでも確実に停止できる能力 ・制動と滑走を自在に調整できる能力 ・楽しむための回転技術(リズム変化の自在性) ・楽しむための回転技術(スピードコントロール) ・楽しむための回転技術(パフォーマンスの表現)
ステージⅣ	志向別の専門課程	<ul style="list-style-type: none"> ・健康志向 ・斜面克服志向 ・競技志向

※索道とは「空中に架け渡した索条（ワイヤーロープ）に旅客や貨物を運ぶための搬器を懸垂し、索条を動かすことにより輸送する設備」（財団法人全日本スキー連盟，2010，p. 104）のことで、ロープウェイやゴンドラ、リフトのことである。

これまでの指導の段階は、「初級」、「中級」、「上級」というように学習者の技能レベルを基準にして区分されてきた。技術指導を行ううえで、この段階区分は当然必要であるが、そこには、各段階の目標が技術形態になりやすいという問題がある。初級は「プルークボーゲン」、中級は、「シュテムターン」というように技法を目標化し、技術に順位をつけるのではなく、「内容の出来高」で段階区分するほうが良いといえる。そうした意図で、「ステージ」という区分となった。したがって、それぞれの「技術」は「同格」に位置づけられ、例えば、「歩き方」にも、初歩の形と上級の形があるということになる。

「ステージの区分」はレベル別区分を包括していて、なおかつ、「何ができる」という基準と、「どのくらいできる」という基準を示す。（財団法人全日本スキー連盟，2009，p. 156）

ステージⅠは、初歩レベルのスキーヤーは必修の過程となる。したがって、ステージⅠの構成は導入技術から楽しむためのターン技術、あるいは基本的なターン運動の完成までが範囲となる。ステージⅡは、各課題について「できる」から「うまくできる」というレベルに技能を高めることがテーマとなる。特に重点的に取り組む内容は、「パラレルターン」の「正確化」となる。ステージⅢは、正確化された運動を「より自然に活用する」ことを目指す段階である。「自然に」とは、「無駄なく効率的に」であり、さらに高い次元では「無意識的に」、「児童的に」運動するという能力が求められる。個々のスキーヤーの特性を活かす「個性化」の段階である。ステージⅣは、志向別の専門過程によって展開されていく段階であり、個々のスキーヤーが自分流を模索する段階である（財団法人全日本スキー連盟，2009，pp. 156-158）。

「日本スキー教程『技術編』自然で楽なスキーのすすめ」（スキージャーナル株式会社発行）のなかの、技術の体系と指導の展開では、「基礎である『プルークボーゲン』の完成が応用である『パラレルターン』習得にとって必要不可欠な過程である」というのは、理論的合理性において疑問が生じる。むしろ、プルークボーゲンとパラレルターンは、身体運動から見て異なった性格の技術である。それどころか、プルークボーゲンの完成がパラレルターンの習得を逆に阻害しているとさえ考えられる。加えて、最近のスキー板が持つ回転性能の驚異的進化は、経験的にもこういった矛盾を増大させることになっている」

（p. 18）とし、これまでの、「基礎」から「応用」、「発展」へといった部分の集合が全体となるといった技術指導、そしてこれまでの技術指導は手段である技術習得が目的となり、楽しさを感じられないスキーヤーを生む原因となっていることを指摘している。この考え方は、型に固執しがちである指導から脱却し、よりよいスキーの学習指導を生み出すことができると考えられる。また、自然で楽なスキーは、スキーヤーひとりひとりの個性

が十分に尊重された、つまり、個々の価値観（スキーへの志向性）、発育発達段階（子どもから中高年）、技術段階（初心者から上級者）、その他スキーヤーを取り巻くさまざまな環境の違いから、指導の展開は個別的なものとなり、多様なものとなる。したがって、スキーヤーそれぞれが目指す志向に対して多様な指導方法論が展開されなければならないとしている（財団法人全日本スキー連盟，2009，p.18）。

第2項 スキーの楽しさを発展させるための学習過程

「日本スキー教程『スキー指導マニュアル編』スキー指導者必携」（財団法人全日本スキー連盟，2009）では、以下のように楽しさを発展させる学習過程を示している。

「スキー技術の指導過程には、基本、基礎を中心にスキー技術の構成要素を段階的に積み上げていく考え方（段階型学習過程）と、「現在、持っている技能で工夫しながらのスキー学習」から、「創意工夫によって新たに身につけた力での学習」へと進め、これを繰り返し技能を高めていくといった学習過程の考え方があります。この学習過程では、ある技術課題を完成してから次の課題に進む方式ではなく、技術課題が未完成でも、新しい課題への挑戦を認め、また前の学習に戻ることも可能にした学習の進め方です（スパイラル型学習過程）」（財団法人全日本スキー連盟，2009，p75）。

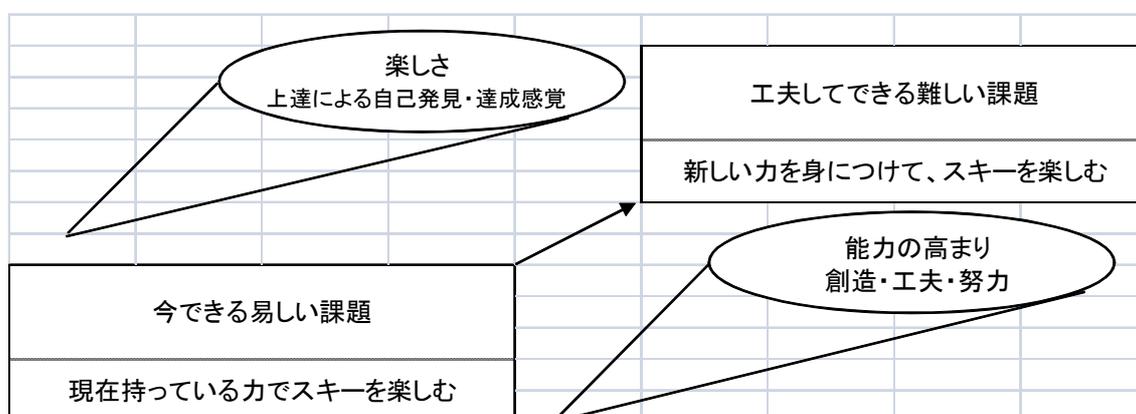


図 2-1 スパイラル学習過程（財団法人全日本スキー連盟，2009，p.75）

このような考え方は、文部省（現在の文部科学省）の指導資料に示されている「今もっている力でスキーを楽しむ段階」と「新しい工夫を加えスキーを楽しむ段階」の2つの段階で学習指導を構成すると、一人一人の体力や技能のレベルに応じてスキーの楽しさを味わうことができるという考え方にもとづいている。それらを踏まえて、運動技術の習熟プロセスから捉えた指導過程について、以下のように示している。

「①斜面をターンしながら滑り降りるスキーマの運動は、初心者にとっては、日常で経験しない技能の習得が必要になります。長い装具をつけての運動、動作、足元が滑ることでのバランスの確保など斜面を滑り降りる練習の前に、ある程度できるようにしておかねばならない技能があります。スキー板を装着してのすり足歩行、方向転換、雪面抵抗の捉え方、バランス保持、動き方など、スキーマ運動の基盤となる技能は、先ず習得しておくことが必要になります。

- ②基底技能が、ある程度習得できれば努めて速い時期から、『左右に回って滑り降りる』所謂、スキーマ運動の全体学習を導入します。
- ③全体学習で、ターンを繰り返し練習することで『動きのバランス、動作の不安定な段階』から、動きの調子（リズム）が分かるようになり、まとまりのない動きが次第にまとまりのある動きになり、どうにか『安定して滑り降りることのできる段階』へと上達します。

この段階での指導は、全体学習の中で

- a. 易しいものから難しいものへ、
- b. 単純なものから複雑なものへと、

学習者が今持っている力で挑戦できる課題を設定し導くことが大切です。とくに、斜面の選択は学習の成否にかかわる大切な条件となります。

- ④『安定して滑れる段階』から『うまく滑れるようになる段階』では、動きの正確さ、洗練化を目指します。新しい技術要素の獲得のために、ときには全体の中の一部要素を取り出して行う部分練習の量も多くなりますが、部分練習で獲得した技術は、全体の滑走の中で活かせるよう全体練習と併合して行なうことが効果的です。
- ⑤『うまく滑れる段階』から『強くなる段階』では、難易度の高い状況にも対応できる『強さ』と『確実さ』を習得することが目標となります。斜面状況、スピードなどの条件が挑戦課題となります』（財団法人全日本スキー連盟，2009，p. 76）

以上のように、指導過程は、スキーマ運動に必要な動きにリズム、バランス、タイミングを全体として練習し、未熟な段階での荒削りの動きを、正確に、洗練化された動きへ（粗形態から精形態へ）と習熟度を高めていく考えに基づいている（財団法人全日本スキー連盟，2009，p. 76）。

第2項 発達段階を踏まえた指導のあり方

「日本スキー教程『スキー指導マニュアル編』スキー指導者必携」（財団法人全日本スキー連盟，2009）では、対象に応じたスキー指導の原則として、幼児期・小学生期のスキー指導の原則を示しているが、ここではそれらを参考に、児童の発達段階を踏まえた指導のあり方について検討していく。

それによると、スキーマの発達曲線からも言えるように幼児期、小学生期は、「神経

系の発育、発達が他の器官に比較して大きく、感覚機能、精神機能ともに目覚ましい発達を示す時期」（財団法人全日本スキー連盟，2009，p. 77）といえ、「移動性能力は、3～4歳である程度のレベルに達し、この頃から運動制御能力が働き始め、運動として用具を操作できるようになる操作性能力は3歳以降で、小学校低学年までは特に調整能力が著しく発達する時期」（財団法人全日本スキー連盟，2009，p. 77）であるとしている。スキーの板が体の一部として動かせるような操作能力が養われる時期である。例えば、箸や鉛筆は普段意識しなくとも、その先まで自分の神経が通っているような感覚である。同じようにスキーも、スキーのトップ（先端）からテール（後端）までがまるで自分の手や足となっているかのような感覚を、上級者は持っている。スキヤモンの発達曲線にみられる神経系の発達の芳しい小学生期にこの感覚を覚えておくことが望ましいと考える。またこの頃は、興味関心が多様で、ごっこあそび（模倣行動）が好きであるというような特性（財団法人全日本スキー連盟，2009，p. 77）から、以下のようなスキー指導の原則を示している。

- a. 3歳頃からはスキー遊びの開始適期です。
- b. 自発的な遊びには夢中になり、長い時間の活動が可能です。この時期には、自発的な遊びを盛り上げるよう活動のゲーム化と環境条件を整える工夫が必要です。幼児期前期のスキーの指導は、あらゆる運動を含んだ雪上の遊びと位置づけられます。
- c. 本格的なスキーへの導入は、動的バランス能力が身につく幼児前後期頃が適性です。
- d. 上達の進度は様々である。先を急がず、あせらず、ゆっくりと子どもとともに問題を解決していくことが何よりも指導者に求められる姿勢です。
- e. 指導は、具体的な動きを示範し、まねさせます。具体的な感覚に頼った直接的な学習が効果的です。
- f. 調整能力が著しく発達する時期である小学校低学年まで（2歳から7歳）は、滑りの形態をひとつのパターンにはめ込むことなく、いろいろな状況変化を体験させることが望ましいでしょう」

（財団法人全日本スキー連盟，2009，p. 78）

これらのことから、児童のスキー授業では、お互いに競争すること、あるいはチーム間で競い合うようなゲームの場をつくること、個々のつまづきを見落とさず、個々に応じた指導を心掛けること、指導者が模範を見せること、あるいは上手な児童を模範として示すこと、様々なスキーの学習環境でスキーを体験させることが重要であると言える。

第2節 児童期におけるスキー技術ならびに指導体系

第1項 スキー技術の系統性と学習指導過程

ここでは、文部省（現在の文部科学省）から1998（平成10）年に発行された「学校体育実技指導資料第6集—スキーへようこそ—」（株式会社東洋館出版社発行）にもとづきながら、スキー技術の系統的つながりと低学年における学習指導過程を分析していく。

図2-2は、スキー技術の流れの例を示している。基本の姿勢（直滑降姿勢、プルーク姿勢、斜滑降姿勢）から回転技術（プルークボーゲン、シュテムターン、パラレルターン）のようなながれで学習を行うことで、安全にしかも無理なくスキーの学習を進めることが可能とされている。

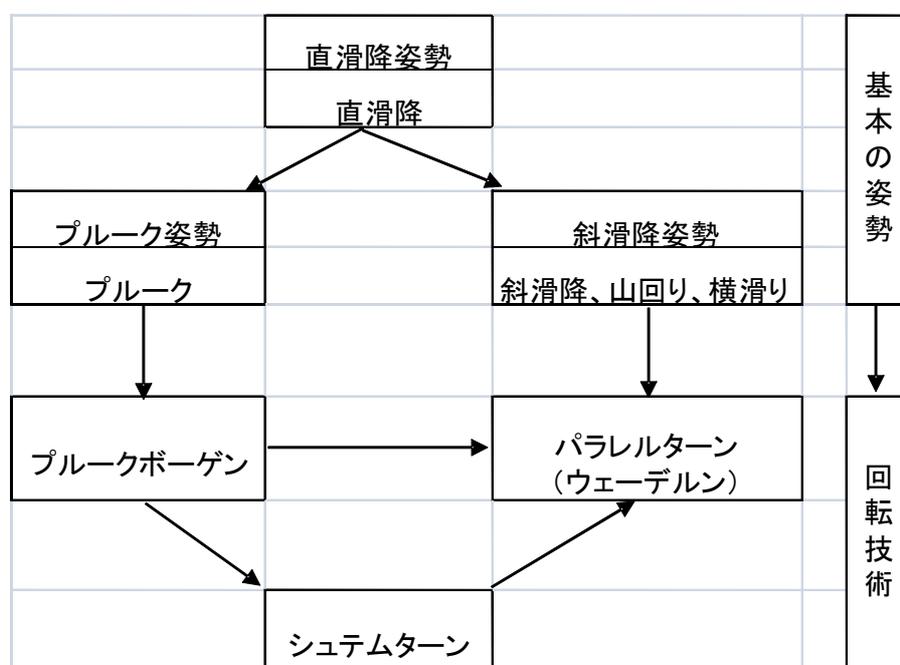


図2-2 スキー技術の流れの例（文部省，1998，p.14）

図2-3は、さらに詳しくスキー学習のながれの例を示している。スキーの着脱や、転び方、起き方等の平地での学習から、登行、そしてプルーク（スキーをハの字で保って滑る）に挑戦する。プルークが出来たら次は、プルークボーゲン（スキーをハの字に維持して回転する）に挑戦する。プルークボーゲンが出来たら、シュテムターン（スキーをハの字に開き出して始動し、外足からターンを始め、内足をその動きに合わせていく）、ステップターン（山側のスキーをステップして踏み出しターンする、または、谷側のスキーを踏み蹴ってステップしターンする）、パラレルターン（両スキーを平行にして回転する）に挑

戦する。しかし、これは学習の流れの一般的な例であり、状況によっては学習の流れを変えることもできる。

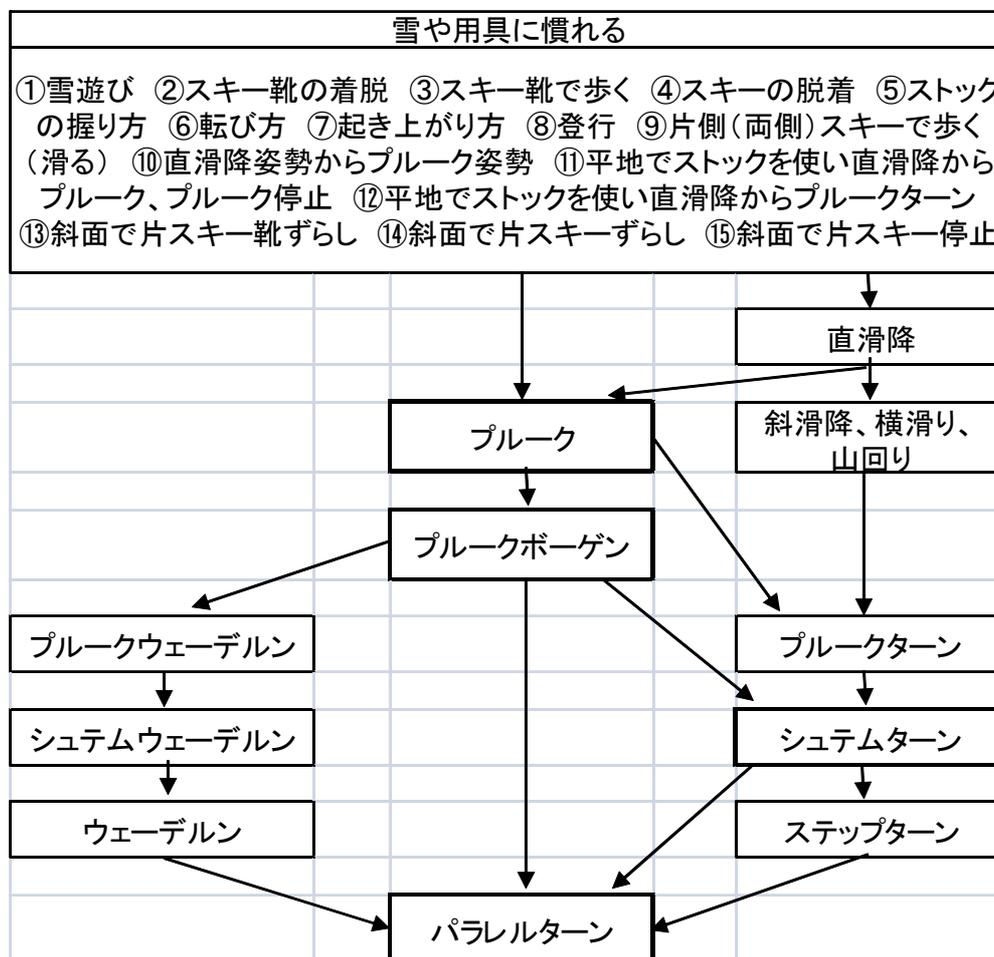


図 2-3 スキー学習の流れの例 (文部省, 1998, p. 23)

ここで注意したいのは、最終的なパラレルターンという目標を忘れないことである。パラレルターンへ向かうための補助的な滑り方としてのシュテムターンやステップターンは、より正確な技術を求めるとパラレルターンと同じくらい難しい技術であるといえる。児童は最初に、平地の滑走ではスキーを平行にすることでスキーが進みやすいことを覚える。次にスピードの制御動作としてハの字（プルーク）を覚える。児童はスキー学習を経験していくなかで次第にスピードに慣れ、もっとスピードを出したくなり、緩やかな斜面では平行に近づいていくものである。したがって、シュテムターンやステップターンを型としてできることを求めるのではなく、あくまでもパラレルターンを実現するための練習であるということを念頭に、どれだけパラレルターンに近づけたかということを見るべきである。

近年のカービングスキーの良いところは、ターンが楽にできることである。初心者でも

ブルークまでできるようになれば、右足に体重をかけるだけで左にターンし、左足に体重をかけるだけで右にターンすることが出来る。また、安定性もありカービングスキーの登場によって、スキーヤーがより楽にパラレルターンを習得できるようになった。しかし、児童にとって、より早くパラレルターンを習得することが正しいとは一概には言えない。より早くパラレルターンを習得するということは、横滑りに代表されるような、その間に学習すべき内容がほとんど学習されないままになり、習得されない可能性があるからである。スキー場でのスキー授業では、はやくリフトに乗れるようになること、そして長距離を滑走することがより技術を向上させることは間違いではない。しかし、導入部分の学習をしっかりと行わないと、例えばリフトに乗車する時の足場が上り坂であった場合に登行ができなかったり、転倒するとなかなか自力で起き上がれなかったりということも起こりうる。したがって、児童に指導する場合、導入段階はしっかりと指導すること、そして、余裕があれば、スキーに乗って様々な動きを学習させてあげることが大切である。

スキー授業では、スキー技能の習得や安全に関する態度、スキーの楽しみ方・学び方などの学習を通して、自ら進んでスキーの楽しさを求める能力・態度を育てることを重視して、子どもの実態に応じた学習内容を考えることが必要である。特に、雪や用具に慣れる段階においてスキーの楽しさを味わうことは、意欲の喚起につながり、その後のスキー学習に大きく影響することからも、重視すべきである。態度に関する内容については、一人一人が技能応じた課題をもち、協力して練習したり、安全に対するきまりを守ったりすることなどに留意することが大切である（文部省，1998，p. 25）。

他方で、「学校体育実技指導資料第6集—スキーへようこそ—」には、スキーの小学校低学年の学習内容と学習指導の過程が次のように示されている。

表 2-2 小学校低学年の学習内容の例（文部省，1998，p. 26）

観点	内容	小学校低学年
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しさ、喜び ・自主性 ・向上心 ・協力、責任 ・マナー・安全 	<ol style="list-style-type: none"> 1 順番やきまりを守り、仲よくスキー遊びができる。 2 運動する場所の安全に留意してスキー遊びができる。 3 スキー遊びの後、身体を清潔にすることができる。 4 集団としての行動ができる。
思考・判断	<ul style="list-style-type: none"> ・課題の設定 ・課題解決の工夫 ・資料の活用 ・話し合い活動 	<ol style="list-style-type: none"> 1 自分の力に合った課題(めあて)をもつことができる。 2 課題解決のため、練習の場を工夫することができる。 3 学習カードを活用したり、指導者の助言を取り入れて、課題解決ができる。 4 グループ内での話し合いを通じて練習が工夫できる。
技能	<ul style="list-style-type: none"> ・滑る ・止まる ・曲がる 	<p>(全学年共通)</p> <p>雪や用具に慣れる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雪遊び ・用具に慣れる。 ・初歩的な滑降、制動、回転ができる。 <p>基本的なスキー技術を身につける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プルークでスピードをコントロールして滑る。 ・プルークボーゲンでスピードをコントロールして滑る。 <p>技能を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シュテムターンの技術を身に付ける。 ・パラレルターンの技術を身に付ける。
知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ・特性の理解 ・運動の行い方 ・知識の理解 	

小学校低学年の児童は、学校体育で経験する最初のスキー授業で、スキーとは何たるかを知ることになる。スキーとは、雪が降っている寒い冬に、あるいは吹雪で視界が悪いな

かで、手や足が氷りそうなのに堅い靴を履いて滑らなければいけないスポーツなのか、スキーという道具を使って普段味わえないスピードを感じることでできるわくわくするようなスポーツなのか。どちらもスキースポーツの特徴であるが、低学年のスキー授業は楽しさを享受することを前提に、技能を習得していくことが望ましい。

次に、スキー授業の学習指導の過程について述べる。図 2-4 は初めてスキーを学習する学習指導過程の例を、図 2-5 はスキー学習の経験がある集団の学習指導過程の例を示したものである。「今もっている力でスキーを楽しむ段階」と「新しい工夫を加えスキーを楽しむ段階」の二つの段階で構成したもので、一人一人の体力や技能レベルに応じてスキーの楽しさを味わうことが意図されている。学習指導過程は、子どもの学習状況に応じて、弾力的に検討されなければならない。例えば、スキーの学習経験が少ない子どもの集団に対しては、教師のかかわり方を強めた学習活動が、単元の前半部分では限定され、個に応じた指導を一層充実させていくことも考えられる。（文部省，1998，p. 27）

時	1 ~ X	
0	ねらい①	ねらい②
45分	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">雪やスキーと友達になろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・雪遊び。 ・着脱、歩行、転び方、起き方、登行、滑走、停止などを行う。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">友達と仲良く滑ろう。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒にいろいろな雪遊びを楽しむ。 ・初歩的な滑走を楽しむ。
支援	<ul style="list-style-type: none"> ・雪遊びを数多く経験できるようにする。 ・ねらい①の活動時間を十分に確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームや競争などを取り入れる。

図 2-4 初めてスキーを学習する学習指導の過程の例（文部省，1998，p. 28）

時	1 ~ X		支援	
0	め あ て ①	め あ て ②	<p>めあて①</p> <p>今できる滑り方でスキーを楽しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ブルークボーゲンで滑る。 (先生と、友達と、一人で) ・いろいろな斜面を滑る。 ・いろいろなリズムで滑る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・滑る回数を多くする。 ・斜面選びに配慮する。 ・長い距離を滑ることができるようになる。
45分			<p>めあて②</p> <p>新たな滑り方や自分の課題に挑戦してスキーを楽しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シュテムターンやパラレルターンに挑戦する。 ・自分の課題に挑戦する。 Aさん……技能の向上を目指して滑る。 Bさん……スピードを求めて滑る。 Cさん……友達と一緒にトレインで滑る。 Dさん……長い距離を滑る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・穏やかな斜面を設定する。 ・示範 ・ビデオ等の学習資料の準備 ・めあての例を提示する

図 2-5 スキー学習の経験がある集団の学習指導の過程の例 (文部省, 1998, p. 29)

小学校に入学する前からスキーを経験している子どももいるが、ほとんどの子どもがスキーの学習には初めて取り組む。スキーは、スキーウェアを着て、固いスキー靴を履き、身長ほどもあるスキーを装着し、普段の動きとは全く異なり、思ったとおりに動くことができなくなる。スキーは、スキー用具が身体と一体となって、思いどおりに動けるようになると、楽しさが増し上達も早くなる。したがって、単元の前半では、雪遊びをしたり、スキー用具の取り扱い、滑る感覚に慣れることをねらいとするような学習指導を位置づけることが重要であるといえる。スキーの操作や取り扱いに慣れてきた単元の後半では、友達同士で競争をしたり、どのくらいのタイムで滑ることが出来るかに挑戦したりするような機会を設定し、スキーを思い通りに操作しながらうまく滑る感覚を楽しませるようにする。

第2項 スキーの学習指導計画の作成ポイント

ここでは、指導計画の作成のポイントについて述べていくこととする。『体育授業づくり全発問・全指示⑩スキー・スケート』（明治図書出版株式会社発行）では、スキーをはじめはく1年生から、高学年が両スキーを平行にそろえてターン（パラレルターン）ができるところまでの追試ができる授業として具体的に紹介している。1人の教師が、数十人のスキーでうまく滑れる子や滑れない子どもをいっしょに指導するとき、どのような斜

面で、そのように声をかけて滑らせるかを、1年生、2年生、3～6年生と大きな三つのまとまりに分けて授業場面を設定している。そのなかで、3年生から6年生までは同じ授業ということではなく、子どもの実態に合わせて授業の構想を組み立てることの重要性を指摘している。以下の表 2-3 は、小学1年生のスキー遊びの指導計画と展開の例、表 2-4 は、小学2～6年生のスキー滑走の目標と単元についての例、表 2-5 は、小学2年生の指導計画と展開の例、表 2-6 は、小学3・4年生の指導計画と展開の例を示したものである。

表 2-3 小学1年生のスキー遊びの指導計画と展開の例 (根元, 1993, pp. 9-20)

① 単元	「スキー遊び」 はじめてスキーをはく子どもがプルーク(ハの字制御滑降)、そして直滑降(まっすぐ滑る)へ。
② 目標	・スキーやスキー用具の正しい使い方、身に付け方ができる。 ・スキーをはいて歩いたり、坂を登ることができる。 ・ごく緩い斜面を、転ばずにまっすぐ滑ることができる。
③ 単元について	「スキー遊び」では、スキーをはじめてはく1年生が、緩い斜面を一人で登って滑って降りてこれるまでを目標とする。 そのために 1. スキーのはき方、用具の使い方を習う。 2. スキーをはいて歩いたり滑走する 3. ごく緩い斜面を登ったり滑って降りる。 という順で学習する。
④ 指導計画(10時間)	第1次 スキーのはき方 ①時 第2次 平地で遊ぶ ②時、③④時 第3次 斜面で遊ぶ ⑤⑥⑦時、⑧⑨⑩時 ③④時は2時間続きで学校グラウンドに作った斜面、⑤⑥⑦、⑧⑨⑩時は、3時間続きでスキー場での学習
発問・指示	指導事項・留意事項
指示1 スキーの後ろを開き、片かなのハの字で滑りましょう。止まらない時は、後ろに転んで止まりましょう。	・登行後滑降するのが自然である。登行練習は最初の滑降練習と組み合わせ学習する。 ・最初の滑降学習種目は直滑降とせずにプルーク(ハの字滑降)がよい。子どもの恐怖心が減り安定性も高い。

スキーの恐怖心は、スキーの操作が未熟である時に、止まることができないかもしれないという焦りから生まれる。一度恐怖心を持ってしまった子どものなかには、なかなかその恐怖心が消えず、その後のスキーの学習に影響が出てしまうこともある。初めてスキーをはく子どものスキー指導は、まずはゆっくりと歩いたり、ごく緩い斜面を滑ったりせる。さらに、「転んでもこわくないよ」という声かけをするなど、転んでもさほど痛くないことを教えてあげることで、はやい段階から転倒する恐怖感をなくしてあげることが、スキーを学習していくうえでの支障を取り除くこととなるだろう。また、転び方によっては怪我をする恐れがあるので、はやい段階で転倒の仕方も身に付けておくことが大切である。

表 2-4 小学2年生～6年生のスキー滑降の目標と単元についての例(根元, 1993, pp. 24-25)

①単元	「スキー滑降」
②目標	<ul style="list-style-type: none"> ・2年生～安全に楽しく斜面を滑って降りることができる。 ・3・4年生～弧を描いてターンをしながら斜面を滑って降りることができる。 ・5・6年生～自分の思ったところでターンができ、長く急な斜面も滑って降りることができる
③単元について	<p>1年生で、スピードの制御・バランス感覚・停止の技術を学習した子どもは、斜面をただ滑るだけでなく、斜面で自分の滑る降りるコースを自由に選ぶために、またはスピード制御のためにターン操作を試みるようになる。</p> <p>スキーへの体重ののせ方、動作のリズムなど教師の適切な指導のもとで、子どものターン技術は飛躍的に向上し、ターンとターンがつながる連続回転へと発展する。</p>

表 2-5 小学2年生の指導計画と展開の例(根元, 1993, p. 32-39)

④ 指導計画(12時間) [2年生]	<p>第1次 スキーの基本操作を学ぶ(4時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①②時 直滑降から両スキーをハの字形に開いてまっすぐ滑る ③④時 斜めに滑ったり(斜滑降)斜めプルークで滑る。 <p>第2次 プルークボーゲンを学ぶ(8時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑤⑥⑦⑧時 プルークボーゲン(スキーをハの字形に開いたままでターンを連続させながら滑降する)で滑る。 ⑨⑩⑪⑫時 プルークボーゲンで長く滑る。
発問・指示	指導事項・留意事項
<p>発問1 ハの字に開いてターンをします。左にまがるには、右と左、どちらの足に力を入れるとよいでしょう。</p> <p>説明1 左にまがる時は、右足に力を入れればよいのです。右足を強く雪に押し付け、右ひざをちょっと内側にひねるとよく曲がります。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・左にまがる(左ターン)とは、本人が左にまがることを意味する。 ・「左にまがる」の意味が子どもに通じにくいので、はたなどを使って発問するとよい。「白はたでまがって赤はたに行くにはどちらの足に力を入れるとよいでしょう。」

教師が発問したり、技術について褒めたりする指導の場面では、「右ターンが良かったね」や「左ターンのとき、手がさがってしまうよ」などのように言うことがある。低学年ではまだ、右と左がはっきりとわからない児童もいる。したがって、左右にターンが出来るようになる小学2年頃から上記のような発問や、「右ターンは右に行くターン、左に行

くターンは左ターン、右足に体重をかけると左に行くよ、左足に体重をかけるとどっちに行くかな」といった発問をして、右ターン、左ターンという言葉の意味とスキーがターンする仕組みを覚えさせる。ここでしっかりと理解しておくことで、スムーズな指導が可能になる。

表 2-6 小学 3・4 年生の指導計画と展開の例 (根元, 1993, p. 33-53)

<p>指導計画(12 時間) [3・4 年生]</p>	<p>第1次 自分の力に応じた滑り方で楽しく滑る(4時間) ①②時 斜滑降やプルークボーゲンでたくさん滑る。 ③④時 スピーディーなプルークボーゲンで滑る。 第2次 山開きシュテムターンを学ぶ(8時間) ⑤⑥⑦⑧時 山開きシュテムターンで滑る。 ⑨⑩⑪⑫時 山開きシュテムターンやプルークボーゲンで長く滑る。</p>
<p>発問・指示</p>	<p>指導事項・留意事項</p>
<p>発問 1 片足 1 本で斜滑降をします。谷足と山足では、どちらの足 1 本で滑ったら良いでしょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どちらの足を上げると滑りやすいか問うてもよい。 ・オーバーに足を上げさせる。 ・谷足で滑ることを理解させる。
<p>説明 1 スキーで滑る時は、谷足に体重をのせて滑ると安定して滑れます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ☆テクニカルポイント: 谷足荷重がスキー滑降のポイント ・谷足で滑ると安定して滑れることを理解させる。
<p>指示 4 うーんとかっこよく滑りましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの滑りを見て、よいところに気づき、自分のできない原因を発見させていく。 ・スピードにのり、大きくのびのびとした滑りをさせる。 ・ビデオがあれば、録画して見せたい。

「谷足」または「谷側の足」、「山足」の「山側の足」は、指導の中でよく出てくるが、3・4 年生ではこれらの用語を理解しておくことが望ましい。のちに学習に必要であろう「内足」(ターンしているときの内側の足)、「外足」(ターンしているときの外側の足)という用語が出てきたときも理解しやすいであろう。理解が難しいため、谷足と山足、山足と外足は同じように使われることがあるが、本来は異なる意味である。「谷側のスキーにえいっ、と体重をかけたらくるっとまわった」などというように出来たことを表現したり、友だちの滑りを評価したり、友達と比較したりするときに、用語を理解していることでわかっているつもりなのにあまり出来ていなかったという発見をすることが多い。児童に模範を見せる時はおおげさに見せること、児童にも「思い切ってやってみよう」と声かけをする

ことがポイントである。スキー授業は準備等のマネジメントの時間が多くかかること、運動学習場面を増やすことが重要であるが、スキー授業のビデオ学習をすることはとても効果的であるといえる。

第3項 スキー授業の指導における注意点

ここでは、上述してきたスキーの指導のポイントに加えて、「子どものためのスキー教本」（高村雄治，1979，株式会社スキージャーナル発行）にもとづき、スキー授業の指導における注意点について述べる。

体育の授業では、課題となる動きを目指して、体を動かして練習する。スキー授業で児童は、提示された課題をまず頭の中でイメージする。練習はそのイメージに近づくための手段であり、イメージと練習が合致する時、技術は習得される。そのイメージなしに練習を試みることは盲目的な試行である。子どもの頭の中に、しっかりとしたイメージが出来上がって、はじめてそれを“からだ”で表現しようとする意識的な練習や意図的な練習が可能になる（p. 116）はっきりとしたイメージが出来上がっていないと、それぞれのイメージがあるかもしれないし、何をしたらいいか分からないままに滑ってしまうことになる。そこで、教師は少なくとも低学年で取り扱うレベルのプルークボーゲン、シュテムターンを示範してあげる必要があると考えられる。そうすると、スキー授業を指導する教師は、初歩的な専門知識と最低限の基本的技能が出来ることが必要である。これについて、原田は、教師は、「とにかく、滑ってみなければ授業に役立つ知識は得られない。本を見て滑り、先輩から話を聞いて滑り、いろいろな大会をみて滑り、各種の用具を使って滑ることである。忘れてはならないことは、得た知識を自分がいま指導しなければならない児童と、どう結びつけるかが課題」（原田，1995，p. 549）であると述べている。子どもたちと同じように、大人になってからスキーを始めても、同じようなつまずきや、発見をし、指導のポイントが分かるのではないか。したがって、スキーを得意としない教師がスキー学習をするためには、やはり教師も初心者からでもスキーを体験してみることが指導の向上につながるのではないかと考えられる。

さらに、イメージの伝達はわかりやすい言葉で伝えることが重要である。子どもたちの感覚として分かるような表現で、例えば、「チョークをカマトで踏みつけて粉にするような感じで」などとすると、理解を得やすいだろう（高村雄治，1979，p. 117）。スキーの技術を言葉で伝えることが難しいのは、スキー動きは普段の生活の中では似たような動きがないためである。高村は、「運動学習での示範の役割は重要である」（高村雄治，1979，p. 117）とし、教師の示範とイメージについて、子どもたちは、「簡単な説明の中から得た技術要領と先生の示範とをオーバーラップさせ、目標とするイメージを作り上げていく。このとき、子どもたちが描くイメージは決して完璧なものではない。イメージは、繰り返される練習によって、あるいは視聴覚的な手段によって絶えず変化していくのである。練習初期に描いていたイメージは、練習が段階を踏むにつれてみるみるうちに修正されていくわけ

である」(高村雄治, 1979, p. 117)としている。さらに、「子どもたちは、指導者の滑りより仲間の滑りを見ることの方がはるかに多い。自分の順番を待つ間に、仲間の滑りで正しい先生の滑りのイメージが打ち消されてしまう。子どもたちはお互いにイメージ・ブローカーとして働いているのである」(高村雄治, 1979, p. 118)としている。つまり、仲間の中でうまく出来ていた子を評価したりすると、その児童に注目したり、真似をしやすい。児童の中から模範を出してあげるほうが、体つきや体力も似通っていてイメージしやすい。しかし、仲間のイメージに問題がある場合がある。高村は、「全体の三分の二が失敗する課題では、それらのイメージが強くなりグループ全体が成功をおさめることがなかなかできなくなる」(高村雄治, 1979, p. 119)としている。したがって、課題を設定する場合には、ほとんどの児童が達成できるだろうという課題を設定し、良いイメージを常に持てるような状況にすることが好ましい。これは班別学習の際も同じであろう。異学年合同授業でレベル別の班編成で上位、中位、下位の班が共に見えるところで練習している場合には、中位、下位の班が上位の班の子どもの滑りを見ることが出来るため、中位、下位班にとっては良いイメージを持つことができ、良いだろう。

また、スキーが他のスポーツと異なる点は、「示範する技術過程が同じであっても、斜度や雪の状態によって難度が一変する点にある。場合によっては、同じ技術であっても要領をまったく変えなくてはならないことすら生じる」(p. 118)ことである。例えば、沢山雪の降った次の日は深雪でスキー授業を実施することになるが、深雪ではスキーが進まなかったり、埋まってしまったりする。小さい子どもにとっては、腰のあたりまで降った雪の中を滑走するのは並大抵のことではない。深雪でうまく斜面を滑走するポイントは、強く踏み込まないことと、体重を後ろにかけ後傾で操作することである。平地を進むときは、ストックで漕ぐことをあまりせずに、スケーティングで進むことがポイントである。しかし、普段はその逆のことを指導されている。そのポイントさえ分かれば、深雪でのスキー授業はむしろ、子どもにとっては、ふかふかで転んでも痛くない楽しい授業となるのである。また、風の強い日は体を大きく広げて滑ると風の抵抗を受けスピードが弱まるし、小さくして滑るとスピードが速くなる。教師は、雪質や天候などの状況を判断し、的確なアドバイスができることが望ましい。

以上のこと踏まえて、次章ではスキー授業の学習指導プログラムを作成し、その実証的検討を行うこととする。

第3章 スキー授業の学習指導プログラムの実証的検討

第1節 実験校の地域特性とスキー授業の実施状況

第1項 鱒ヶ沢町のスキーに関する現状

スキー授業の学習指導プログラム授業は、青森県西津軽郡にある鱒ヶ沢町の A 小学校で行った。鱒ヶ沢町にはかつて町営のスキー場が存在し、町民スキー大会が開催されていた。大会はアルペンスキー種目とノルディックスキー種目のそれぞれがあり、町内の小・中学校の児童・生徒が個人や学校単位で参加し、賑わっていた。しかし、温暖化、不景気の影響で運営を停止することとなり、唯一の町民スキー大会がなくなったと同時に、体育授業からノルディックスキー種目が消え、アルペンスキー種目も徐々になくなっていったという経緯がある。現在は町内のスキー場はナクア白神スキーリゾート（旧鱒ヶ沢スキー場）のみである。競技スキークラブが練習のために使用したり、青森県スキー連盟が主催する県の大会も行われたりしている。地元のスキークラブによる町民スキー教室（無料）が行なわれているのも同スキー場である。

町内には現在公立小学校が 7 校、公立中学校が 2 校、県立高等学校が 1 校あるが、学校敷地内でスキー授業が行われているのは A 小学校のみである。ナクア白神スキーリゾートの協力のもと、スキー教室は町内の小・中・高等学校すべてで年に 1～2 回行われている。2012(平成 24)年度はそれぞれ統廃合し、小学校は 2 校、中学校は 1 校となり、A 小学校は廃校となる 1 校である。

第2項 小規模校の体育の実態

今回実験校の対象となった A 小学校は全校児童 44 名の小規模校であった。したがって、小規模校の体育について触れておく必要がある。赤羽根（2003）は、小規模校における体育の実践から、小規模校の授業のメリットと課題、2 学年合同の体育、可能になるティーム・ティーチング、異学年による学習経験の意味を次のように述べている。

「小規模校のメリットは、子どもひとりひとりにきめ細かい指導ができることで、個人の進度に応じた課題や学習プリントを与えたり、それを教師がじっくりと時間をかけて指導したりすることができることである。このような個別指導の結果、一人ひとりの進度に合わせて学力を高めることが可能になる。しかし、問題点もある。一つは人間関係や学力差が固定化されていること、二つ目は集団で学習することに意味がある教科では学習成果をあげることが困難であることである。集団的スポーツの良さを味わわせることができず、それどころか、一人が欠席するとゲームが成り立たないこともある。そこで 2 学年合同の体育を実施することにした。いわゆる複式学級による体育授業である。この結果、人数的な問題点はかなり解消された。異学年合同の体育は、指導形態として、

ティーム・ティーチングを可能にする。ティーム・ティーチングによる学習は、役割分担の仕方により様々な学習効果が期待できる。例えば、全体指導と個別指導を分担することで、個人の変容に深く関わるのが可能になるし、また、種目によっては、課題別グループに分けてそれを二人の教師が分担して指導することもできる。異学年合同の体育では、必然的に年齢差のある子どもたちが一緒に学習することになるが、このことの意味は非常に大きいと考えられる。年齢の枠を越えた関わりが少なくなった現在、異学年合同の体育は幅広い人間関係を育てる可能性が期待できる。授業をすすめる上では、年齢差は個人差として捉え、グループづくりでは、異学年が均等に混ざり合うようにすることが基本であるが、目的により、柔軟な編成が工夫されてよいと思われる」（赤羽根，2003，pp. 14-15）

小規模校では、児童数が少ないため教師の目が行き届きやすい。したがって、個に応じた指導をしやすい、体育の授業であれば個々の運動学習の機会が多くなる。しかし、だからといってすべての児童がうまくなるというわけではない。

赤羽根（2003）は、異学年合同の体育授業に対する評価の調査も行っている。5・6年生を対象に10項目で、単独で行う授業と比べてどうかを回答させていた。その結果、「子ども達は異学年合同の体育の方を高く評価している。中でも子ども達が最も評価したのは、『楽しい』と『たくさんチームとゲームや練習ができて楽しい』の2項目である。これについては全員が『とても思う』『思う』と答えた」（赤羽根，2003，p. 17）ことを報告している。また、「『やる気』『協力・支え合い』『工夫』『仲良くなる』などの、人間関係や学び方についても、8割以上が肯定的に評価している」（赤羽根，2003，p. 17）も述べている。しかし、「『じょうずになったか』については、8割の児童が肯定的に評価したのに対し、2割の児童は『おもわない』としている」（赤羽根，2003，p. 17）ことから、これらの児童に対するきめ細かい指導が課題であると述べていた。教師からの声かけについても単独の授業と変わらないという回答が多く、課題があるとしており、異学年合同の授業であっても、教師と生徒の割合はほぼ変わらないことから、指導の工夫が必要であると考えられる。

第2節 小学校低・中学年対象としたスキー授業の学習指導プログラムの検証

第1項 検証授業の対象

2010（平成22）年1月18日から2010（平成22）年2月12日にかけて、青森県鯉ヶ沢町A小学校（小規模校）の1年生（女子5名）、2年生（女子7名）、3年生（男子4名、女子4名）の3学年を対象に10時間の合同授業（1時間目は1年生のみ）を行った。授業を担当したのは、1年生担任の女性教師（以降T1とする）、2・3年生担任の女性教師（以降T2とする）の計2名を中心に、月・火曜日の授業（3・4・5・6・8時間目）は非常勤の女

性教師（以降 T3 とする）が加わり計 3 名であった。3 名の教師はいずれもスキー指導の経験はあるが、スキーは専門ではなかった。

表 3-1 A 小学校の学年・男女別人数

	男子	女子	人数
1 年生	0 名	5 名	5 名
2 年生	0 名	7 名	7 名
3 年生	4 名	4 名	8 名
合計	4 名	16 名	20 名

第 2 項 スキー授業の学習指導プログラムの作成

スキー授業の学習指導プログラムを作成する上で、まずは授業の学習目標を明確に設定した。目標を設定するための手がかりとして、全日本スキー連盟のジュニアテストの実技種目と斜面設定を参考にした（表 3-2）。

表 3-2 全日本スキー連盟ジュニアテスト（財団法人全日本スキー連盟，2009，p. 254）

ジュニアテスト		
	実技種目	斜面設定
1 級	パラレルターン大回り	中急斜面
	パラレルターン小回り	中急斜面
	フリー滑走	中級コース
2 級	大回りターンが連続してできる	中～中急斜面・整地
	小回りターンが連続してできる	中斜面・整地
3 級	大回りターンが連続してできる	中斜面・整地
4 級	初歩的な大回りターンができる	緩中斜面・整地
5 級	プルークで大回りターンができる	緩斜面・整地
6 級	プルークで大回りができる	緩斜面・整地

そして、授業を実施してもらう教師に事前に対象となる児童のスキーの技能レベルをうかがい、昨年までの傾向から上記のジュニアテストの 4 級～6 級の実技種目に対応させたレベル 1～4 の目標を作成した（表 3-3）。レベル 1 からそれぞれ下位群、中位群、上位群の最初の目標とし、目標はそれぞれ上げていった。

表 3-3 目標

レベル1 (下位群)	ハの字でまっすぐに滑り、止まる
レベル2 (中位群)	ハの字でどちらかに曲がり、止まる
レベル3 (上位群)	ハの字で右、左に曲がる
レベル4	初歩的な大回りターンができる(パラレルターンを目指して)

目標を設定した後、実際のスキー授業の学習指導プログラムを作成した(図 3-1)。なお、作成にあたっては、子どもたちの実態を授業者である担任教師からうかがい、加えて A 小学校の学習環境を踏まえながら作成した。A 小学校のスキーの学習環境は良い条件が整っていて、学校敷地内には 20~30mほどの斜面があり、その手前は平地となっていて、斜面を滑走してスピードが出ても十分に止まることのできる距離があった。また、その平地は一周することができる広さがあり、他にグラウンドもスケータィングの競争などを行う十分な広さがあった。

時間 (分)	1時限 (1/18)	2時限 (1/22)	3時限 (1/25)	4時限 (1/29)	5時限 (2/1)	6時限 (2/8)	7時限 (2/12)	8時限 (2/15)	9時限 (2/19)	
5	ブーツの履き方など(1年生のみ)	・集合 ・挨拶 ・準備体操 ・用具・服装の点検 ・学習の理解 ・移動	・集合・挨拶 ・準備体操 ・用具・服装の点検 ・目標の確認							
10			テスト	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	
15		班ごとの学習								班ごとの学習
20			班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習		
25		雪遊び							テスト	両足スケータイングリレー
30			雪遊び	テスト	両足スケータイングリレー	テスト	片足スケータイングリレー	障害物滑走、競争		
35		雪遊び							テスト	両足スケータイングリレー
40			・集合 ・まとめ ・挨拶 ・後片付け							
45		事前アンケート	・学習カード ・形成的授業評価票の記入							・学習カード・形成的授業評価票・事後アンケート
				お昼休み		お昼休み				お昼休み
5										
10			ビデオ学習(15分)		ビデオ学習(15分)				ビデオ学習(15分)	
15										

図 3-1 スキー授業の単元計画

3 時限と 4 時限の授業の間に 1 回、5 時限と 6 時限の間に 1 回スキー教室が行われる。1 回目の授業でテストを行い、それ以降の授業は技能レベル別の班ごとの学習を中心に進めるように計画した。単元のなかでテストを 3 回実施し、その様子を撮影し、その日の滑りをビデオ学習で視聴するようにした。ビデオで自分の滑りを確認することで自分のイメージとの違いを発見することができるためビデオを見てから練習することは効果的であることから、単元の終わりではなく、単元の間でビデオ学習を取り入れることにした。

「平地での推進滑走は、傾斜面を滑るうえで必要なバランス感覚とスキー操作の原則的な要素を身に付けることができる」（全日本スキー連盟，2009，p.124）ことから、斜面を

滑走出来るようになってからも平地での動作を学習させたいと考えた。そこで、4時間目に「両足スケータングリレー」を位置づけることにした。この教材は「片足スケータングリレー」と区別するため「両足」としたが、スケータングでリレーをつなぐ競争である。スケータングは、「スキーをV字形にして、片方のスキーの角を踏み蹴って、もう片方のスキーへと乗り移」（全日本スキー連盟，2009，p.124）り進む方法である。「片足スケータングリレー」は、片方のスキーのみを装着して推進し、リレーをつなぐ競争である。そこでは、スキーを装着している足にうまくバランスを乗せ進み、スキーを装着していない足に乗り移り、すぐにストックを使って漕ぎながらスキーを装着している足に乗って進んでいくことが内容となる。

「障害物滑走」は、ポールを三角形に設置してくぐる教材である。左右に同じように設置し、左右で競争できるようにする。「ジャンプ」は、雪を積んで小さなコブを作り、滑らせることを意図した教材である。ある程度スピードに慣れた子どもは、体がふわっと浮くような感じに楽しさを覚える。バランス良く踏みきらないと、転倒したり、どちらかの足から着地したりしてしまう。ジャンプする時に後傾していると、スキーのテール（後端）から着地し、足に振動がきてしまう。

学習カードは毎授業の最後を書くようにし、次回の目標と友達からのアドバイスを書き込めるようにした。これによって、毎授業の目標を意識することができ、アドバイスをするために友達の滑りをみて学ぶことや、滑り方を自分の言葉で表現できるようにもなると考えた。

また、表 3-4 は、スキー授業の学習過程について示したものである。

表 3-4 スキー授業の具体的な学習過程

月	日	曜日	時間	学習内容
1	18	月	11:15~	①1年生のみ 事前アンケートの記入、ブーツの履き方等
1	22	金	13:50~	②1~3年生 マナー、班分け、班長決め、班ごとの目標確認、班ごとの学習、雪遊び 班長を決める。班のみんなが目標を達成出来るように協力して教え合う。班長は班の出来栄を最後に先生に報告するので、見ておくこと。ストックを人に向けないこと、振り回さないこと、ストックの先は常に後ろへ向けること、前にストックをつかないこと、一人一人間隔をあけて滑ること、人の邪魔にならないところへ移動すること等のマナーを知る。班ごとの学習。(※1年生は1年生だけの班)雪遊び。学習カード、形成的授業評価票の記入。班長は次回の目標を先生に聞き、班員に伝える。同じ班の誰か一人にアドバイスを書いてもらう。
1	25	月	11:15~	③1~3年生 班ごとの学習、テスト(ビデオ撮影)、ビデオ学習 目標の確認。班ごとの学習。班のみんなが目標を達成出来るように協力して教え合う。班長は班の出来栄を最後に先生に報告するので、見ておくこと。学習カード、形成的授業評価票の記入。友達にアドバイスを書いてもらう。ビデオ学習では、自分の滑りを手の位置(下がっていないか)、バランス(後傾になっていないか)、スタンス(狭すぎないか)、ターンの大きさ(小さすぎず、大きすぎないか)、スピード(早すぎないか、遅すぎないか)などに着眼して見る。みんなの滑りを見て、よいところを見つける。
1	27	水		スキー教室
1	29	金	13:50~	④1~3年生 班ごとの学習、両足スケータングリレー 目標の確認。班ごとの学習。班のみんなが目標を達成出来るように協力して教え合う。班長は班の出来栄を最後に先生に報告するので、見ておくこと。3つのチームに分け、両足スケータングリレー競走を行う。学習カード、形成的授業評価票の記入。友達にアドバイスを書いてもらう。
2	1	月	11:15~	⑤1~3年生 班ごとの学習、テスト(ビデオ撮影)、ビデオ学習 目標の確認。班ごとの学習。班のみんなが目標を達成出来るように協力して教え合う。班長は班の出来栄を最後に先生に報告するので、見ておくこと。学習カード、形成的授業評価票の記入。友達にアドバイスを書いてもらう。ビデオ学習では、自分の滑りを手の位置(下がっていないか)、バランス(後傾になっていないか)、スタンス(狭すぎないか)、ターンの大きさ(小さすぎず、大きすぎないか)、スピード(早すぎないか、遅すぎないか)などに着眼して見る。みんなの滑りを見て、よいところを見つける。
2	5	金		スキー教室
2	8	月	11:15~	⑥1~3年生 班ごとの学習、片足スケータングリレー 目標の確認。班ごとの学習。班のみんなが目標を達成出来るように協力して教え合う。班長は班の出来栄を最後に先生に報告するので、見ておくこと。3つのチームに分け、片足スケータングリレー競走を行う。学習カード、形成的授業評価票の記入。友達にアドバイスを書いてもらう。
2	12	金	13:50~	⑦1~3年生 班ごとの学習、障害物(ポールくぐる練習) 目標の確認。班ごとの学習。班のみんなが目標を達成出来るように協力して教え合う。班長は班の出来栄を最後に先生に報告するので、見ておくこと。ポールをくぐる。スタート地点を選んで、出来るところから行う。友達と競争してみる。学習カード、形成的授業評価票の記入。友達にアドバイスを書いてもらう。
2	15	月	11:15~	⑧1~3年生 班ごとの学習、障害物、ジャンプ(小さなコブを作って) 目標の確認。班ごとの学習。班のみんなが目標を達成出来るように協力して教え合う。班長は班の出来栄を最後に先生に報告するので、見ておくこと。ポールをくぐる。スタート地点を選んで、出来るところから行う。小さなコブをジャンプする。学習カード、形成的授業評価票の記入。友達にアドバイスを書いてもらう。
2	19	金	13:50~	⑨1~3年生 班ごとの練習、テスト 目標の確認。班ごとの学習。班のみんなが目標を達成出来るように協力して教え合う。班長は班の出来栄を最後に先生に報告するので、見ておくこと。テストを行う。学習カード、形成的授業評価票の記入。事後アンケートの記入。友達にアドバイスを書いてもらう。ビデオ学習では、自分の滑りを手の位置(下がっていないか)、バランス(後傾になっていないか)、スタンス(狭すぎないか)、ターンの大きさ(小さすぎず、大きすぎないか)、スピード(早すぎないか、遅すぎないか)などに着眼して見る。みんなの滑りを見て、よいところを見つける。

指導上の留意点としては、1年生に関しては、初めて学校でのスキー授業を経験するため、合同授業を行う前にブーツのはき方や脱ぎ方、ブーツを履いて歩く練習等を行っておくようにした。

それぞれの技能レベル別での学習については、児童ごとにポイントを絞ってアドバイスをするようにした。例えば、手の位置（下がっていないか、上がりすぎていないか）やバランス（後傾になっていないか、前傾し過ぎていないか、あるいは腰がひけてないか）、スタンス（狭すぎないか、広すぎないか）、ターン（大きすぎないか、リズムがあるか）、スピード（早すぎないか、遅すぎないか）などについてである。また、スキーティングについては、準備運動時に示範して教えていくことがきせつであると考え、学習過程に位置づけた。

表 3-5 は、授業の流れが明確になるように、2 時間目の指導案を示したものである。

表 3-5 2 時間目の指導案

分	学習内容及び学習活動	教師の指導
5 10	はじめ ・準備 ・集合・挨拶 ・準備体操 ・用具、服装の点検 ・今日の学習の理解 ・移動	用具の安全を確認する。本時の内容を説明する。
15	テスト。1人ずつ滑れるところから滑る。	1人ずつ滑れるところから滑らせる。レベルをだいたい分ける。
20	班分け後、班長を決める。目標を理解する。	レベル別に3班に分ける。班長を決めさせ、班ごとの目標を指示する。班のみんなが目標を達成出来るよう協力して教え合うよう指導する。
25 30	なか 班ごとの学習。	技術的アドバイスや、マナーについて教える。ストックを人に向けないこと、振り回さないこと、ストックの先は常に後ろへ向けること、前にストックをつかないこと、一人一人間隔をあけて滑ること、人の邪魔にならないところへ移動すること等。
35	雪遊び。雪だるまを作る、雪上に倒れてみるなど。	スキー靴を装着した動きに慣れさせるため、スキー靴を履いたまま、雪遊びを楽しませる。
40	まとめ ・集合 ・まとめ ・挨拶 ・後片付け	最後に班長に班の出来栄を聞く。
45	学習カード、形成的授業評価票の記入。班長は次回の目標を先生に聞き、班員に伝える。同じ班の誰か一人にアドバイスを書いてもらう。	学習カードの次回の目標は出来栄を見て、教師が班長に伝える。

はじめに教師は、スキーの破損やスキー靴のバックル（調節部分）の破損などがないか確認させるようにした。また着衣については、比較的暖かい日であったりすると、児童は帽子や手袋を着用せずに集合してしまう可能性があるため注意するようにした。スキーの

板のエッジは金属で出来ており、素早くこすれると布や皮膚を切ってしまうことがあるため、手袋や帽子を着用せずにスキーをすることは危険であるということを指導し、授業には必ず着用するよう指示をするようにした。また、児童が緊張していつも通りの滑りを出来ないことを避けるため、最初のテストのときはテストであるとは伝えずに実施するようにした。最初に指導する、「前にストックをつかないこと」とは、スピードがある中で、スピード制御のためにストックの先端を前方にさすと体に刺さる可能性があり危険であるために、班ごとの学習で教師が指導するようにした。

第3項 実際の学習指導過程

図 3-2 は、実際の学習指導過程について、表 3-6 は具体的な学習指導過程についてしめたものである。2 時間目と 3 時間目の授業の間と、7 時間目と 8 時間目の間に 1 回ずつスキー教室が実施された。

2 時間目、7 時間目については、教師が 2 名であったことや児童の準備、後片づけ等で授業時間が長引いてしまった。8 時間目に関しては、授業の途中で雨天となってしまったため、スキー授業を早く切り上げた。雨天または雪不足のために授業が中止になってしまった 3 時間目、5 時間目、9 時間目については、次の授業を 2 時間続きにすることで授業時間数を確保した。3 学年合同の授業のため、さらに他学年の体育授業と重複して行なうことが出来ないため、教師間で密な連絡が必要であった。また、事前に計画していたビデオ学習については、予想以上に児童のマネジメント場面が多くなると判断したため中止し、運動学習場面を潤沢に保障したり、色々な滑り方を試したりすることを重視し、テストについても最後の授業のみとした。

時間 (分)	1時間目 (1/18)	2時間目 (1/22)	3・4時間目 (1/26)	5・6時間目 (2/1)	7時間目 (2/3)	8時間目 (2/8)	9・10時間目 (2/12)																																																																													
5	事前アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ・準備 ・集合 ・挨拶 ・準備体操 ・用具 ・服装の点検 ・学習の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備 ・集合 ・挨拶 ・準備体操 ・用具 ・服装の点検 ・学習の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備・集合・挨拶 ・準備体操 ・用具 ・服装の点検 ・学習の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備・集合 ・挨拶 ・準備体操 ・用具 ・服装の点検 ・学習の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備・集合・挨拶 ・準備体操 ・用具 ・服装の点検 ・学習の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・準備・集合 ・挨拶 ・準備体操 ・用具 ・服装の点検 ・学習の理解 																																																																													
10	ブーツの履き方など(1年生のみ)							班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																																																																								
15													班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																																																																		
20																			班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																																																												
25		班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																																																																													
30																									班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																																																						
35																															班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																																																
40																																					班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																																										
45																																											班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																																				
50																																																	班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																														
55																																																							班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																								
60																																																													班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習																		
65																																																																			班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習												
70																																																																									班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習						
75																																																																															班ごとの学習 (テスト)	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習	班ごとの学習
80																																																																																				

図 3-2 実際に行った学習指導課程

表 3-6 具体的な学習過程

月	日	曜日	時間	学習内容
1	18	月	13:50～	1年生のみ ブーツの履き方、脱ぎ方、スキー靴を履く競争、スキー靴を装着して歩く練習、ウェアを着てブーツを履いたままトイレを済ます方法など。
1時間目				
1	22	金	13:50～	1～3年生 マナー、班分け、班ごとの目標確認、班ごとの学習
2時間目				ストックを人に向けない、振り回さない、ストックの先は常に後ろへ、斜めに前につかない(体に刺さる可能性があり危険)、一人一人間隔を空けて滑る、人の邪魔にならない場所へ移動する、などのマナー。班ごとの学習。教師からアドバイス、発問を受ける。形成的授業評価記入。
1	26	火	10:15～	1～3年生 班ごとの目標確認、班ごとの学習
3・4時間目				目標の確認。班ごとの学習。教師から、手の位置(下がっていないか)、バランス(後傾になっていないか)、スタンス(狭すぎないか)、ターンの大きさ(小さすぎず、大きすぎないか)、スピード(早すぎないか、遅すぎないか)、などのアドバイス、発問を受け、練習する。上級班はポールを立ててくぐる。形成的授業評価記入。
2	1	月	10:15～	1～3年生 リレー
5・6時間目				グラウンド(平地)にて3つのチームに分け、両足スケータングリレー。どうやったら速く滑ることができるか、作戦を練る。練習する。再度班別でスケータングリレー。スケータングについて学習する。随時教師からアドバイス、発問を受ける。児童による演示、練習。形成的授業評価記入。
2	3	水	13:50～	1～3年生 班ごとの目標確認、班ごとの学習
7時間目				目標の確認。ポールを使用した班ごとの学習。(班のみんなが良かったところを教え合えるよう、教師は発問の機会を作る。随時教師はアドバイス、発問。)形成的授業評価記入。
2	8	月	13:15～	1～3年生 ポールを使用した学習(雨のため早めに終了)
8時間目				ポールを使用した班ごとの学習。手の位置(下がっていないか)、バランス(後傾になっていないか)、スタンス(狭すぎないか)、ターンの大きさ(小さすぎず、大きすぎないか)、スピード(早すぎないか、遅すぎないか)などのアドバイス、発問を受け、練習する。形成的授業評価記入。
2	12	金	10:30～	1～3年生 テストに向けた練習
9・10時間目				目標の確認。ポールを使用した班ごとの学習。全体でのテストの練習。テストでの注意点(①ポールを正しく通る②ひざが曲がっているか、後傾になっていないか③ストックきちんとそろえているか④カニさん歩きできちんと登れるか)を確認。スタート地点を分け、出るところから行う。形成的授業評価記入。感想の発表。

2 時間目の授業ではまず、最初にレベル 1～3 を提示し、児童に確認させた。1 年生は平地で推進滑走の練習を中心に T1 が指導し、下位群内の 1 年生以外と中位群も共に T1 が指導し、推進滑走後斜面の滑走に挑戦させた。T2 は上位群を指導した。足ならしとして平地を 2 周した後に、1 年生はそのまま、それ以外の児童は斜面に登り、出来ることから滑走し、その場で下位群、中位群、上位群を振り分けた。1 年生は両足、片足それぞれで推進滑走を行った。下位、中位、上位については、それぞれレベル 1～3 を確認してスムーズに学習に入ることができた。

3・4 時間目は、T1 が下位群、T3 が中位群、T2 が上位群と指導の分担をした。本時の目標を確認し、それぞれの教師は指導の効率性を考え、スキーを装着せずに示範を示した。

5・6 時間目は斜面に積雪がなかったことから、グラウンドにおいて全員でスケーティングリレーを行った。チーム編成は上・中・下位群の児童が混ざり合うように編成し、特に作戦を立てる時に T1、T2、T3 それぞれがチームを担当し支援した。また児童数が足りないチームの一員としてリレーを行った。

ほとんどの授業で、児童同士の応援する声かけがあり、授業の雰囲気は良かったといえる。

また、授業が円滑に進められ、子どもたちの運動学習時間を十分に確保することができていたかを確認するために、実際の授業をビデオカメラで撮影し、授業場面記録法を用いて分析した。授業場面記録法とは、高橋ら（1994）によって開発されたもので、授業場面を「マネジメント」「学習指導」「認知学習」「運動学習」の 4 つに区分して記録する。それによって、①学習の成果に直接つながらないマネジメントの時間を把握することができる。②教師がクラス全体に直接的指導（説明、演示など）を頻繁に、あるいは長時間行うと学習の勢いを停滞させ、子どもの学習意欲を失わせてしまう。時系列で教師の学習指導場面を測定することによって、教師の介入のしかたの適否を知ることができる。③認知の学習も長くなりすぎたり、頻度が高くなったりすると評価を下げる。④子どもたちの運動学習時間を十分に確保することは、授業評価や学習成果を高めるうえできわめて重要である。この記録で、少なくとも運動学習場面が確保されたかどうかはわかるとされている。（高橋，2003，p. 36）また、対象となる学年や、取り扱う教材によって変化するが、運動学習が中心になる単元のなかの授業では、運動学習時間が十分に確保され、マネジメントや学習指導場面が少なくなることが望ましいとされ、とくに運動学習場面は最低 50%は確保しマネジメント場面は 20%を超えないようにすべきであるといわれている（高橋，2003，p. 37）。

その結果、は以下の表 3-7 ならびに図 3-3 のようになった。

表 3-7 スキー授業の期間記録

授業全体	授業全体	学習指導場面 (I)	認知学習場面 (A1)	運動学習場面 (A2)	マネジメント 場面(M)
2 時間目	54 分 00 秒	9%	10%	46%	35%
		4 分 40 秒	5 分 20 秒	25 分 10 秒	18 分 50 秒
3・4 時間目	76 分 20 秒	14%	8%	54%	24%
		10 分 50 秒	5 分 40 秒	41 分 30 秒	18 分 20 秒
5・6 時間目	72 分 40 秒	21%	18%	51%	10%
		15 分 20 秒	13 分 00 秒	36 分 50 秒	7 分 30 秒
7 時間目	53 分 00 秒	7%	11%	54%	28%
		3 分 40 秒	5 分 50 秒	28 分 40 秒	14 分 50 秒
8 時間目	37 分 40 秒	9%	18%	59%	14%
		3 分 10 秒	6 分 50 秒	22 分 20 秒	5 分 20 秒
9・10 時間目	76 分 30 秒	7%	12%	70%	11%
		5 分 30 秒	9 分 10 秒	53 分 30 秒	8 分 20 秒

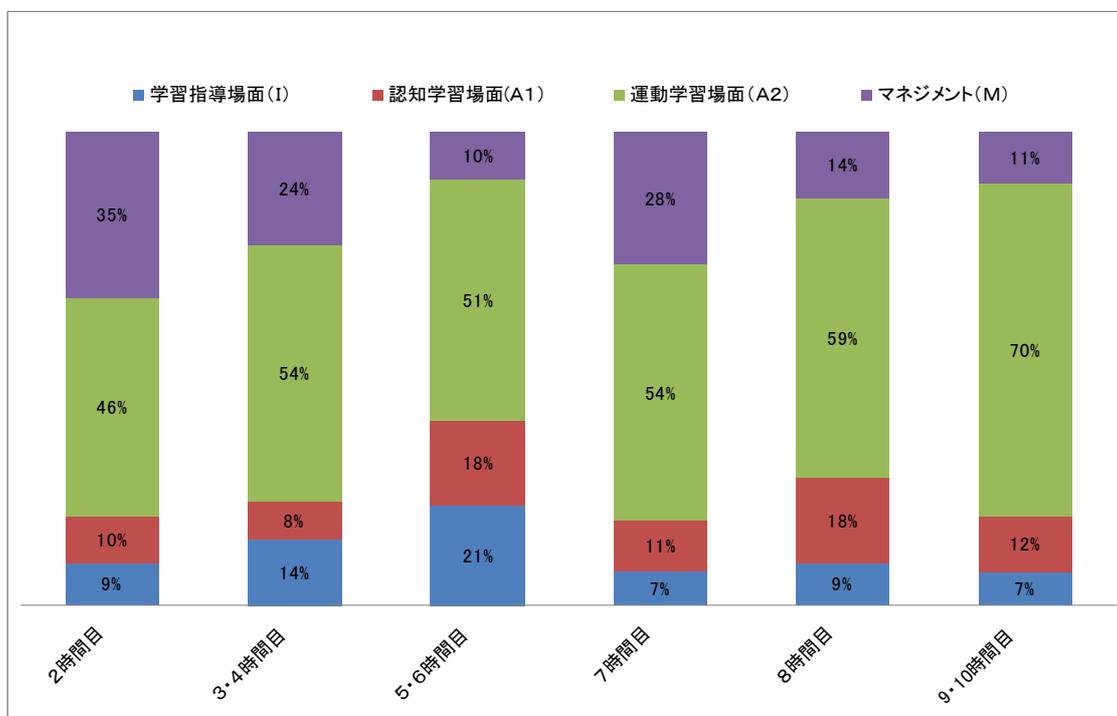


図 3-3 スキー授業の期間記録

前半はマネジメント場面が多くみられたが、後半になるとそれが少なくなり運動学習

場面が増加していることから、今回実施した学習指導プログラムでは学習者の運動学習の機会を十分に保証することができたといえる。これは、スキーの準備に時間がかからなくなっていったからであると考えられる。スキー授業では、ウェアを着る、スキー靴を履く、移動する、板を装着するなどの準備に時間がかかる。したがって、1年生は合同授業に入る前に準備の仕方を学習しておくことが必要である。しかし、特にスキー靴の裏に雪がつきやすい日などは雪上に行ってから7分弱かかったこともあった。雪質によってはなかなか自分でスキーを装着することが出来ない。そのため教師は、1人1人のスキーの装着のサポートをしたり、転んで起きられない児童を補助したりするなどなかなか授業を始められない状況がみられたりもした。

第4項 学習成果の検証方法

まず、学習者による主観的評価として、形成的授業評価（表3-9）を毎時間実施した。これは高橋（2003）によって開発されたもので、各質問項目に対して三件法で回答、「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点として点数化した。そして、1～3年生の結果全体の結果と、学年別、上・中・下位群別でグラフ化した。各群の内訳は、下位群は、1年生の女子が5名、2年生の女子が3名、3年生の男子が2名の計10名、中位群は、2年生の女子が2名、3年生の男子が1名、3年生の女子が2名の計5名、上位群は、2年生の女子が2名、3年生の男子が1名、3年生の女子が2名の計5名であった。

表3-8 技能レベル別人数

	下位		中位		上位		合計
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
1年生	0名	5名	0名	0名	0名	0名	5名
2年生	0名	3名	0名	2名	0名	2名	7名
3年生	2名	0名	1名	2名	1名	2名	8名
合計	2名	8名	1名	4名	1名	4名	20名

表 3-9 形成的授業評価票 (1・2・3 年生共通)

1	ふかくころにのこることや、かんだうすることがありましたか	はい	いいえ	どちらでもない
2	いままでできなかったことができるようになりましたか	はい	いいえ	どちらでもない
3	「あっ、わかった!」とか「あっ、そうか」とおもったことがありましたか	はい	いいえ	どちらでもない
4	せいいっぱいぜんりよくをつくしてうんどうすることができましたか	はい	いいえ	どちらでもない
5	たのしかったですか	はい	いいえ	どちらでもない
6	じぶんからすすんで、がくしゆうすることができましたか	はい	いいえ	どちらでもない
7	じぶんのめあてにむかって、なんかいもれんしゆうできましたか	はい	いいえ	どちらでもない
8	ともだちときょうりよくして、なかよくがくしゆうできましたか	はい	いいえ	どちらでもない
9	ともだちとおたがいにおしえたり、たすけたりしましたか	はい	いいえ	どちらでもない

また、以下表 3-10、表 3-11、表 3-12 表 3-13 は事前ならびに事後に実施したアンケートの調査票を示したものである。加えて、表 3-14 は年度末に実施したアンケートの調査票を示している。

表 3-10 事前アンケート (1 年生)

1	じゆぎょうはたのしみですか	はい	いいえ	ふつう	
2	スキーはすきですか	はい	いいえ	ふつう	やったことがない
3	もっとうまくなりたいですか	はい	いいえ	ふつう	
4	ちょっとてんきがわるくてもスキーをしたいですか	はい	いいえ	ふつう	
5	スピードがでるのがこわいです	はい	いいえ	ふつう	
6	ころぶのがこわいです	はい	いいえ	ふつう	
7	だれとスキーにいきたいですか	ひとり	ともだち	かぞく	そのほか()
8	いつもはだれとスキーに行きますか	ひとり	ともだち	かぞく	そのほか()
9	きょねんのふゆはなんかいスキーをしましたか			はい	はじめて

表 3-11 事後アンケート (1年生)

1	ことしのスキーじゅぎょうはたのしかったですか	はい	いいえ	ふつう	
2	スキーは好きですか	はい	いいえ	ふつう	
3	もっとうまくなりたいですか	はい	いいえ	ふつう	
4	ちょっとてんきがわるくてもスキーをしたいですか	はい	いいえ	ふつう	
5	スピードがでるのがこわいです	はい	いいえ	ふつう	
6	ころぶのがこわいです	はい	いいえ	ふつう	
7	だれとスキーにいきたいですか	ひとり	ともだち	かぞく	そのほか()

表 3-12 事前アンケート (2・3年生)

1	きょねんのスキーじゅぎょうは楽しかったですか	はい	いいえ	ふつう	
2	スキーは好きですか	はい	いいえ	ふつう	
3	もっとうまくなりたいですか	はい	いいえ	ふつう	
4	ちょっと天気がわるくてもスキーをしたいですか	はい	いいえ	ふつう	
5	スピードがでるのがこわいです	はい	いいえ	ふつう	
6	ころぶのがこわいです	はい	いいえ	ふつう	
7	だれとスキーに行きたいですか	1人	ともだち	かぞく	そのほか()
8	いつもはだれとスキーに行きますか	1人	ともだち	かぞく	そのほか()
9	きょねんは学校のほかでどのくらいスキーをしましたか	行ってない			回
10	いつも学校のほかで1シーズンどのくらいスキーをしますか	行かない			回

表 3-13 事後アンケート (2・3年生)

1	ことしのスキーじゅぎょうはたのしかったですか	はい	いいえ	ふつう	
2	スキーは好きですか	はい	いいえ	ふつう	
3	もっとうまくなりたいですか	はい	いいえ	ふつう	
4	ちょっとてんきがわるくてもスキーをしたいですか	はい	いいえ	ふつう	
5	スピードがでるのがこわいです	はい	いいえ	ふつう	
6	ころぶのがこわいです	はい	いいえ	ふつう	
7	だれとスキーにいきたいですか	ひとり	ともだち	かぞく	そのほか()

表 3-14 年度末アンケート (1・2・3年生共通)

1	ことしのふゆ、じゅぎょうのほかでだれかとスキーにいきましたか				
	いっていない	ひとり	ともだち	かぞく	そのほか()
2	ことしのふゆ、じゅぎょうのほかでなんかいスキーをしましたか				
	いっていない	かい			

スキーに関する質問項目を作成し、授業前と授業後の意識がどのように変わるか、また昨年との比較や学年による違いを調査する目的で行った。設問 1～6 に関しては、事前・事後で対応している。これらを下位群、中位群、上位群で分析した。それ以降の設問は事前・事後・年度末アンケートを組み合わせて対応するように作成した。年度末アンケートは、シーズンのスキー場での滑走日数を調査するため、年度末に実施してもらった。これらを 1～3 年生を学年別に比較した。事前・事後アンケートの設問 1～6 に関してはそれぞれ①と②の 2 つのグラフを作成し、①のグラフは「はい」を 3 点、「ふつう」を 2 点、「いいえ」を 1 点とし群の平均点を出した。②のグラフは、それぞれの人数の内訳をグラフ化した。

また、2 時間目と 10 時間目に実施したテストをデジタルビデオカメラで撮影し、公認スキー C 級検定員の資格を持った者 1 名によってパフォーマンス分析を行った。その際パフォーマンスの評価基準は、表 3-15 のように設定した。

表 3-15 パフォーマンスの評価基準

1	導入	数メートル転ばずに直滑降ができる(プルークでなくても)
2		プルークで停止することができる(ハの字で止まることができる)
3	ターン	プルークで、山回り(どちらかに曲がり)、停止ができる
4		プルークで山回りからスムーズに次のターンに入ることが出来る(谷まわり)
5		緩斜面でプルークで連続ターンができる
6		中斜面でプルークで連続ターンができる(全てのポールをくぐっているか)
7	姿勢	手の位置が下がっていないか(ストックきちんと構えているか)
8		ストックの先が前を向いていないか
9		良いポジションに乗っているか(膝が前に曲がっているか、後傾になっていないか)
10		目線が前を向いている

パフォーマンスは、大きく導入・ターン・姿勢と分け、さらに 10 項目に分け 10 点満点で採点した。特に授業では、ストックでスピードを制御するくせのある児童や目線が下を向いてしまう児童がいたため、それらを項目として加えた。

第3節 検証授業の結果と考察

第1項 主観的評価からみたプログラムの成果検証

表 3-16 ならびに図 3-4 は対象児童全体（1～3 年生）の形成的授業評価の結果と推移を示したものである。

表 3-16 全体（1～3 年生）の形成的授業評価の結果（N=20）

	2 時間目	3・4 時間目	5・6 時間目	7 時間目	8 時間目	9・10 時間目
総合評価	2.70 (4)	2.74 (4)	2.75 (4)	2.76 (4)	2.62 (4)	2.72 (4)
成果	2.45 (4)	2.57 (4)	2.55 (4)	2.54 (4)	2.46 (4)	2.53 (4)
意欲・関心	2.90 (4)	2.83 (4)	2.93 (4)	2.95 (4)	2.75 (3)	3.00 (5)
学び方	2.82 (5)	2.93 (5)	2.85 (5)	2.82 (5)	2.64 (4)	2.82 (5)
協力	2.78 (4)	2.73 (4)	2.78 (4)	2.84 (4)	2.72 (4)	2.62 (4)

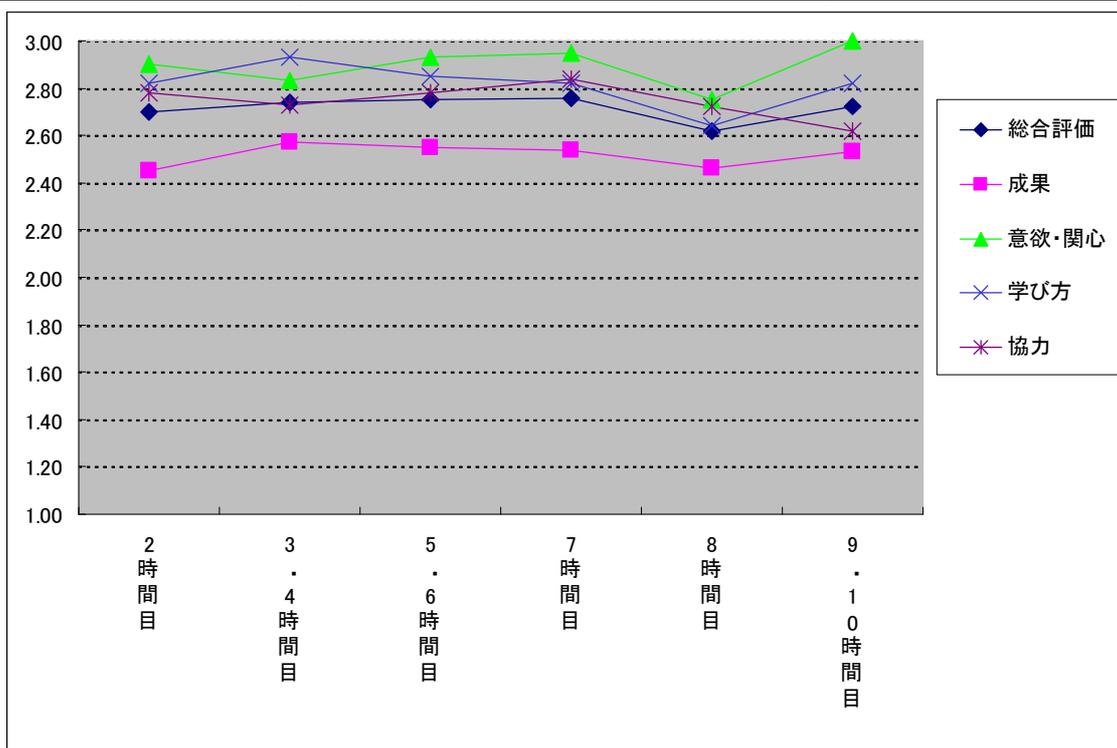


図 3-4 全体（1～3 年生）の形成的授業評価の推移（N=20）

1～3 年生全体での「総合評価」は常に 5 段階評価の「4」と高く、特に「意欲・関心」の次元は 8 時間目に一時的な減少がみられるが、最終的には対象児童全員が「はい」（3 点）と回答していることから今回実施したスキー授業の学習指導プログラムが児童に十分受け入れられていたことが確認された。8 時間目の低下の原因は途中から雨天となってしまう早めに授業を切り上げたことで、運動学習場面が短くなってしまったため

と推測される。9・10時間目はテストを行ったため、「協力」次元が低くなってしまったと考えられる。「成果」次元は他の次元に比較して低い評価であった。この点については、学年別ならびに技能レベル別に分析していく必要がある。「協力」次元は5・6時間目に高い評価を示していることから、スケーティングリレーにおいてチームで、協力しながら学習に取り組むことができていたからと推測される。しかし、それ以降下がっているが、その要因としては班別の学習場面ではみんなで助け合ったり教え合ったりする機会が少なかったからと考えられる。また、「協力」次元が下がると「学び方」次元が上がり、「学び方」次元が下がると「協力」次元が上がるという関係がこのグラフから読み取ることができる。スキー授業では、何回も練習が出できた日は、友達と協力して練習する場面はなかったが、友達とお互いに教え合ったりした日には、何回も練習できなかったということなる。

次に、学年別に、形成的授業評価の結果を分析してみる。表 3-17 ならびに図 3-5 は 1 年生の形成的授業評価の結果と推移を示したものである。

表 3-17 1 年生の形成的授業評価の結果 (N=5)

	2 時間目	3・4 時間目	5・6 時間目	7 時間目	8 時間目	9・10 時間目
総合評価	2.82 (5)	2.93 (5)	2.86 (5)	2.96 (5)	2.81 (5)	2.91 (5)
成果	2.73 (5)	3.00 (5)	2.67 (4)	2.93 (5)	2.67 (4)	2.73 (5)
意欲・関心	2.90 (4)	2.90 (4)	3.00 (5)	3.00 (5)	3.00 (5)	3.00 (5)
学び方	3.00 (5)	2.90 (5)	3.00 (5)	2.90 (5)	2.75 (4)	3.00 (5)
協力	2.70 (4)	2.90 (5)	2.90 (5)	3.00 (5)	2.88 (5)	3.00 (5)

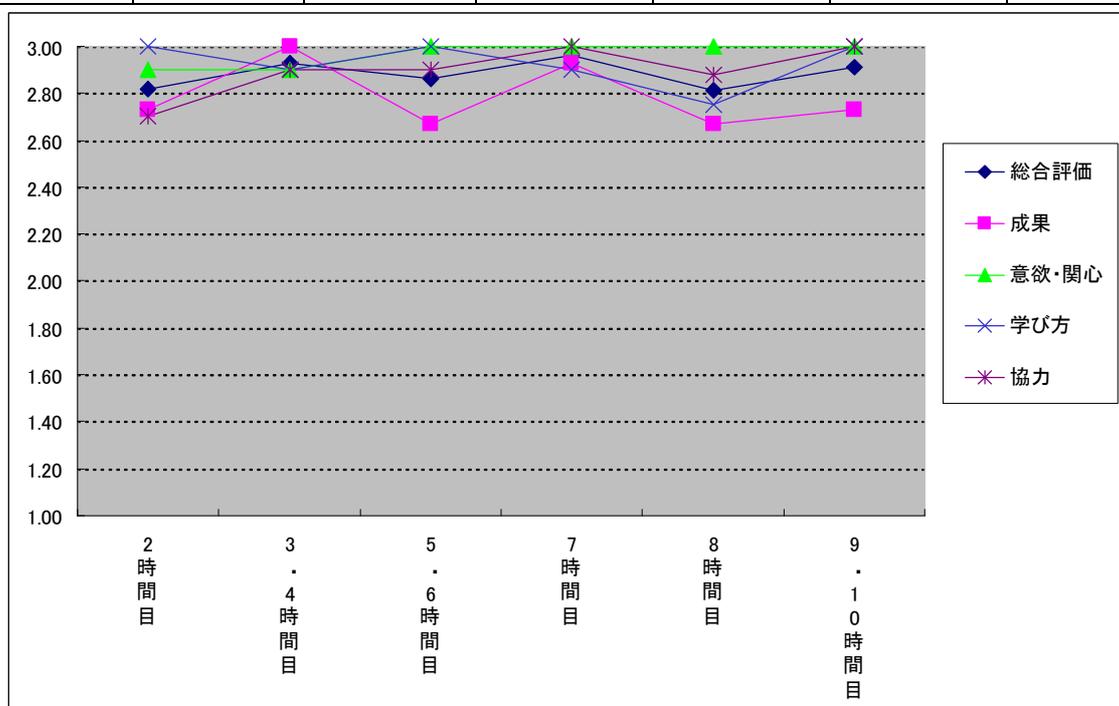


図 3-5 1 年生の形成的授業評価の推移 (N=5)

1 年生は、全体的にみて総合評価が高かった。特に、「意欲・関心」次元が高かったことから、初めてスキー授業を受ける 1 年生にも満足される学習指導プログラムであったといえる。しかし、5・6 時間目、8 時間目、9・10 時間目の「成果」次元は下がってしまっている。5・6 時間目の「成果」次元が下がってしまった要因としては、スケータリングが 1 年生にとって難しかったと考えられる。5 人中 3 人が、感想文のなかで「スケータリングが難しかった」あるいは「スケータリングを教えてください」といった不安な気持ちがかげがえた。「スケータリング」という言葉についても、「スケイティン」「ステーキング」「ステイテン」といったように 1 年生全員が誤った記述をしていた。一方で、スケータリングが出来ない 1 年生に、3 年生が教えてあげるような場面もみら

れた。

表 3-18 ならびに図 3-6 は 2 年生の形成的授業評価の結果と推移を示したものである。

表 3-18 2 年生の形成的授業評価の結果 (N=7)

	2 時間目	3・4 時間目	5・6 時間目	7 時間目	8 時間目	9・10 時間目
総合評価	2.83 (5)	2.92 (5)	2.84 (5)	2.90 (5)	2.92 (5)	2.78 (5)
成果	2.71 (5)	2.86 (5)	2.76 (5)	2.90 (5)	2.86 (5)	2.78 (5)
意欲・関心	3.00 (5)	2.86 (4)	3.00 (5)	3.00 (5)	3.00 (5)	3.00 (5)
学び方	2.79 (4)	3.00 (5)	2.79 (4)	2.86 (5)	3.00 (5)	2.67 (4)
協力	2.86 (5)	3.00 (5)	2.86 (5)	2.86 (5)	2.86 (5)	2.67 (4)

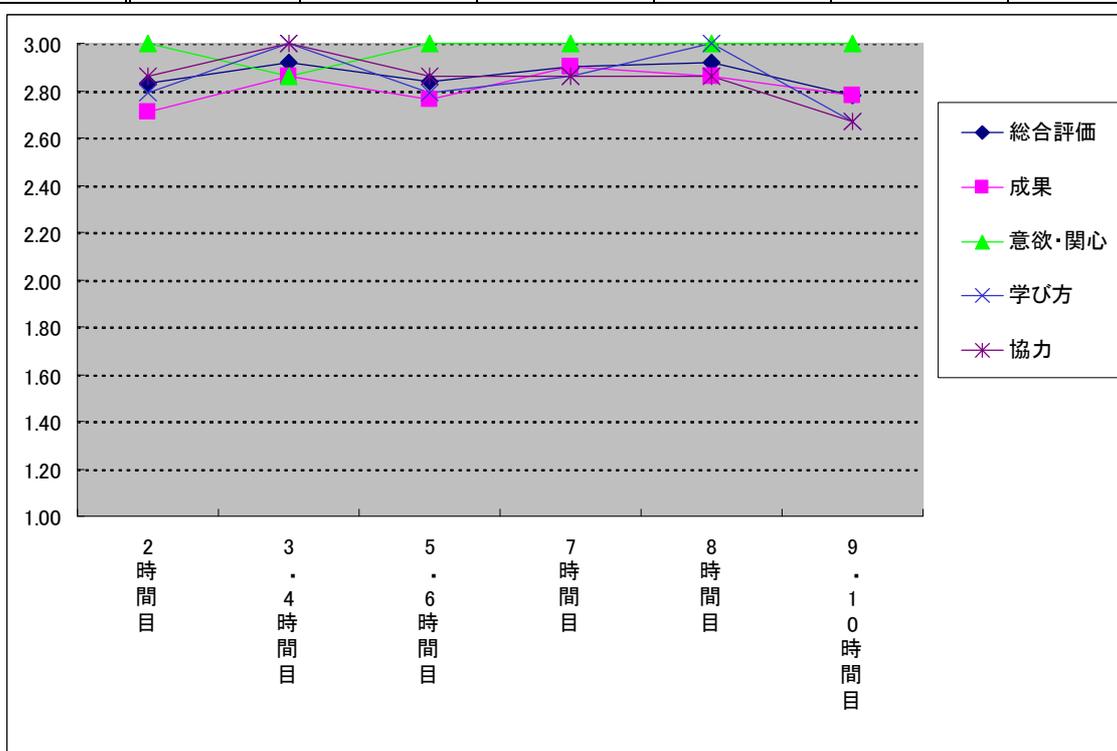


図 3-6 2 年生の形成的授業評価の推移 (N=7)

2 年生も 5 段階による「総合評価」は全て「5」であり、最初から評価が高く、それが維持されていた。これは、技能レベル別の学習指導により、レベルに適した技術的課題が提供されていたからであると考えられる。

表 3-19 ならびに図 3-7 は 3 年生の形成的授業評価の結果と推移を示したものである。

表 3-19 3 年生の形成的授業評価の結果 (N=8)

	2 時間目	3・4 時間目	5・6 時間目	7 時間目	8 時間目	9・10 時間目
総合評価	2.53 (3)	2.46 (3)	2.60 (4)	2.48 (3)	2.22 (2)	2.50 (3)
成果	2.04 (2)	2.04 (2)	2.29 (3)	1.90 (1)	1.95 (2)	2.11 (2)
意欲・関心	2.81 (3)	2.75 (3)	2.81 (3)	2.86 (4)	2.36 (1)	3.00 (5)
学び方	2.75 (4)	2.88 (5)	2.81 (5)	2.71 (4)	2.21 (2)	2.83 (5)
協力	2.75 (4)	2.38 (3)	2.63 (4)	2.71 (4)	2.50 (3)	2.25 (2)

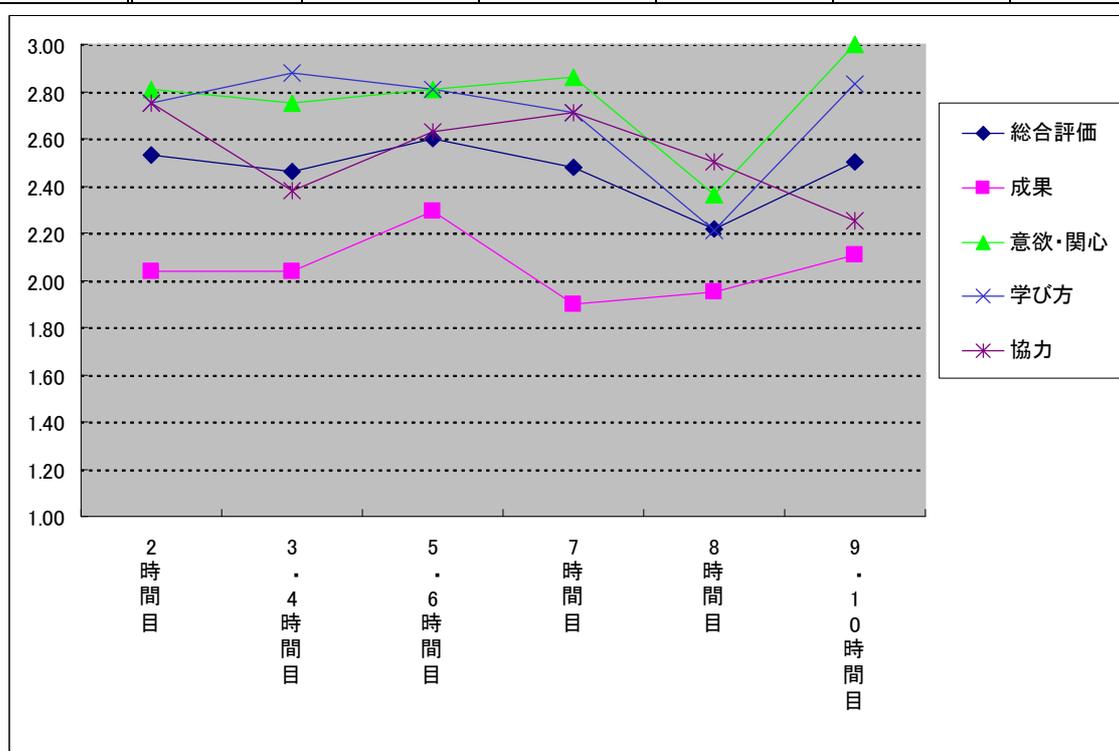


図 3-7 3 年生の形成的授業評価の推移 (N=8)

3 年生は、8 時間目の「意欲・関心」次元の低さの推移が顕著である。「学び方」も同じように低下していることから、その要因としては 8 時間目は雨天のため、1 人 2 回程度しか練習できなかったことに加えて、雪質が今までの授業の雪質と全く異なり、スキーが思うように操作できなかったことが 3 年生には大きく影響していると考えられる。それに対して 9・10 時間目の「意欲・関心」次元が高い値となっているのは、前述の期間記録の運動学習場面が多かったことと、教師がその場で付けた得点をテストの時知ることができたからではないかと推察される。また、3 年生は技能にばらつきがあったことから、技能レベルで具体的な検討をする必要がある。

次に、技能レベル別に、形成的授業評価の結果と推移について分析することとする。
表 3-20 ならびに図 3-8 は上位群の形成的授業評価の結果と推移を示したものである。

表 3-20 上位群の形成的授業評価の結果 (N=5)

	2 時間目	3・4 時間目	5・6 時間目	7 時間目	8 時間目	9・10 時間目
総合評価	2.62 (4)	2.51 (3)	2.73 (4)	2.60 (4)	2.24 (3)	2.83 (5)
成果	2.27 (3)	2.20 (3)	2.47 (4)	2.20 (3)	2.27 (3)	2.67 (4)
意欲・関心	2.80 (3)	2.70 (3)	2.90 (4)	2.90 (4)	2.30 (1)	3.00 (5)
学び方	2.60 (4)	2.80 (4)	2.90 (5)	2.80 (4)	2.50 (3)	3.00 (5)
協力	3.00 (5)	2.50 (3)	2.80 (4)	2.70 (4)	2.70 (4)	2.75 (4)

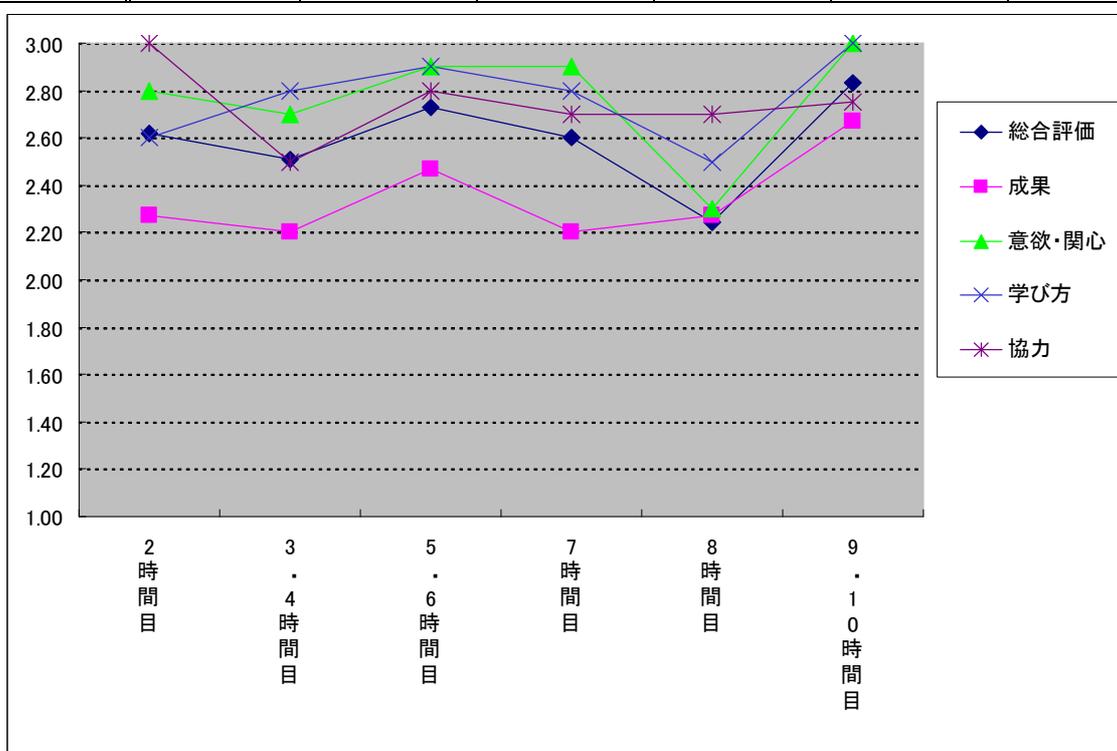


図 3-8 上位群の形成的授業評価の推移 (N=5)

2 時間目と 9・10 時間目を比較すると、総合評価が高くなっていることが分かる。「成果」、「意欲・関心」、「学び方」のそれぞれの次元でも高くなっている。このことから、上位群では技能に応じ設定した課題が適正であったといえる。

表 3-21 ならびに図 3-9 は、中位群の形成的授業評価の結果を示したものである。

表 3-21 中位群の形成的授業評価の結果 (N=5)

	2 時間目	3・4 時間目	5・6 時間目	7 時間目	8 時間目	9・10 時間目
総合評価	2.82 (5)	2.76 (4)	2.73 (4)	2.74 (4)	2.56 (3)	2.53 (3)
成果	2.73 (5)	2.53 (4)	2.67 (4)	2.53 (4)	2.40 (3)	2.25 (3)
意欲・関心	3.00 (5)	2.90 (4)	2.80 (3)	2.90 (4)	2.80 (3)	3.00 (5)
学び方	2.80(4)	3.00 (5)	2.80 (4)	2.80 (4)	2.50 (3)	2.75 (4)
協力	2.80 (4)	2.70 (4)	2.70 (4)	2.82 (4)	2.60 (3)	2.25 (2)

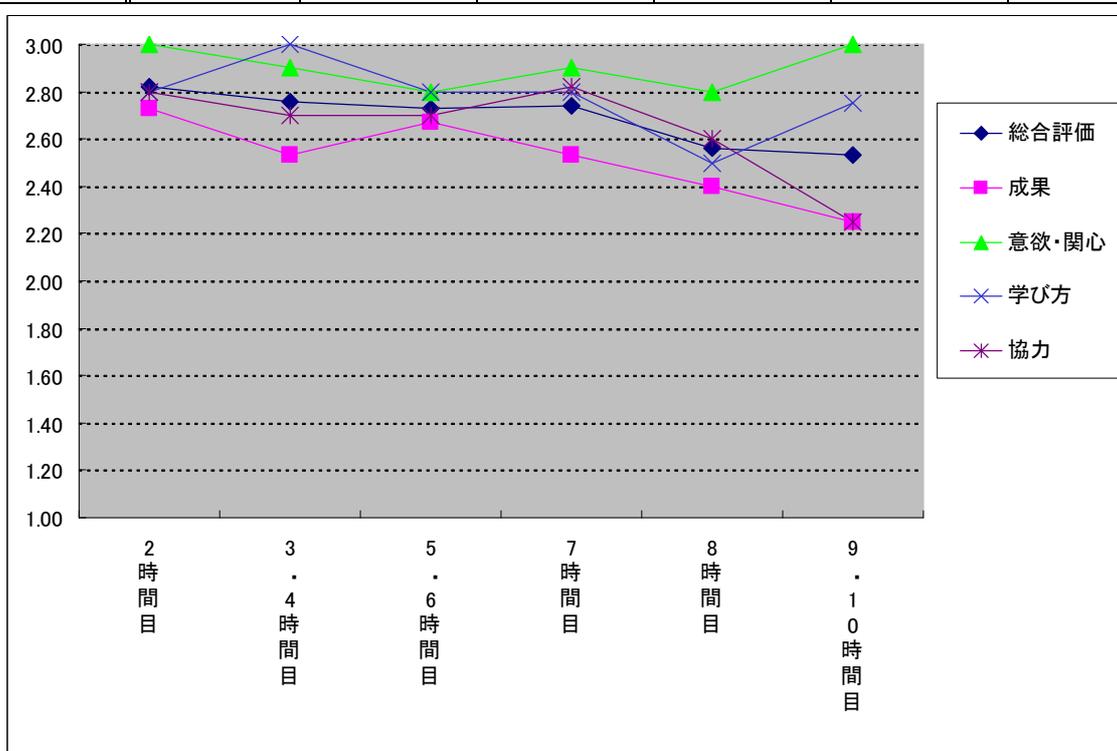


図 3-9 中位群の形成的授業評価の推移 (N=5)

中位群については、「総合評価」が後半に落ち込んでいることが確認できる。この要因としては、教師が 2 名の時は下位群と合同にならざるを得なかったこと、後半になって下位群の児童が中位群の技能レベルに近付いてきたりしたことなどで自らの技能を意識しすぎるようになってしまい「成果」次元の項目が下がったことなどが考えられる。

表 3-22 ならびに図 3-10 は下位群の形成的授業評価について示したものである。

表 3-22 下位群の形成的授業評価の結果 (N=10)

	2 時間目	3・4 時間目	5・6 時間目	7 時間目	8 時間目	9・10 時間目
総合評価	2.69 (4)	2.84 (5)	2.76 (4)	2.85 (5)	2.79 (5)	2.75 (4)
成果	2.40 (3)	2.77 (5)	2.53 (4)	2.74 (5)	2.63 (4)	2.59 (4)
意欲・関心	2.90 (4)	2.85 (4)	3.00 (5)	3.00 (5)	3.00 (5)	3.00 (5)
学び方	2.95 (5)	2.95 (5)	2.84 (5)	2.83 (5)	2.81 (5)	2.78 (4)
協力	2.65 (4)	2.85 (5)	2.80 (4)	2.89 (5)	2.81 (4)	2.72 (4)

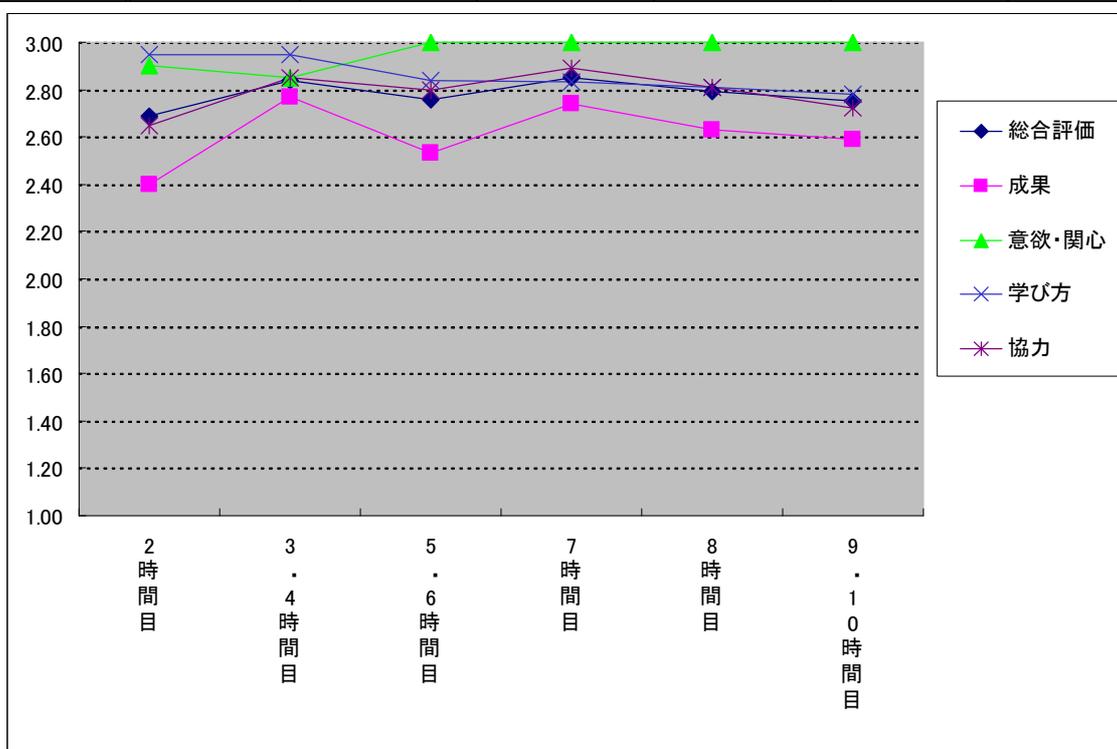


図 3-10 下位群の形成的授業評価の推移 (N=10)

下位群は、2 時間目と 9・10 時間目を比較すると「成果」次元が上がっていることが確認できる。これは、初めてスキー授業を経験する 1 年生がプルークターンを習得していったことが大きく影響していたと考えられる。後半になるにつれて、「意欲・関心」次元が高まっているが、「学び方」や「協力」次元については若干の低下がみられる。このことから、友達同士で競争したり、ゲーム的な要素を取り入れることが望ましいと考えられる。

次に、事前・事後アンケートの結果について分析していく。図 3-11 は上位群の事前・事後アンケートの比較グラフを示したものである。

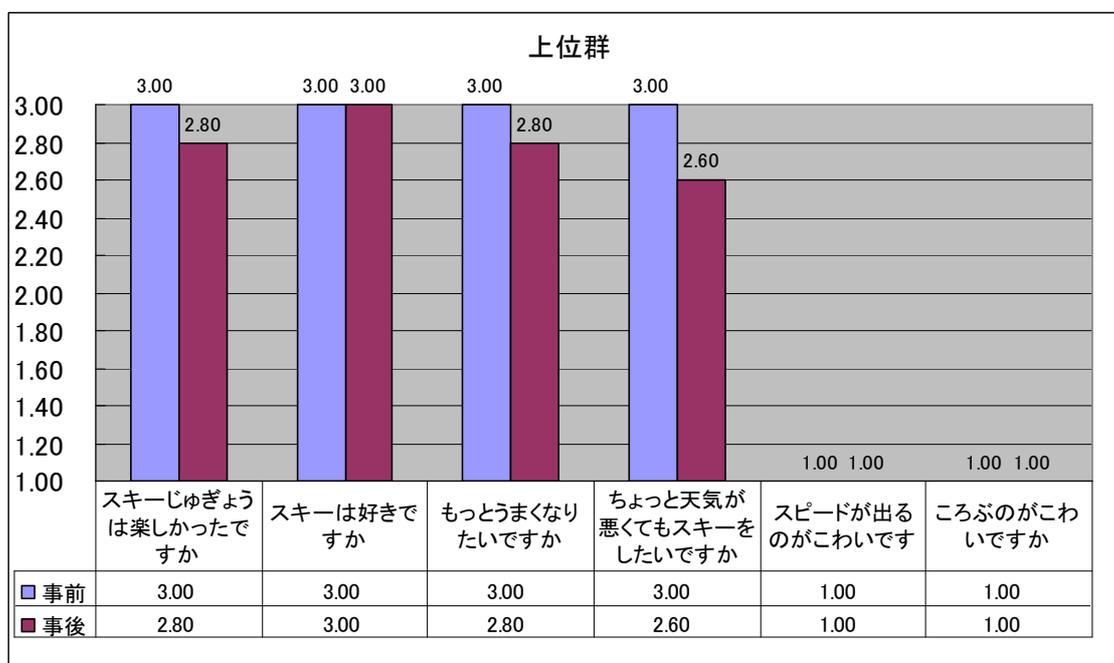


図 3-11 上位群の事前・事後アンケートの比較グラフ

上位群については、「スキー授業は楽しかったですか」、「もっとうまくなりたいですか」、「ちょっと天気が悪くてもスキーをしたいですか」の項目が下がってしまい、それに対して、「スピードが出るのがこわいです」、「ころぶのがこわいです」の項目については、「はい」または「ふつう」と回答した児童がいなかったことから、上位群は学校のスキー授業では恐怖感を味わうことはほとんどないと推察される。

図 3-12 は、中位群の事前・事後アンケートの比較グラフ示したものである。

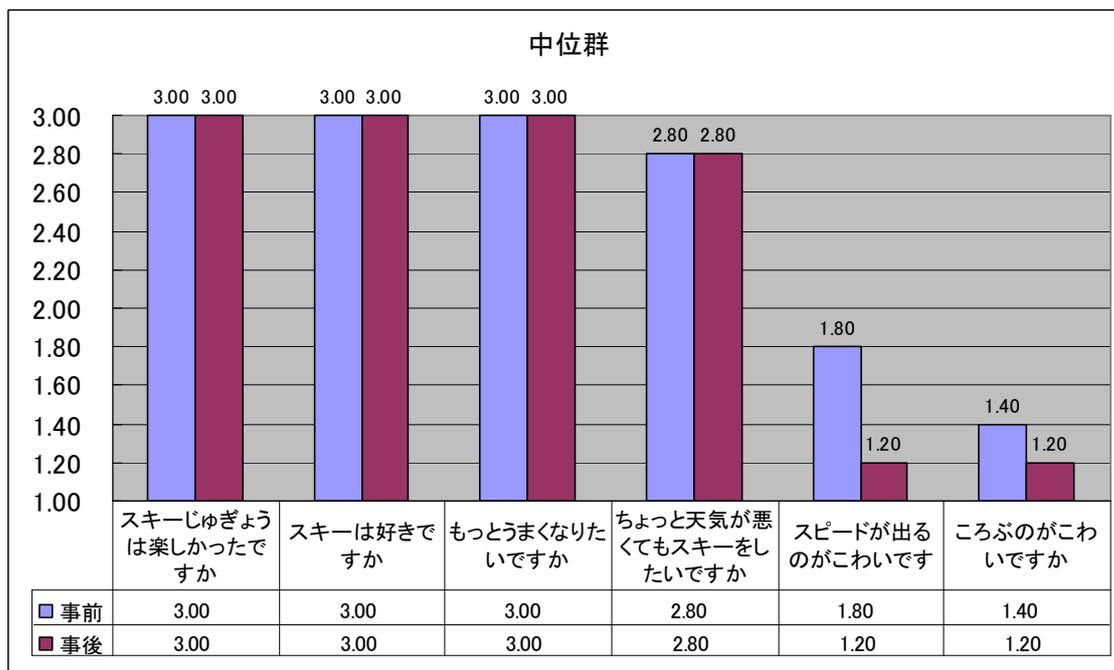


図 3-12 中位群の事前・事後アンケートの比較グラフ

中位群については、事前アンケートで 1 名が「スピードがでるのがこわいです」の項目に対して「はい」と答えているのに対して、事後アンケートは「はい」の回答がなくなっていることから、授業を通してこの児童はスピード感に対する恐怖心が弱くなったと考えられる。「スピードが出るのがこわいです」ならびに「ころぶのがこわいです」の項目を事前・事後で比較すると、ともに「いいえ」の回答が増えている。「スキー授業はたのしかったですか」、「スキーは好きですか」、「もっとうまくなりたいですか」の項目は、事前・事後ともに全員が「はい」と答えている。また、「ちょっと天気が悪くてもスキーをしたいですか」という項目に「いいえ」という回答がないことから、中位群はスキー授業が楽しかったとともに、恐怖心を少なくすることができたと推察される。

図 3-13 ならびに図 3-14 は、下位群の事前・事後アンケートの比較グラフを示したものである。

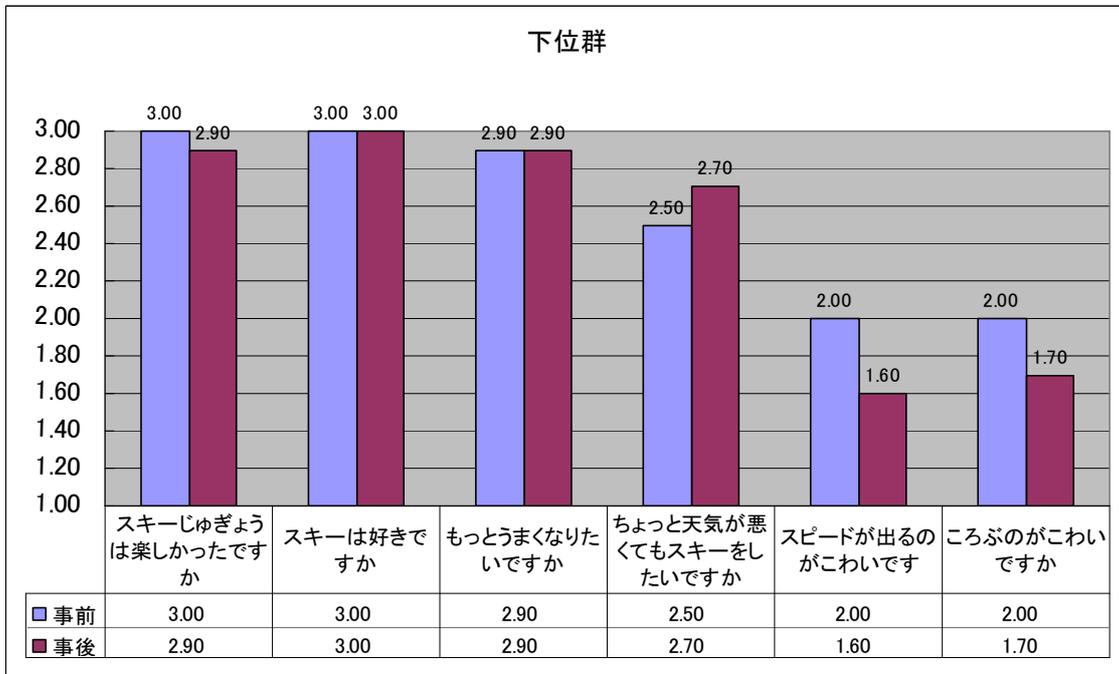


図 3-13 下位群の事前・事後アンケートの比較グラフ①

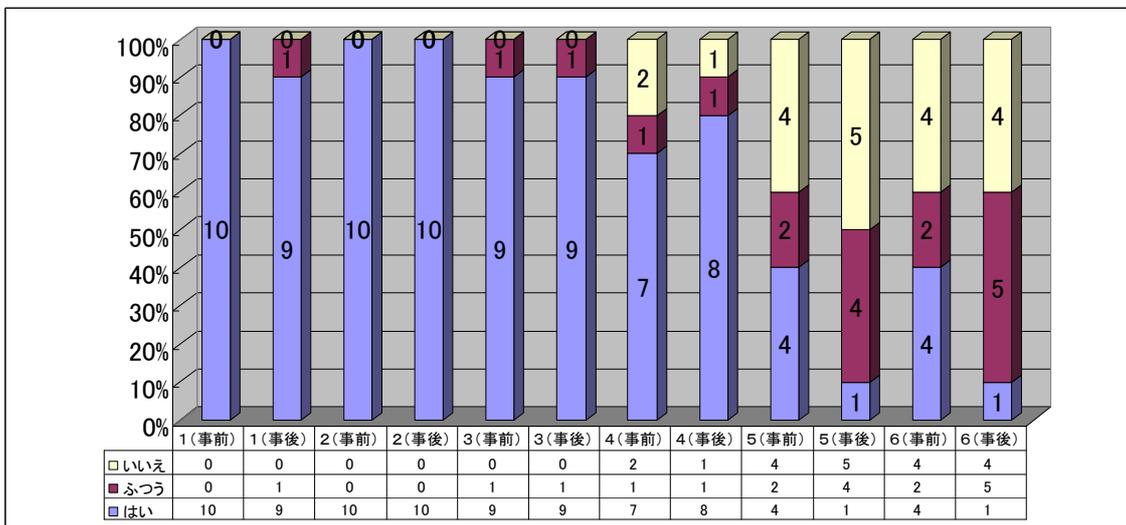


図 3-14 下位群の事前・事後アンケートの比較グラフ②

下位群は、「スピードが出るのがこわいです」ならびに「ころぶのがこわいです」の項目を事前・事後で比較すると、いずれも「はい」と回答した人数が減っている。このことから、下位群については、授業を通してスピードに対する恐怖感、転ぶことに対する

恐怖感が少なくなったと考えられ、レベルが上がるにつれて恐怖心は少なくなっていくといえる。また、「スキーは好きですか」に対して全員が好きであると答えていることから、今回学習指導プログラムの中に設定した教材が下位群の児童に適していたといえる。

事前・事後・年度末アンケートにはそれぞれ、「誰とスキーに行きたいですか（複数解答）」、「誰とスキーに行きましたか（複数解答）」、「去年授業以外で何回行きましたか」という設問を設けた。

その結果、1年生は、昨年スキーに行かなかったと答えた児童が5名中3名いたが、今年度は全員が授業以外で家族とスキーに行ったという結果となった。1年生は、家族または先生とスキーに行きたいと回答している。2年生は、事前アンケートでは7名全員が家族とスキーに行きたいと回答しているが、事後アンケートでは7名中6名が家族または友達とスキーに行きたいと回答している。7名中2名が去年授業以外でスキーに1回以上行ったと回答し、今年度も3名とあまり変化はなかった。3年生は、家族または友達とスキーに行きたいと回答しているが、友達に行きたいとしている割合が大きい。前年度に授業以外でスキーに行った3年生は8名中4名で、今年度は3名とあまり変化はなかった。どの学年も誰と行ったかに関しては、小学生のため家族が多く、次に友達が多かった。2、3年生くらいから、友達とスキーに行きたいと思うようになるということが分かる。ひとりでスキーに行きたいと回答した児童は3年生の1名のみで、他は家族や友達と答えたことからスキーが個人スポーツではあるが皆で楽しみたいスポーツであることが分かる。また、2、3年生の回答では、行きたい欲求はあるものの、実際には半数の児童は授業以外でスキーに行かないという結果となった。このことから、小学校低・中学年における学校体育のスキー授業が貴重な体験になっているといえる。この小学校には競技スキーのクラブ等に所属している児童はいなかったため、1年生から3年生の授業以外でスキーをした児童の年間滑走回数は、5回以内であった。

第2項 パフォーマンス評価からみたプログラムの成果検証

児童のスキーマのパフォーマンス評価は、パフォーマンス評価基準に基づいて得点化し、分析を行った。表3-23は上・中・下位群の事前・事後パフォーマンス評価の結果を人数で表し、図3-15は上・中・下位群の事前・事後パフォーマンス評価の結果を得点化しその平均を示している。事前テストは、2時間目の授業での滑りで、事後テストとは9・10時間目の滑りをそれぞれ評価した点数である。

表3-23 上・中・下位群の事前・事後パフォーマンス評価の結果（名）

		上位 (N=5)		中位 (N=5)		下位 (N=10)	
		事前	事後	事前	事後	事前	事後
①	導入	5	5	5	5	10	10
②		5	5	4	5	6	10
③	ターン	4	5	2	5	0	10
④		1	5	1	5	0	10
⑤		1	5	1	5	0	9
⑥		0	4	0	5	0	5
⑦	姿勢	4	2	5	4	9	9
⑧		0	5	2	4	0	6
⑨		5	5	3	4	5	3
⑩		4	3	3	2	6	9

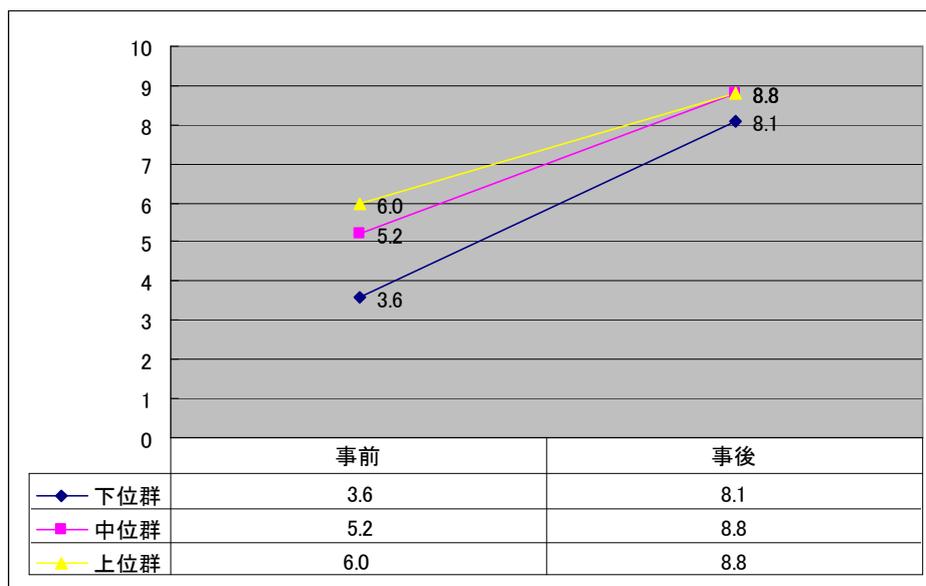


図3-15 上・中・下位群の事前・事後パフォーマンス評価の推移

まず全体的にみると、全ての群でパフォーマンスに伸びがみられた。なかでも下位群の伸びが一番顕著であった。下位群のうち、初めてスキーをする1年生全員がターンすることが出来るようになったことが大きく影響していると考えられる。学年別にみると、1年生は、事前では5名中3名がプルークで停止することができなかったが、事後は全員が「緩斜面でプルークで連続ターンができる」ようになっていた。2年生は、事前ではプルークで山回り（どちらかに曲がり）、停止ができなかったのが7名中6名だったが、事後は7名中5名が「中斜面でプルークの連続ターンができる」ようになった。3年生は、技能にばらつきがみられたが、7項目以下の項目の点数が、1・2年生より高かった。

次に技能レベル別にみると、まず、①～⑥の項目の結果、下位群の児童は③のプルークで、山回り（どちらかに曲がり）、停止、④のプルークで山回りからスムーズに次のターンに入ることができる（谷まわり）について事前は全員ができなかったのに対して、事後は全員が出来るようになった。⑤緩斜面でプルークで連続ターン、中斜面でのプルークでの連続ターンが出来る児童もあり、特に下位群の伸びがみられた。中位群、上位群の児童について見ても、④プルークで山回りからスムーズに次のターンに入ることができる、⑤緩斜面でプルークで連続ターンができるが事前では一人だったが、事後には全員ができるようになってきていることから、下位・中位・上位群全ての児童のターン技能が上がり、今回実施した学習プログラムは小学校低・中学年の児童にとって良い授業であったといえる。

また、姿勢の⑦～⑩項目の結果をみると、⑧のストックの先が前を向いていないかについては上位群と下位群で事前は0名だったが、事後は増えている。⑨の良いポジションに乗っているか（膝が前に曲がっているか、後傾になっていないか）は中位・上位群に比較して低い。ターンが出来るようになって、バランスがうまくとれなかったりすることで差があったと考えられる。また、⑦の手の位置が下がっていないか（ストックをきちんと構えているか）については上位群で下がっている。それぞれターンの技能が可能かで判断すると同じような結果となるが、質で判断すると異なるということになる。

このテストのみでは、児童のパフォーマンスを全面的に判断することはできない。より詳細なパフォーマンス評価を実施したり、様々な斜面や条件でテストを行ったりすることで、レベル間の差が生まれると考えられる。児童は雪質や斜面によっても得意不得意があると考えられるため、学習されていない技術を見つけるためにも様々な斜面や雪質で滑ってみることは有効であるといえる。しかし、現場の教師が一人一人の評価を細かく分析することは難しい。したがって、ターン技術だけで判断するのではなく、評価基準の7～10に相当するような姿勢や正確さ、またはリズムも評価に加える必要があると考える。

第4節 スキー授業の学習指導の修正プログラムの提案

第1項 学習指導プログラムの修正ポイント

実験授業で検証した学習指導プログラムには、スケートングリレーで仲間と協力することや、友達のスリをみて発問し、仲間のよいところを見つけ合うといったような機会を位置づけていたが、小学校低・中学年を対象とした授業であったため、教師がスキーの技術を指導し、児童が練習するといったような学習指導がスキー授業では授業が進めやすいと感じた。児童の「意欲・関心」を維持しながら、スキーのパフォーマンスを向上させていくためには、児童が夢中になって取り組むような教材が求められるのではないかと考えた。そこで、修正プログラムでは、毎授業の最後に競争を行うことや、敷地内を班ごとに好きなように探検をしてみる探検ゲームを行うことなどが修正ポイントとしてあげられる。探検ゲームでは、「登る」、「滑る」、「歩く」、「走る」、「くぐる」、「拾う」などの動作を含むようにすることで、様々な斜面をスキーで滑ることができるようになる。学校の校庭や敷地内を使用するスキー授業でも、十分に技能を高めることは可能である。

第2項 スキー授業の修正プログラム作成

表3-16は、スキー授業の修正プログラムを示したものである。はじめてスキー授業を経験する1年生には、1時間目のオリエンテーションで、ブーツの履き方や脱ぎ方を覚え、ブーツを履いて歩く、ブーツを素早く履く、脱ぐなどの練習を行わせる。この点については作成した学習指導プログラムと同様である。可能であれば、実際にスキーの装着までできるとよい。

また、技能レベル別の班ごとの学習では、難しすぎず、易しすぎない課題の設定が重要になる。ここで、毎授業の学習カードを参考にする。学習カードには今日の授業の感想を記入させるようにし、そうすることで児童は、難しかった日は「難しかった」とか「教えてください」などと直接に書いてくる。したがって、毎授業後に学習カードのチェックを行い、班ごとの学習課題は児童に適切であるかを確認するようにする。

また、異学年合同授業のメリットを生かし、単元のなかに全体で行うスケートングリレーや探検ゲームを位置づけることにする。実証的検討では、スケートングリレーを行った5・6時間目は形成的授業評価の「成果」次元は低かったが、「意欲・関心」次元は高かった。難しい技術であっても、みんなで行くと楽しめるという効果を活かして、同じ班で4・5時間目ならびに7・8時間目は行う。

結章

第1節 本研究のまとめ

本研究では小学校低・中学年のスキー授業の学習指導に関する研究を行った。第1章では、学校体育におけるスキー授業の実態と課題を明らかにするために、朝日新聞ならびに読売新聞に掲載されたスキー授業に関する調査結果と、北海道における小学校のスキー授業について検討を行っている三浦（1986, 1987a, 1987b, 1989）の論文を中心に分析した。次に、スキー授業における課題を指導者に関する課題、学習環境に関する課題、指導方法に関する課題、評価に関する課題の4つに分けて、具体的な事例にもとづきながら検討した。そして学校体育のスキー授業の意義とあり方について検討した。

近年学校体育のスキー授業が減少傾向にある。その要因として教師のスキー離れや経済的に負担がかかること、あるいは天候に左右されることから授業のやりくりが難しいなどが挙げられていた。指導者の問題としては、1人の教師が数十名一緒に指導しなくてはいけない指導形態が指摘されていた。また、スキー授業の指導には専門的知識が必要であること等が挙げられていた。体育の学習環境とは一般的に体育館や校庭などであるが、スキー授業の学習環境は、雪のある屋外に限られている。しかし、スキー授業は近くに特別なスキー場などがなくても近くの自然をうまく活用することによってスキー授業を行うことができる。指導者はスキー授業を取り扱おうとする時、学習環境については柔軟にとらえることが重要で、それによって実施が可能となる。また、スキー授業で児童が実際に滑っている時間は極めて短い。安全面からも一人一人間を空けて滑走したりするしたがって、スキー授業ではいかに運動学習場面を多くすることができるかが、よりよいスキー授業を実施するためのポイントと言える。スキーの評価も、目標を明確にすることでそれに対してしっかりと評価をおこなうことができる。しかしそのとき、従来のスキー指導にあったような型を重視した指導と評価にならないよう注意するべきである。

第2章では、スキー技術ならびに指導体系に関する理論的分析を試みた。全日本スキー連盟の指導書にみるスキー技術ならびに指導体系について述べ、次に児童期におけるスキー技術ならびに指導体系から、スキー技術の系統的つながりと学習指導過程を分析した。

全日本スキー連盟では、スキーに必要な運動技能の区分を①導入技術、②平地での移動技術、③傾斜地での移動技術の3つに分け、スキーの学習で最も多くの時間が割かれる③傾斜地での移動技術はさらに登る技術、滑り降りる技術、制動技術、実践的なターンに分けられている。これまでの技術指導は、手段である技術習得が目的となりスキーヤーから楽しさを奪う要因となっていたことから、一人一人の個性が尊重された個別的な指導の展開や、一方楽しさを発展させるための学習過程として、「現在持っている技能で工夫しながらのスキー学習」から「創意工夫によって新たに身につけた力での学習」へと進めるスパイラル学習が提案されている。スキーの技術は基本の姿勢（直滑降姿勢、プルーク姿勢、斜滑降姿勢）から回転技術（プルークボーゲン、シュテムターン、パラレルターン）のよ

うな流れで学習を行うことで、無理なく学習を進めることができる。子どもの指導では、単元の前半では、雪遊びをしたり、スキー用具の取り扱い、滑る感覚に慣れることをねらいとするような学習指導を位置づけ、スキーの操作や取扱いに慣れてきた単元の後半では、友達同士で競争をしたり、スキーを滑る感覚を楽しませるようにすることがポイントである。

第3章では、スキー授業の学習指導プログラムの実証的検討を行うために、実験校の地域的特性とスキー授業の実施状況を示し、実験校が小規模校であったため小規模校の体育の実態について触れ、それらを踏まえて、小学校低・中学年対象のスキー授業の学習指導プログラムを作成した。異学年合同授業で授業を行うため、技能レベル別の班（上位群・中位群・下位群）ごとの学習を中心に行った。検証授業は2010（平成22）年1月18日から2010（平成22）年2月12日にかけて、青森県鱒ヶ沢町A小学校（小規模校）の1年生（女子5名）、2年生（女子7名）、3年生（男子4名、女子4名）の3学年を対象に10時間の合同授業（1時間目は1年生のみ）を行った。授業を担当したのは、1年生担任の女性教師、2・3年生担任の女性教師の計2名を中心に、月・火曜日の授業（3・4・5・6・8時間目）は非常勤の女性教師が加わり計3名であった。3名の教師はいずれもスキー指導の経験はあるが、スキーは専門ではなかった。検証授業の結果と考察は、主観的評価とパフォーマンス評価によって検証した。主観的評価は形成的授業評価を毎時間実施し得点化した。パフォーマンス評価は基準を作成し得点を出した。

その結果、形成的授業評価は全体で「総合評価」は常に「4」と高く、今回実施したスキー授業の学習指導プログラムが児童に受け入れられていたことが確認された。スキーの授業は、単元のはじめはマネジメントが多くなってしまうが、オリエンテーション（ブーツのはき方等）をしっかり行うことで、後半にしたがって運動学習時間が増えていくことがわかった。またスキーは個人の技能差によって学習成果にばらつきがみられてしまう。したがって、異学年合同によって、学年別ではなく技能レベル別に実施したほうがよいということがわかった。パフォーマンス評価は全体的にみると、すべての群でパフォーマンスに伸びがみられた。初めて学校のスキー授業を体験する1年生は全員ターンすることが出来るようになった。上位群に関しては、ほとんどの児童が中斜面でのブルークターンができるようになった。

学習指導の修正ポイントは、難しい技術であっても、みんなで取り組むと楽しめるという効果を活かして、スケーティングリレーと探検ゲームを位置づけた。児童の「意欲・関心」を維持しながら、スキーのパフォーマンスを向上させていくためには、児童が夢中になって取り組むような教材が求められるのではないかと考えた。

第2節 今後の課題と展望

結論として、今回のスキーの学習指導プログラムは児童に十分受け入れられたことが確認された。また、学校の校庭や学校敷地内を利用したスキー授業でも、十分に技能を高めることが可能であった。本研究の実験校は小規模校だったため、比較対象、サンプル数が少なかった。今回のスキー授業の修正プログラムの実証的検討を行い、さらには、児童の「意欲・関心」を維持しながら、スキーのパフォーマンスを向上させていくための教材開発をすすめていくことが今後の展望となるだろう。

参考文献一覧

- 赤羽根直樹(2003)「小規模校での体育授業はどうあるべきか」*体育科教育* 51(3) : 14-17
朝日新聞(2004)11月29日付朝刊
朝日新聞(2005)2月4日付朝刊
朝日新聞(2006)3月31日付朝刊
朝日新聞(2007)1月17日付朝刊
北海道後志学校スキー研究会(1984)『学校スキーの指導法』第一法規出版 : 東京
法則化体育授業研究会・根元正雄(1993)『体育授業づくり全発問・全指示②—スキー・スケート—』明治図書出版株式会社 : 東京
原田亮(1995)「IVスキー・スケート」『学校体育授業事典』: pp544-549 大修館書店 : 東京
飯田茂(2007)「中学校養護学級における体育授業 「スキー」の展開と生徒の変化—冬期スキー学習を通して意欲と自信を引き出すために—」*体育科教育* 55(1) : 64-66
伊藤章一・栗林徹(1988)「岩手県内の小学校における冬季体育(スキー)実施状況の調査」*岩手大学教育学部附属教育工学センター教育工学研究* 10 : 175-185
岩井祐己(1997)「自発的な学習をめざしたスキー学習の展開」*学校体育* 50(13) : 61-65
岩手県一戸町立一戸小学校(2000)「地域の特性を生かしてスキーを取り入れた体育の授業づくり」*スポーツと健康* 32(7) : 17-20
三浦 裕(1986)「寒冷地体育の現状と課題(1) : 目標と学習内容の関連から」*北海道教育大学紀要*. 第一部. C, 教育科学編 36(2) : 113-121
三浦 裕(1987)「寒冷地体育の現状と課題(2) : スキー授業の実施状況について」*北海道教育大学紀要*第一部. C, 教育科学編 37 : 169-180
三浦裕 他(1987)「寒冷地体育の現状と課題(3) : 北海道の小学校におけるスキー授業について」*北海道教育大学紀要* 第一部. C, 教育科学編 38 : 201-216
三浦 裕(1988)「寒冷地体育の現状と課題 : (4)北海道の中学校におけるスキー授業について」*北海道教育大学紀要*. 第一部. C, 教育科学編 38(2) : 179-191
三浦 裕(1989)「寒冷地体育の現状と課題 : (5)道内の小学校におけるスキー授業の二次的分析」*北海道教育大学紀要*. 第一部. C, 教育科学編 40(1) : 115-128
三浦 裕(1991)「寒冷地体育の現状と課題 : (6)道内の中学校におけるスキー授業の二次的分析」*北海道教育大学紀要*. 第一部. C, 教育科学編 41(2) : 153-169
三浦裕・古川馨・飛弾野文彦・大塚美栄子・小林禎三・古川善夫・杉山喜一・前田和司(1996a)「新しい学力観に基いたスキー授業の工夫(1)～アルペン型スキー授業の学習指導計画～」*北海道教育大学冬季スポーツ教育研究センター『平成7年度教育研究学内特別経費研究報告書「北海道における冬季スポーツ教育システムの研究開発—学校体育領域を対象とした冬季スポーツ教材の研究開発」』* : 2-10
三浦裕・石垣正樹・久保隆義・大塚美栄子・小林禎三・古川善夫・杉山喜一・前田和司(1996b)「新しい学力観に基いたスキー授業の工夫～スキー教室の学習指導計画～」*北海道教育大*

学冬季スポーツ教育研究センター『平成7年度教育研究学内特別経費研究報告書「北海道における冬季スポーツ教育システムの研究開発—学校体育領域を対象とした冬季スポーツ教材の研究開発」』：23-31

三浦裕・高橋 一徳・伊藤 徳之 他(1997a)「小規模校におけるスキー授業の改善・充実—新十津川町立花月小学校におけるアルペンスキー,歩くスキー併用授業」へき地教育研究 51：1-8

三浦 裕(1997b)「スキー授業におけるつまづきの背景—指導計画および学習環境の整理と改善—」北海道教育大学教科教育学研究図書編集委員会『子どもの学びとつまづき—「わからない・できない」を活かす教科教育—』東京書籍：東京

三浦 裕・高橋 一徳・小林 禎三 他(1999)「小規模校における歩くスキー授業の工夫・改善—子どもたちの声を手がかりとして」へき地教育研究 53：67-74

三浦 裕・竹原 祥介・米田 健二・中村正道(2006)「北海道上川管内の中学校におけるスキー授業の現状と課題」へき地教育研究 61：1-8

文部省(1998)『学校体育実技指導資料第6集—スキーへようこそ—』株式会社東洋館出版社
本村清人・戸田芳雄(2003)『新しい課題に対応する中学校保健体育科の授業モデル4「自然とのかかわりの深い活動」編』明治図書出版株式会社：東京

永田昭司(1996)「養護学校（精神遅滞）におけるスキー指導」学校体育 49(1)：68-71

日本カリキュラム学会(2001)『現代カリキュラム事典』ぎょうせい：東京

日本体育施設協会(1970)『体育施設全書第9巻—冬季体育施設—』第一法規出版：東京

大出一水(1986)『野外教育・学校スキーの計画と指導』遊戯社：東京

佐藤隆、山川岩之助(1976)『学校スキーの計画と指導』第一法規出版：東京

新開谷 央(1982)「スキーの楽しさを生かした授業づくり」学校体育 35(2)：39-43

須田力(2006)『雪国の生活と身体活動』北海道大学出版会：北海道

高橋健夫 (2003)『体育授業を観察評価する』株式会社明和出版：東京

高村雄治(1979)『子どものためのスキー教本』株式会社スキージャーナル：東京

和田 忠(1985)「幼稚園におけるスキー指導に関する一考察」秋田大学教育学部教育研究所報(22)：12-24

読売新聞(2003)12月31日付朝刊

読売新聞(2007)2月18日付朝刊

読売新聞(2008)11月22日付朝刊

読売新聞(2010)3月11日付朝刊

財団法人全日本スキー連盟(2009)『スキー指導者必携』スキージャーナル株式会社：東京

財団法人全日本スキー連盟(2009)『自然で楽なスキーのすすめ』スキージャーナル株式会社：東京

財団法人全日本スキー連盟(2010)『スキー教程 安全編』スキージャーナル株式会社：東京

謝辞

本論文の作成にあたり、指導教官である吉永武史先生、そして友添秀則先生には終始丁寧にご指導いただきました。論文作成のみならず、就職などに関するアドバイスもいただき、いつも応援してくださいました。助手の稲葉佳奈子さん、渡辺輝也さんには、論文の書き方など、幼稚な質問にも優しくアドバイスしてくださいました。また、本論文審査を受けていただきました宮内孝知先生にも心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

今回実験校として協力していただいた、そして私の小学校時代の恩師でもある木村由加子先生、赤石小学校の皆さま、鱒ヶ沢町の情報をくださった鱒ヶ沢町教育委員会今一仁さん、技術的指導をくださった SAJ ナショナルデモンストレーター中田良子さん、ナクア白神スキースクール校長葛西英治先生、その他指導をくださった大鰐中学校教諭木村修先生、日本体育学会でアドバイスをくださった北翔大学竹田唯史先生に感謝したいと思います。

そして、同研究室でお世話になりました博士課程の岡部さん、春日さん、長島さん、修士課程の仲間感謝したいと思います。この研究室で学べたことで、この2年間は精神的にも成長できたように思います。本当にありがとうございました。